

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ

古志本郷遺跡Ⅱ

2001年3月

国地方整備局出雲工事事務所
教育委員会



調査前航空写真（1991年5月撮影）

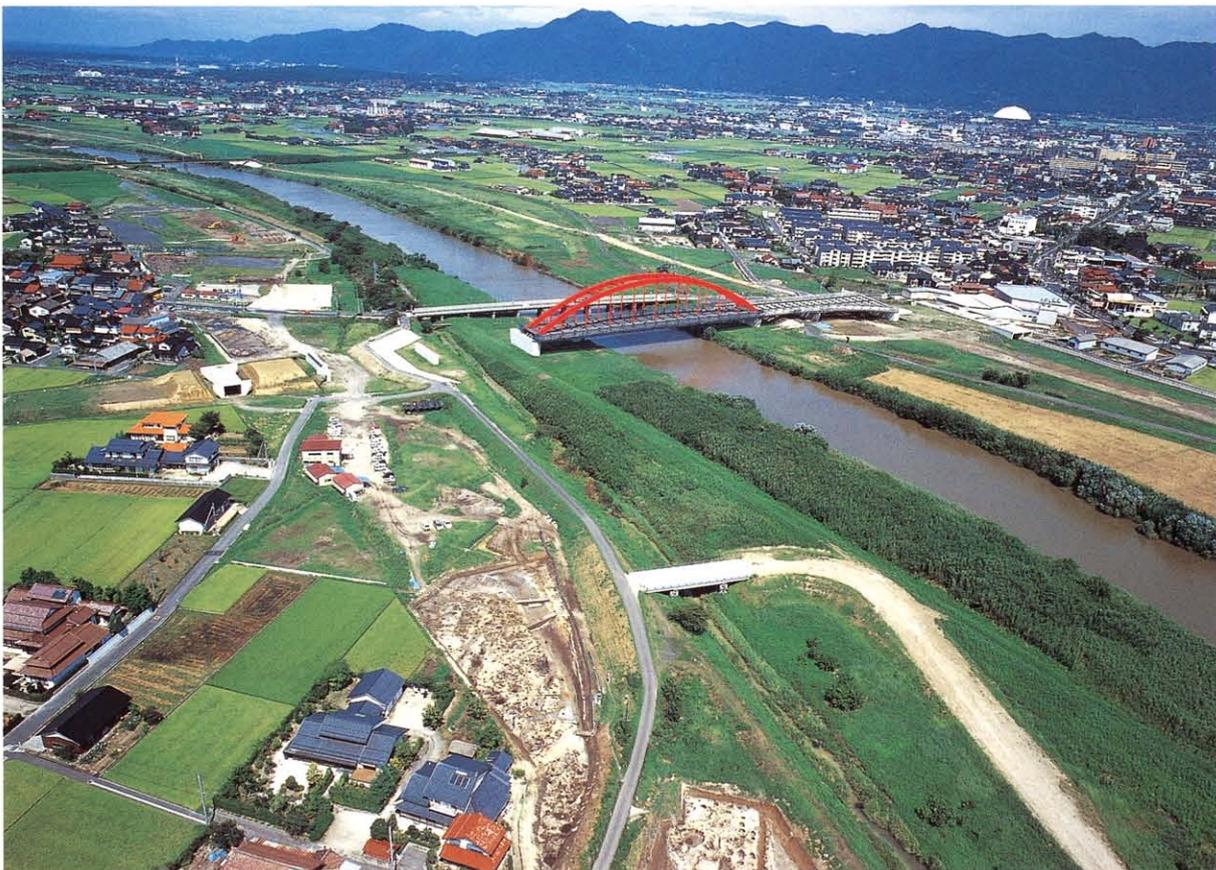


HI区近景

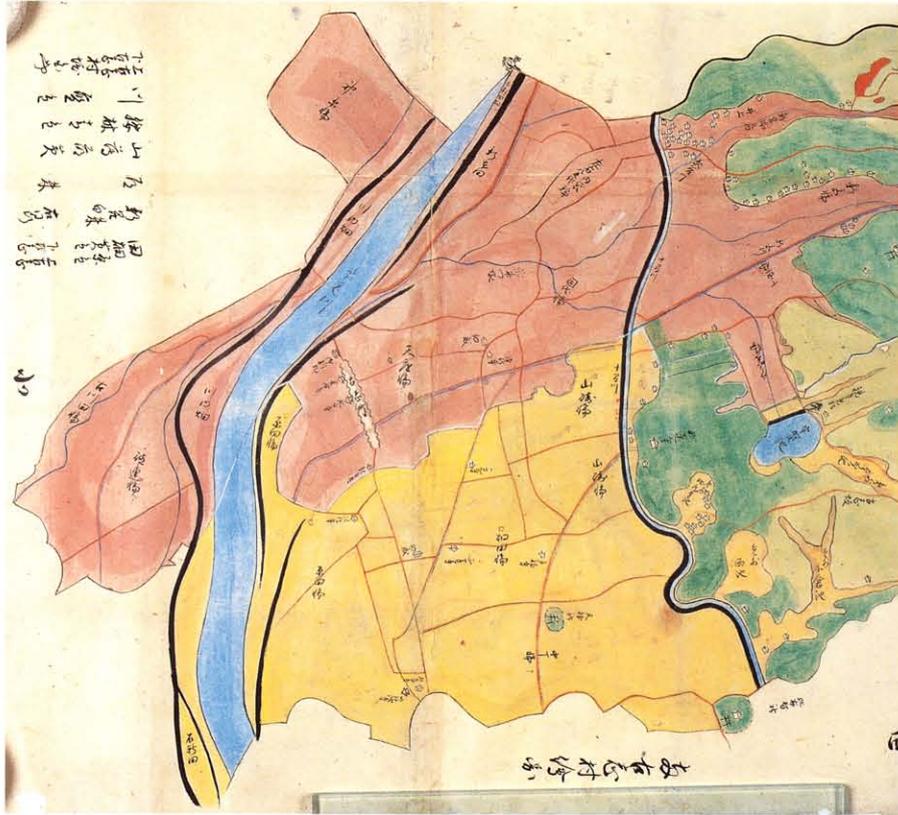
巻頭図版2



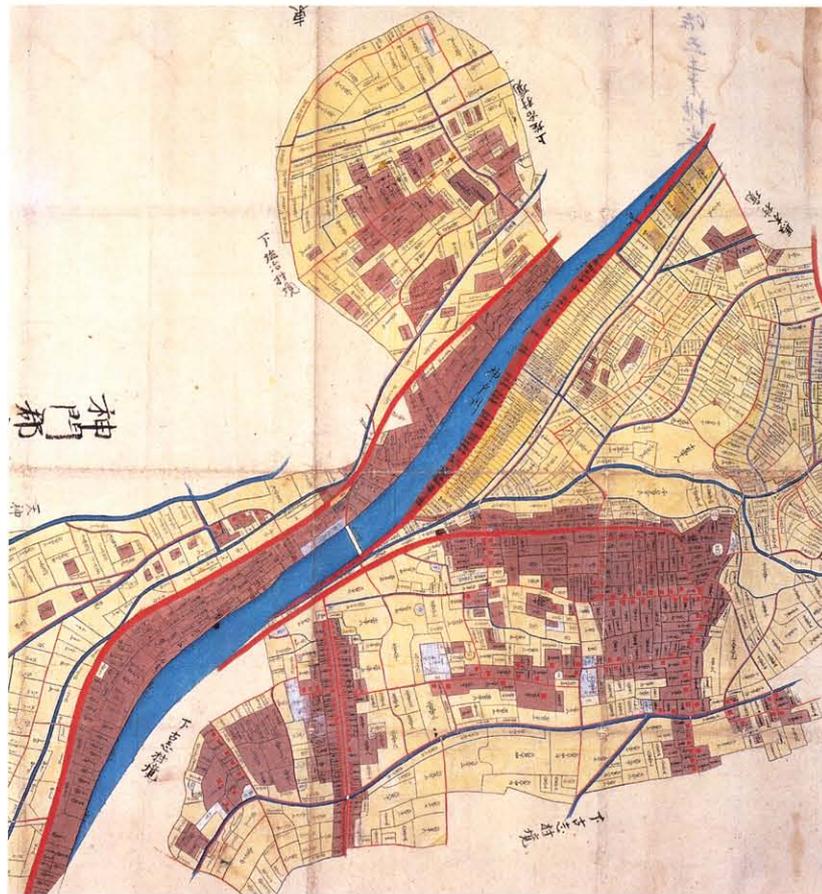
HII区（99年度）全景



J区（99年度）全景



天保年間開発図面（古志公民館所蔵）



明治五年地券（古志公民館所蔵）

卷頭図版4



HI区
出土非掲載
陶磁器 1



HI区
出土非掲載
陶磁器 2



HI区
出土非掲載
陶磁器 1

HII区
出土非掲載
陶磁器 2



HII区
出土非掲載
陶磁器 3



J区
出土非掲載
須恵器・陶磁器



斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ

古志本郷遺跡Ⅱ

2001年3月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所
島根県教育委員会

序

国土交通省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分に留意しつつ関係機関と協議しながら進めています。避けることのできない埋蔵文化財については、事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では放水路の早期完成を目指し、平成3年度から島根県教育委員会の御協力のもとに調査を行っています。古志地区周辺には数多くの遺跡が知られ、今回の調査箇所においても、弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡や大溝、奈良時代の建物跡等が見つかっており、古くから人々の生活が営まれていたことが分かりました。

国土交通省出雲工事事務所といたしましては、今後も同教育委員会と調整を図りつつ、貴重な埋蔵文化財の記録保存のため調査を円滑に進めてまいりたいと考えており、本報告書が埋蔵文化財に対するより一層の関心と御理解を得るための資料としてお役立ていただければ幸いに思います。

最後に今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導、御協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

国土交通省中国地方整備局
出雲工事事務所

所長 五道仁実

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受け、平成3年度以来、斐伊川放水路建設予定地内での遺跡の発掘調査を行っています。本書は平成10年度から平成11年度に発掘を実施した古志本郷遺跡のうち、J区及びH区について、その発掘調査結果をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川が流れる出雲市周辺地域は、島根県内でも有数の遺跡集中地域であり、数多くの歴史的文化遺産が眠っているところです。今回は、斐伊川放水路拡幅部のうち、古志町内の調査を行いました。この調査により、弥生時代～古墳時代の住居跡や大溝をはじめとした数々の遺構・遺物が検出され、近世に至るまでの複合遺跡であることが判明したことは、この地域の歴史を解明していく上で貴重な資料になりうるものです。

本書が地域の埋蔵文化財に対する理解や歴史学習に活用されることを期待いたします。

なお、発掘調査及び本書の刊行にあたりましては、地元の皆様、国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所をはじめ関係の皆様から、多くの御協力を得ましたことに対して心からお礼申し上げます。

平成13年3月

島根県教育委員会

教 育 長 山 崎 悠 雄

例 言

1. 本書は建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、鳥根県教育委員会が平成10・11年度に実施した、斐伊川放水路建設予定地内、古志本郷遺跡（H I・H II・J区）の発掘調査報告書である。

2. 調査組織は次のとおりである。

○平成10年度 現地調査

事務局 鳥根県教育庁文化財課 勝部 昭（課長）、島地徳郎（課長補佐）
埋蔵文化財調査センター 宍道正年（センター長）、秋山 実（課長補佐）
調査員 内田律雄（主幹）、川上恭司（教諭兼文化財保護主事）、吾郷博昭（教諭兼文化財保護主事）、勝部智明（主事）、松尾充晶（主事）、阿部智子（臨時職員）、梶谷泰子（臨時職員）

○平成11年度 現地調査

事務局 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター 宍道正年（所長）、秋山 実（総務課長）、松本岩雄（調査課長）、今岡 宏（総務係長）
調査員 内田律雄（主幹）、岡田充哲（教諭兼文化財保護主事）、勝部智明（主事）、梶谷泰子（臨時職員）

○平成12年度 報告書作成

事務局 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター 宍道正年（所長）、内田 融（総務課長）、松本岩雄（調査課長）、今岡 宏（総務係長）
調査員 勝部智明（主事）、梶谷泰子（臨時職員）
遺物整理 天津文子、景山光子、金坂恵美子、坂根喜世美、多久和文子、中島直美、難波夏枝、楨野喜久恵

3. 発掘作業（発掘作業員雇用、測量発注ほか）については、鳥根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会鳥根支部

布村幹夫（現場事務所所長）、中村弘已、小村敏行、岡田篤史、高橋憲生、保科 昭、加本宏文（以上技術員）、板倉律子、渡部美智子（以上事務員）

4. 発掘調査作業員

足立今栄、安達幸雄、有藤躬基子、石飛すみえ、伊藤ゆき江、伊藤幸世、糸賀エミ子、太田幸一、勝部清美、勝部久江、金本マス子、川谷重子、木村光利、小原喜美子、斉藤淳一、佐藤益子、高見和子、高見トヨ子、高見正己、多久和毅、武田顕慶、玉木美恵子、永井宏子、新田幸男、畑 豊美、原ミチ子、平尾文子、福庭 正、船木 昇、古川民子、松崎久子、三浦節子、矢田千也子、矢田広利、山毛永行、山本綾子、渡部愛子、

渡部光子、板垣剛志、柴崎香織、手銭 誠

5. 出土遺物の実測は、上記の調査員のほか、平石充、後藤達夫、勝部幸治、糸賀五月、勝部悠美、福田市子、阿部春枝、石橋直子、加藤麻子、門脇卓子、須山啓子、田村尚子、手銭誠が行った。
6. 本書に掲載した遺物写真の撮影は、景山、金坂の協力を得て勝部が行った。
7. 発掘調査、ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々から有益な御指導・助言をいただいた。記して謝意を表しておきたい。(敬称略)
山中敏史(奈良国立文化財研究所)、館野和己(同)、次山 淳(同)、大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館)、家田淳一(同)、下条信行(愛媛大学)、関口廣次(青山学院大学)、高橋美久二(滋賀県立大学)、木本雅康(長崎外国語短期大学)、長谷川博史(広島大学)、佐古和枝(関西外国語大学)、渡邊貞幸(鳥根大学)、大日方克己(同)、古賀信幸(山口市教育委員会)、藤田憲司(大阪府教育委員会)、田中義昭(鳥根県文化財保護審議委員)、蓮岡法暲(同)、中村唯史(鳥根県景観自然課)三原一将(出雲市教育委員会)、米田美江子(同)、園山 薫(同)
8. 報告書作成にあたって、古志公民館の御協力をいただいた。
9. 調査に関連して、花粉分析については(株)文化財調査コンサルタントに委託し、その結果については第5章第1節に掲載した。
10. 挿図中の北は、測量法による第Ⅲ座標系のX軸方向を指す。従って磁北から $7^{\circ}55''$ 、真北から $0^{\circ}21'$ 東の方向を指す。レベル高は海拔高を示す。
11. 挿図中の縮尺は図中に示した。
12. 本書に掲載した「第2図」は国土地理院発行の地形図、「第3図」は出雲市作成の出雲市都市計画図を一部改変して作成した。
13. 本書で使用した遺構記号は以下の通りである。
S I : 竪穴建物、S B : 掘立柱建物、S A : 柵、S E : 井戸、S D : 溝、S K : 土壙、
S X : その他の遺構
14. 土器実測図のうちアミかけしたものは赤色塗彩を、砂目による表現は煤の付着を示す。
15. 本書の執筆・編集は勝部が行い、第5章第2節については中村唯史氏に玉稿を賜った。
16. 出土遺物及び実測図、写真等の記録は、松江市打出町33番地 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

本文目次

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	位置と環境	2
第3章	調査の結果と概要	6
第4章	調査の結果	10
第1節	H I 区の調査	10
第2節	H II 区の調査	66
第3節	J 区の調査	140
第5章	自然科学的分析	188
第1節	古志本郷遺跡H II 区における花粉分析	188
第2節	立地地盤の形成について	195
第6章	まとめ	200

挿図目次

第1図	調査対象位置図	2
第2図	古志本郷遺跡と周辺の遺跡	4
第3図	古志本郷遺跡調査区配置図	7
第4図	基本層序模式図	8
第5図	H I 区遺構配置図	11
第6図	H I 区グリッド設定図	13
第7図	H I 区包含層出土遺物実測図(1)	14
第8図	H I 区包含層出土遺物実測図(2)	15
第9図	H I 区包含層出土銭貨拓影	15
第10図	SB01出土遺物実測図	16
第11図	SB25、出土遺物実測図	16
第12図	SB26・27実測図	17
第13図	SB28・29実測図	18
第14図	SB30、出土遺物実測図	19
第15図	SX10、出土遺物実測図	20
第16図	SE01、出土遺物実測図	21
第17図	SE03実測図	22
第18図	SE03出土遺物実測図	22
第19図	SK02実測図	23
第20図	SK02出土遺物実測図	23
第21図	SK03～05実測図	24
第22図	SK06～10、SK08出土遺物実測図	25
第23図	SK12・13、SK12出土遺物実測図	26
第24図	SK13出土遺物実測図	27
第25図	SK14～16・21～23・25実測図	28
第26図	SK16・23・25出土遺物実測図	28
第27図	SK28・29実測図	29
第28図	SK29出土遺物実測図	29
第29図	SK30、出土遺物実測図	30
第30図	SK31、出土遺物実測図	31
第31図	SK32、出土遺物実測図	32
第32図	SK34、出土遺物実測図	33
第33図	SK35、出土遺物実測図	33
第34図	SK36、出土遺物実測図	34
第35図	SK37、出土遺物実測図	35
第36図	SK38～44実測図	36
第37図	SK38～40出土遺物実測図	37
第38図	SK45、出土遺物実測図	37
第39図	SK46～50実測図	38
第40図	SK46～50出土遺物実測図	39
第41図	SD01実測図(1)	40
第42図	SD01実測図(2)	41
第43図	SD01土層断面図	42
第44図	SD01出土遺物実測図(1)	43
第45図	SD01出土遺物実測図(2)	44
第46図	SD04・05、05出土遺物実測図	45
第47図	SD06・07実測図(1)	46
第48図	SD06・07実測図(2)	47
第49図	SD07出土遺物実測図(1)	49
第50図	SD07出土遺物実測図(2)	50
第51図	SD08遺物出土状況、 出土遺物実測図	52
第52図	SD09、出土遺物実測図	53
第53図	SD10・11・13・14実測図	54
第54図	SD10出土遺物実測図	54
第55図	SD15実測図	56
第56図	SD15出土遺物実測図	57
第57図	SD16・18実測図	58
第58図	SD16出土遺物実測図	58
第59図	SD17・19遺物出土状況	60
第60図	SD17・19土層断面図	61
第61図	SD17出土遺物実測図	62
第62図	SD19出土遺物実測図	63
第63図	SX01遺物出土状況実測図	64
第64図	SX01出土遺物実測図	64
第65図	SX02出土遺物実測図	65
第66図	H II 区遺構配置図	67
第67図	H II 区グリッド設定図	69
第68図	H II 区包含層出土遺物実測図	70
第69図	SB02・03実測図	71
第70図	SB04、出土遺物実測図	73
第71図	SB05実測図	73
第72図	SB06実測図	74
第73図	SB07出土遺物実測図	74

第74図	SB07実測図	75	第138図	SD38・39・52実測図	126
第75図	SB08実測図	76	第139図	SD58・60・70・71実測図	127
第76図	SB09実測図	77	第140図	SD58・59・70・71土層断面図	128
第77図	SB10、出土遺物実測図	78	第141図	SD58・59遺物出土状況	130
第78図	SB11、出土遺物実測図	79	第142図	SD58遺物出土状況	131
第79図	SB12・13、出土遺物実測図	80	第143図	SD59出土遺物実測図	132
第80図	SB14実測図	81	第144図	SD58出土遺物実測図(1)	133
第81図	SB15実測図	82	第145図	SD58出土遺物実測図(2)	134
第82図	SB16、出土遺物実測図	83	第146図	SD58出土遺物実測図(3)	135
第83図	SB17・18実測図	85	第147図	SD58出土遺物実測図(4)	136
第84図	SB19実測図	86	第148図	SD83・84、SD83出土遺物実測図	137
第85図	SB17・19出土遺物実測図	87	第149図	SX14実測図	138
第86図	SB20実測図	87	第150図	SX14出土遺物実測図	139
第87図	SB21、出土遺物実測図	88	第151図	SX16出土遺物実測図	139
第88図	SB22実測図	89	第152図	J区遺構配置図	141
第89図	SB23・24実測図	90	第153図	J区グリッド設定図	143
第90図	SI01実測図	91	第154図	J区包含層出土遺物実測図(1)	144
第91図	SI01出土遺物実測図	92	第155図	J区包含層出土遺物実測図(2)	145
第92図	SE04、出土遺物実測図	92	第156図	J区包含層出土銭貨拓影	146
第93図	SE05～07実測図	93	第157図	SA01・02実測図	146
第94図	SE10・12実測図	94	第158図	SB01実測図	147
第95図	SE12出土五輪塔実測図	94	第159図	SB02実測図	148
第96図	SE11・13実測図	95	第160図	SB01・02出土遺物実測図	149
第97図	SE11～14・16出土遺物実測図	96	第161図	SB03、出土遺物実測図	150
第98図	SK108・SE14、出土五輪塔実測図	97	第162図	SI01実測図	151
第99図	SK54、出土遺物実測図	98	第163図	SI01出土遺物実測図(1)	152
第100図	SK55実測図	98	第164図	SI01出土遺物実測図(2)	153
第101図	SK55出土遺物実測図	99	第165図	SI01出土遺物実測図(3)	154
第102図	SK56・57実測図	99	第166図	SI02、出土遺物実測図	155
第103図	SK58、出土遺物実測図	99	第167図	SI03実測図	156
第104図	SK59、出土遺物実測図	100	第168図	SI03出土遺物実測図	157
第105図	SK59出土銭貨拓影	101	第169図	SI04、出土遺物実測図	158
第106図	SK61～63実測図	102	第170図	SI05、出土遺物実測図	159
第107図	SK61～63出土遺物実測図	103	第171図	SI06、出土遺物実測図	160
第108図	SK67出土遺物実測図	103	第172図	SI07実測図	161
第109図	SK71実測図	104	第173図	SI07出土遺物実測図	162
第110図	SK71出土遺物実測図	105	第174図	SE01・02実測図	163
第111図	SK72、出土遺物実測図	106	第175図	SE01出土井側部材実測図	164
第112図	SK74実測図	107	第176図	SE02出土井筒実測図	166
第113図	SK74出土遺物実測図	107	第177図	SE01・02出土遺物実測図	166
第114図	SK75実測図	108	第178図	SK01・02、出土遺物実測図	167
第115図	SK75出土遺物実測図	108	第179図	SK03・04、出土遺物実測図	168
第116図	SK79、出土遺物実測図	109	第180図	SK06・09、出土遺物実測図	169
第117図	SK84・85実測図	110	第181図	SK18、出土遺物実測図	170
第118図	SK91～95、出土遺物実測図	111	第182図	SK25・26・28・30、 SK26出土遺物実測図	171
第119図	SK99実測図	112	第183図	SK31・34・41・44、出土遺物実測図	172
第120図	SK99出土遺物実測図	112	第184図	SK35・36、出土遺物実測図	173
第121図	SK100～102実測図	113	第185図	SK37、出土遺物実測図	175
第122図	SK101出土遺物実測図	113	第186図	SK42出土遺物実測図	175
第123図	SK103実測図	114	第187図	SK43～45・48、出土遺物実測図	176
第124図	SK103出土遺物実測図	114	第188図	SD01・08実測図	178
第125図	SK105、出土遺物実測図	115	第189図	SD01出土遺物実測図	179
第126図	SK105出土銭貨拓影	115	第190図	SD08出土遺物実測図	180
第127図	SK106、出土遺物実測図	116	第191図	SD02～04出土遺物実測図	180
第128図	SD28・29実測図	117	第192図	SD07・09～11実測図	181
第129図	SD28・29出土遺物実測図	118	第193図	SD07・09・11出土遺物実測図	182
第130図	SD23・50出土遺物実測図	119	第194図	SD12・13実測図	183
第131図	SD23・50実測図	120	第195図	SD14・18、出土遺物実測図	184
第132図	SD26・27・30・34・37・51・54 実測図	121	第196図	SD15・16・22・23実測図	185
第133図	SD26・27・51土層断面図	123	第197図	SD16・22出土遺物実測図	186
第134図	SD26・27・30・54出土遺物実測図	123	第198図	SX01出土遺物実測図	186
第135図	SD36実測図	124	第199図	試料採取地点	188
第136図	SD36出土遺物実測図	125	第200図	G区SD41の花粉ダイアグラム	192
第137図	SD39・52出土遺物実測図	125	第201図	G区SD39の花粉ダイアグラム	192

第202 図	H II 区SD29の花粉ダイアグラム	193
第203 図	H II 区深堀の花粉ダイアグラム	193
第204 図	深堀トレンチ柱状図と 試料採取位置	195
第205 図	砂の岩種構成	196
第206 図	神戸川に伴う 地下地質断面と年代値の関係	197
第207 図	火砕物に由来する 土砂の主な流下経路	198

第208 図	弥生時代～古墳時代前期前半の 遺構配置図	201
第209 図	古墳時代中期後半～平安時代の 遺構配置図	202
第210 図	建物軸分布図	203
第211 図	中世の遺構配置図	205
第212 図	近世の遺構配置図	207

表目次

第1 表	周辺の遺跡一覧表	4
第2 表	H I 区包含層出土銭貨計測表	15
第3 表	H II 区包含層出土銭貨計測表	69
第4 表	SK59出土銭貨計測表	101
第5 表	SK105出土銭貨計測表	116
第6 表	SD27出土銭貨計測表	122
第7 表	J 区出土銭貨計測表	143
第8 表	¹⁴ C年代	189
第9 表	珪質化石および 火山ガラス概査結果	189
第10 表	弥生～古墳時代前期前半の 主な遺構一覧	201
第11 表	古墳時代中期後半～平安時代の 主な遺構一覧	203
第12 表	中世の主な遺構一覧	204
第13 表	近世の主な遺構一覧	206

写真目次

写真1	顕微鏡写真	194
写真2	深堀トレンチ土層断面	196

写真図版目次

巻頭図版1	調査前航空写真 H I 区近景	巻頭図版4	H I 区出土非掲載陶磁器1 H I 区出土非掲載陶磁器2 H II 区出土非掲載陶磁器1
巻頭図版2	H II 区('99年度)全景 J 区('99年度)全景	巻頭図版5	H II 区出土非掲載陶磁器2 H II 区出土非掲載陶磁器3 J 区出土非掲載須恵器・陶磁器
巻頭図版3	天保年間開発図面 明治七年地券地図		
図版1	遺跡周辺の航空写真	図版10	H I 区SD15遺物出土状況 H I 区SX01遺物出土状況 H I 区SX01鉄鍋出土状況
図版2	H I 区南側 H I 区北側	図版11	H II 区'98年度調査区全景 H II 区'99年度調査区全景
図版3	H I 区SE01 H I 区SE03遺物出土状況 H I 区SK02 遺物出土状況	図版12	H II 区SB21～23周辺 H II 区SB17～19周辺
図版4	H I 区SK13遺物出土状況 H I 区SK28・29 H I 区SK31土層堆積状況	図版13	H II 区SB02・03 H II 区SB04
図版5	H I 区SK32土層堆積状況 H I 区SK36 H I 区SK37	図版14	H II 区SB05 H II 区SB06 H II 区SB07
図版6	H I 区SK45遺物出土状況 H I 区SD01遺物出土状況 H I 区SD01土層堆積状況	図版15	H II 区遺構検出状況 H II 区SB09・11 H I 区SD01土層堆積状況
図版7	H I 区SD19遺物出土状況 H I 区SD17土層堆積状況 H I 区SD19土層堆積状況	図版16	H II 区SB09 H II 区SB11
図版8	H I 区SD01・17・19 H I 区SD07土層堆積状況 H I 区SD07遺物出土状況	図版17	H II 区SB11P3遺物出土状況 H II 区SB10・12～16
図版9	H I 区SD07遺物出土状況 H I 区SD06・07	図版18	H II 区SB13 H II 区SB12・13 H II 区SB14・15
		図版19	H II 区SB16 H II 区SI01

- 図版20 H II区SI01P2
 H II区SE04
 H II区SE05
 図版21 H II区SE07
 H II区SE11
 H II区SE12
 図版22 H II区SE13
 H II区SE14、SK108
 図版23 H II区SK58遺物出土状況
 H II区SK59遺物出土状況
 H II区SK71遺物出土状況
 図版24 H II区SK71遺物出土状況
 H II区SK74遺物出土状況
 H II区SK74
 図版25 H II区SK105遺物出土状況
 H II区SD26・27・51・54
 H II区SD28・29・36
 図版26 H II区SD28土層堆積状況
 H II区SD29土層堆積状況
 H II区SD28・36土層堆積状況
 図版27 H II区SD58遺物出土状況
 H II区SD58・59・70・71
 図版28 H II区SD58土層堆積状況
 H II区SD58・71土層堆積状況
 H II区SD59遺物出土状況
 図版29 H II区SD59土層堆積状況
 H II区SD71土層堆積状況
 H II区SX14
 図版30 J区'98年度調査区全景
 J区'99年度調査区全景
 図版31 J区SA02
 J区SA01、SB01・02
 J区SB02
 図版32 J区SB01
 J区SB03
 J区SI01遺物出土状況
 図版33 J区SI01
 J区SI02
 J区SI03遺物出土状況
 図版34 J区SI03
 J区SI04遺物出土状況
 J区SI04
 図版35 J区SI05
 J区SI06
 J区SI07遺物出土状況
 図版36 J区SI07遺物出土状況
 J区SE01、SK01～04検出状況
 J区SE01
 図版37 J区SE02遺物出土状況
 J区SE02井筒出土状況
 J区SK04土層堆積状況
 図版38 J区SK06遺物出土状況
 J区SK18遺物出土状況
 J区SK36
 図版39 J区SK48遺物出土状況
 J区SD01
 図版40 J区SD01土層堆積状況
 J区SD07・09・11・22検出状況
 J区SD07・09・11
 図版41 J区SD07・09・11遺物出土状況
 J区SD11遺物出土状況
 図版42 J区SD22
 J区SD15土層堆積状況
 図版43 J区('99年度)全景
 J区('99年度)近景
 図版44 H I区包含層出土遺物
 図版45 H I区包含層出土遺物
 図版46 H I区SB01・25・30、SX10、
 SE01・03、SK02・12出土遺物
 図版47 H I区SK02・08・12・13出土遺物
 図版48 H I区SK16・23・25・29～32出土遺物
 図版49 H I区SK34～40出土遺物
 図版50 H I区SK45・49出土遺物
 図版51 H I区SK50、SD01出土遺物
 図版52 H I区SD01出土遺物
 図版53 H I区SD01・05出土遺物
 図版54 H I区SD07出土遺物
 図版55 H I区SD07出土遺物
 図版56 H I区SD07出土遺物
 図版57 H I区SD08・09出土遺物
 図版58 H I区SD10・15出土遺物
 図版59 H I区SD15～17出土遺物
 図版60 H I区SD19出土遺物
 図版61 H I区SD19、SX01出土遺物
 図版62 H I区SX01・02出土遺物
 図版63 H II区包含層出土遺物
 図版64 H II区包含層出土遺物
 図版65 H II区SB04・07・10～13・
 16・17・19・21出土遺物
 図版66 H II区SI01、SE04・11～14・16出土遺物
 図版67 H II区SK54・55・58・59出土遺物
 図版68 H II区SK59・61～63出土遺物
 図版69 H II区SK67・71・72出土遺物
 図版70 H II区SK71・74出土遺物
 図版71 H II区SK75・79・94・95・99出土遺物
 図版72 H II区SK99・101・103出土遺物
 図版73 H II区SK105・106出土遺物
 図版74 H II区SD23・28・29・50出土遺物
 図版75 H II区SD26・27・30・54出土遺物
 図版76 H II区SD36・39・52・59出土遺物
 図版77 H II区SD58・59出土遺物
 図版78 H II区SD58出土遺物
 図版79 H II区SD58出土遺物
 図版80 H II区SD58出土遺物
 図版81 H II区SD58・83出土遺物
 図版82 H II区SD58出土遺物
 図版83 H II区SX14、J区包含層出土遺物
 図版84 J区包含層出土遺物
 図版85 J区包含層、SB01～03、SI01出土遺物
 図版86 J区SI01出土遺物
 図版87 J区SI01～03出土遺物
 図版88 J区SI04～07、SE01出土遺物
 図版89 J区SE02、SK01・04・09出土遺物
 図版90 J区SK04・06・18・26・31・
 33～35・41・44出土遺物
 図版91 J区SK37・42出土遺物
 図版92 J区SK43・45・48出土遺物
 図版93 J区SD01出土遺物
 図版94 J区SD02～04・07～09・11出土遺物
 図版95 J区SD04・08・11・14・18出土遺物
 図版96 J区SD16・22、SX01出土遺物

第1章 調査に至る経緯

斐伊川の治水事業は大正11（1922）年より行われてきたが、昭和に入って相次ぐ洪水に悩まされ、とりわけ昭和47年の豪雨では斐伊川・神戸川の両河川は破堤寸前に陥り、また、宍道湖の増水により松江市をはじめとする約70km²が1週間以上にわたって浸水するという被害を受けた。このため、斐伊川・神戸川の抜本的な治水計画を樹立するため、両水系を一体化した高水処理計画が立てられた。

斐伊川放水路事業は、斐伊川の計画高水量の一部を中流左岸の出雲市大津町来原付近から新たに放水路を開削して分流し、出雲市塩冶町半分付近において神戸川に合流させるものである。また、それにより神戸川下流域は、神戸川の自己流量と斐伊川からの分流量をあわせた計画水流量を持つ斐伊川放水路として、必要な掘削・築堤工事を行おうとする事業である。その規模は、開削部4.1km、拡幅部9.0kmで、全長13.1kmにも及ぶ。この計画は、斐伊川流水の一部を早く、しかも安全に日本海に流すことを目的としたもので、鳥根県が昭和44年に基本構想を発表、同50年に基本計画を策定し、建設省（現国土交通省）が同51年に確定したものである。ルートは同54年に最終決定された。

こうした事業計画の推移・決定のなか、鳥根県教育委員会は昭和50年度に鳥根県企画部の依頼を受けて、分流地域の分布調査を実施し、その結果を昭和51年3月に「斐伊川放水路建設予定地域埋蔵文化財分布調査報告」としてまとめて報告した。また、昭和53・54年度には、建設省出雲工事事務所（現国土交通省中国地方整備局）から委託を受けて、上塩冶町を中心とする出雲市全域と簸川郡大社町に所在する遺跡を対象としながら、一部発掘調査を含んで分布調査を行い、この結果をもとに、昭和55年3月に『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』を刊行した。

その後事業地の用地買収が進む一方で、平成元年度より建設省出雲工事事務所、鳥根県斐伊川神戸川治水対策課及び鳥根県教育庁文化課の三者で協議が進められ、平成3年1月には文化課が再度分布調査を実施した。そして、同年度末には同事務所と文化課との間で協議文書が交わされ、事前に予定地内にある埋蔵文化財を発掘調査することが決定し、平成3年4月より発掘調査事業が開始された。

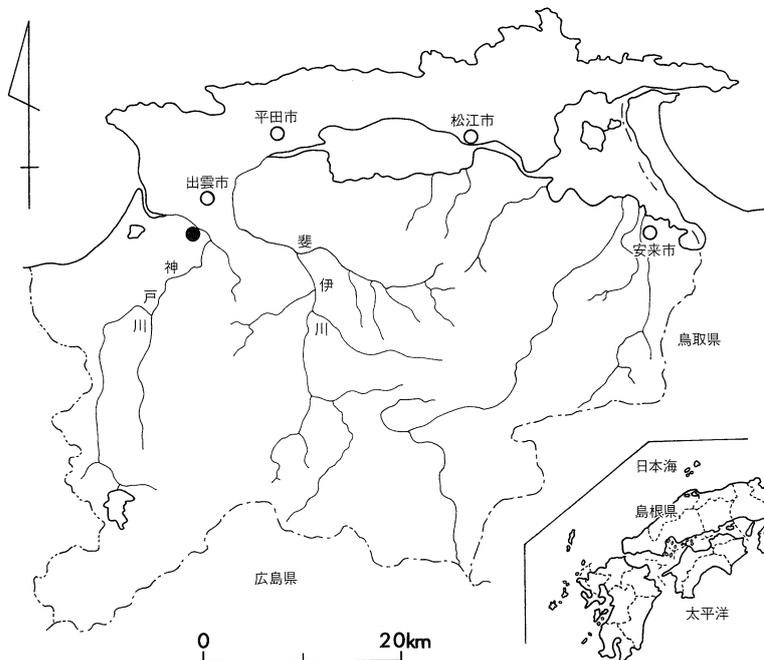
古志本郷遺跡は、古志橋付け替えに伴う県道（江南多伎線）の移設に付随した事前調査として、県教育委員会によって平成7～9年に調査が実施され、その成果は平成10年度に『古志本郷遺跡Ⅰ』が公刊されている。平成11年度からは、神戸川の拡幅及び工事用道路の敷設等に伴う発掘調査を実施した。

第2章 位置と環境

中国山地に源を発する神戸川は、急峻な丘陵地帯を貫流しながら出雲平野南西部に達し、さらに10kmほど下って日本海に注ぎ出る。古志本郷遺跡は、この神戸川と新宮川が合流する付近一帯に広がる複合集落遺跡で、神戸川左岸の標高約8～10mの自然堤防上及びその後背湿地帯に形成されている。

出雲平野は、縄文時代そのほとんどは海域であったが、縄文晩期に始まる海退と、神戸川及び宍道湖に流入する斐伊川の2大河川の沖積作用によって形成された。縄文時代後期には平野の低沖積地上に遺跡が分布する状況や、地質学的研究から、約3600年前には平野中央部まで陸化が進んでいたことが考えられている。その後、徐々に平野は拡がり、それに伴って人々の生活空間も拡がっていった。近世になると、上流の中国山地における大規模な製鉄業の隆盛に伴い、「鉄穴流し」による土砂流入量が増大し、平野の形成・拡大に特に大きな役割を果たした。平野の景観が現在のようなものになったのは、それまで日本海に流れていた斐伊川が宍道湖に注ぐようになり、斐伊川の平野部左岸に連続堤が構築されはじめた1641年以降のことである。当遺跡をはじめとして出雲平野に集落遺跡が盛んに営まれ始めるのは、弥生時代中期以降であるが、平野北縁の北山山地及び南縁の丘陵地帯の山麓には縄文時代から継続的に展開した遺跡も存在し、古くから生活が営まれていたことを窺わせる。

以下、出雲平野とその周辺の遺跡を、時代を追って概観する。なお、遺跡名の後の番号は、第2図及び第1表に対応する。



第1図 調査対象位置図

縄文時代

現在、出雲平野で知られている最も古い遺跡としては、弥山南麓にある菱根遺跡(39)と、浜山の砂丘下にある上長浜貝塚(45)があげられる。いずれも縄文時代早期末の遺跡である。縄文時代前期末から中期にかけての遺跡は上ヶ谷遺跡で確認されているにすぎず、海進による生活領域の変化があったと考えられる。海退の進む縄文時代後・晩期には、平野南部の丘陵下に比較的安定して生活が営まれるようになる。御領田遺跡からは後期の竪穴住居跡が確認され

ているほか、三田谷Ⅰ遺跡(54)からは後期に埋没した丸木舟が発見されており、当時の環境の変化を物語っている。また、矢野遺跡(34)や善行寺遺跡等、平野中央部にも展開されるようになる。

弥生時代

前期の遺跡は縄文時代晩期から継続的に展開する遺跡が多く、当該期の遺跡としては石剣・配石墓が検出された原山遺跡(42)や、矢野遺跡等が知られる。これらの遺跡からは、北部九州の弥生土器と技術的に類似したものが出土しており、稲作技術の伝来との関連が考えられる。南部丘陵の荒神谷遺跡から出土した大量の青銅器の中には最古段階の銅鐸も含まれており、弥生時代前期における出雲平野の有力集団の存在が想定されるが、現在それを裏付ける集落の発見には至っていない。中期になると遺跡は一旦姿を消すが、中期中葉以降になると、斐伊川、神戸川沿いの微高地上に集落遺跡が分布するようになる。四絡遺跡群・天神遺跡(65)・古志遺跡群等は、環濠と思われる大溝を持つ大規模集落である。また、姫原西遺跡(36)では木橋を検出した。後期になると、斐伊川流域にも山持川川岸遺跡などの新たな村落が営まれ、平野全体に集落が広がっていく。この状況の下、四隅突出型墳丘墓を持つ西谷墳墓群(21)が造られる。これは、出雲平野を統括する有力者の存在、他地域との交流関係を考える上で貴重な遺跡と言える。他に、三田谷Ⅰ遺跡では後期中頃のものと思われる方形周溝墓が、県内唯一検出されている。

古墳時代

弥生時代終末頃から四絡遺跡群、天神遺跡、古志遺跡群など、平野中心部の集落遺跡の多くは急激に衰退し、古墳時代前期初頭には廃絶すると考えられている。その一方で、北山山麓の山持川川岸遺跡等や神西湖南岸の西安原遺跡等では前期以降も引き続き見られるなど、遺跡の分布に偏在性が認められるようになる。それにあわせて西谷で築かれていたような四隅突出型墳丘墓も築かれなくなり、前期末には集落が継続する上述の南北両地域に、大寺古墳と山地古墳(46)が出現する。但し、前期古墳はこの2基だけで、最古級の古墳は今のところ明らかでない。この点は、大規模な古墳を多数築造している出雲地方東部の荒島古墳群とは、大きく様相を異にする。中期になると再び集落が形成されはじめ、また、石棺を内部主体とする北光寺古墳、軍原古墳、神庭岩舟山古墳等が造られるが、その数は少ない。後期になると古墳の数は急増する。首長墓は北山山麓に上島古墳が築造された後は、神戸川流域の丘陵地帯に今市大念寺古墳(24)、上塩冶築山古墳(14)、地藏山古墳(13)と相次いで築造される。今市大念寺古墳(24)は全長92mで全国最大級の家型石棺を有し、その被葬者は出雲西部の最高首長と推定される。終末期になると、出雲では九州系の横穴墓が出現する。神戸川右岸の上塩冶横穴墓群は、県内屈指の規模を持つ横穴墓群として知られ、うち2穴からは金糸が出土した。左岸にも小規模ではあるが、妙蓮寺古墳(59)宝塚古墳(58)放れ山古墳(52)等があり、地藏堂横穴墓群(49)神門横穴墓群(47)など大規模な横穴墓群も形成されている。

奈良・平安時代

当時の官衙跡との関連が推定される遺跡として、木簡・緑釉陶器・墨書土器等が出土した三田谷Ⅰ遺跡、緑釉陶器・墨書土器・大型の掘立柱建物跡が検出された天神遺跡(65)、礎石建物跡が検出された斐伊川後谷Ⅴ遺跡等がある。また、当古志本郷遺跡(G区)の調査では、総柱建物を含む掘立



第2図 古志本郷遺跡と周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	古志本郷遺跡	24	今市大念寺古墳	47	神門横穴墓群
2	狐廻谷古墳	25	角田古墳	48	深田横穴墓群
3	上塩冶横穴墓群第7支群	26	塚山古墳	49	地藏堂横穴墓群
4	大井谷城跡	27	太歳遺跡	50	地藏堂北横穴墓群
5	上塩冶横穴墓群第22支群	28	荻杼古墓	51	浄土寺山城跡
6	上塩冶横穴墓群第33支群	29	山持川川岸遺跡	52	放れ山古墳
7	上沢Ⅱ遺跡	30	里方別所遺跡	53	大梶古墳
8	光明寺古墳群	31	大前山古墳	54	三田谷Ⅰ遺跡
9	唐墨城跡	32	石臼古墳	55	古志遺跡
10	大坊古墓	33	里方八石遺跡	56	田畑遺跡
11	小坂古墳	34	矢野遺跡	57	下古志遺跡
12	半分古墳	35	大塚遺跡	58	宝塚古墳
13	地藏山古墳	36	姫原西遺跡	59	妙蓮寺古墳
14	上塩冶築山古墳	37	小山遺跡	60	天神原古墳
15	宮松遺跡	38	白枝荒神遺跡	61	知井宮多門院遺跡
16	下沢古墳	39	菱根遺跡	62	東原遺跡
17	菅沢古墓	40	修理面本郷遺跡	63	極楽寺付近遺跡
18	権現山横穴墓群	41	鹿蔵山遺跡	64	弓原遺跡
19	長廻横穴墓群	42	原山遺跡	65	天神遺跡
20	来原岩樋	43	南原貝塚	66	高西遺跡
21	西谷墳墓群	44	中分貝塚	67	神門寺境内廃寺
22	斐伊川鉄橋遺跡	45	上長浜貝塚	68	渡橋沖遺跡
23	石土手遺跡	46	山地古墳	69	長者原廃寺

柱建物15棟以上、建物群を区画する溝とそれに平行する柵列とともに、墨書土器・刻書土器・円面硯、腰帯金具等の遺物が出土している。建物はいずれも大型で柱穴も大きく、柱間が完数尺で設計され規格性を持つなど、全体として官衙的色彩が強く、このうち2棟は配置と規格より郡庁の一部である可能性が高い。古代寺院跡としては神門寺境内廃寺(67)や長者原廃寺(69)が存在し、「出雲国風土記」記載の新造院との比定が進められている。古墓としては、出雲平野南側丘陵に石製骨蔵器を備える菅沢古墓(17)や朝山古墓、石室に石櫃が置かれた小坂古墳、須恵器の骨蔵器が使用された西谷墓、1辺75cmの立方体の石櫃が納められた光明寺3号墓(8)等があり、火葬の風習がこの地方にも伝わっていたことがわかる。集落遺跡としては、漁業関係の道具類が多量に出土した上長浜遺跡、多くの土器が出土した大寺三蔵遺跡が知られている。

中世

古代、出雲国の政治の中心は国庁が置かれた松江市大草町であった。しかし、出雲一宮である出雲大社及びその別当寺としての鰐淵寺の影響や、出雲守護職佐々木氏が出雲平野中央部の塩冶郷に守護所を置いたことなどにより、鎌倉時代後半の一時期、出雲西部が出雲国の中心となった。この時代の遺跡としては、ミニチュア五輪塔が出土した渡橋沖遺跡(68)や、国人領主朝山氏の館跡と推定される蔵小路西遺跡があげられる。この遺跡からは幅約4mの堀や掘立柱建物跡、そして、12～15世紀の遺物が検出されている。備前焼等が多量に出土した大社町鹿蔵山遺跡(41)も有力者の館跡と考えられている。荻杼古墓(28)には国の重要文化財に指定された青磁が副葬されていた。被葬者はこの地方一帯を治めていた塩冶氏と考えられている。戦国時代には尼子・毛利氏の争いもあり、尼子十旗とされる米原氏の高瀬山城、神西氏の神西城、その他にも鳶が巣城等、平野を見下ろす丘陵上に多くの山城が点在している。また、下古志町の南部丘陵には有力な国衆、古志氏の居城である浄土寺山城・栗栖城が、旧山陰道沿いにはその市場町が形成され、古志町の基となっている。

近世

17世紀以降、松江藩は財政基盤の拡大を図って農業開発に力を入れ、治水・灌漑事業や新田開発を出雲平野を中心に盛んに行った。なかでも高瀬川、差海川、十間川の普請が広く知られている。古志町周辺について見ると、十間川の開削は、灌漑・新田開発をもたらしただけでなく、それに伴う道の整備や集落の拡大、商工業の発展を促し、17世紀前半には現在の本郷、町部の集落が大きく発展し、政治・経済・文化の中心となった。中世末期以来、城下町・市場町として繁栄した塩冶町・古志町も、藩政下の18世紀中頃には今市町・大津町の発展によって衰退していく傾向にあったが、神戸川左岸の古志町は河南部を商圏としていたこともあってあまり影響を受けなかったことと、石州・備後街道に通じる交通、舟運の要衝であったこともあり、町屋は街道筋に神戸川沿いまで発展していった。

(参考文献) 鳥根県教育委員会『古志本郷遺跡 I』1999

鳥根県教育委員会『三田谷 I 遺跡』2000

出雲市教育委員会『遺跡が語る古代の出雲』1997

出雲市古志町誌編纂委員会編『古志町誌』1990

第3章 調査の経過と概要

第1節 既往の調査と調査区の設定（第3図）

既往の調査 古志本郷遺跡は周知の遺跡で、平成6年度までに出雲市教育委員会によって5回の調査が行われている。第1次調査は昭和62年度に実施された⁽¹⁾⁽²⁾。遺跡の範囲確認のため合計6か所でトレンチ調査が行われ、弥生時代中期中葉～終末期の遺物が出土した。第3トレンチからは竪穴住居とそれに伴う100個体以上の土器が出土している。第2次調査は古志公民館建設に伴い平成元年に行われた⁽³⁾。弥生時代から近世に至る多くの遺構が検出されている。弥生時代の遺構としては、中期後葉の竪穴住居3棟と溝が確認され、うち、S I O 2では玉生産をしていた可能性が指摘されている。第3・4次調査は平成7年度に実施されたが、微高地から外れた立地ということもあり、若干の遺物が出土されたにすぎない⁽⁴⁾。平成8年度に、市道本郷新宮線改良に先だつて行われた第6次調査では、近世初頭の井戸跡や弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の遺物を含む大溝が検出されている⁽⁵⁾。

古志橋・県道の付け替えに伴う、鳥根県教育委員会による発掘調査は、3か年にわたって行われた⁽⁶⁾。平成6年12月から実施された範囲確認のためのトレンチ調査に始まり、翌平成7年度からA・B区の本格的な調査が開始された（第5次）。A・B両区では、中世後期～近世の建物跡10棟、井戸跡4基、近世を中心とする多数のピット・土坑が検出されている。B区では中世末に埋没したと考えられる大溝も確認された。平成8年度に行われたC区の調査（第7次）では、近世のものと思われる溝・杭・敷石遺構のほか、古代～中世にかけての掘立柱建物跡8棟、古墳時代初頭の土器を大量に含む大溝2条、井戸跡4基など多数の遺構が確認されている。平成9年度にはD・E区の調査（第8次）が行われた。その結果、D区では、弥生時代後期初頭の竪穴建物2棟と同時期の溝、中世末～近世にかけての井戸跡等が検出され、E区からは弥生時代中期末から後期初頭の竪穴建物4棟と古墳時代前期の竪穴建物1棟が見つかった。その他、中世を主とする掘立柱建物6棟が確認された。この年には調査の合間を縫って、拡幅工事予定地内における遺跡の範囲確認調査も行われ、次年度以降の調査区が確定された。

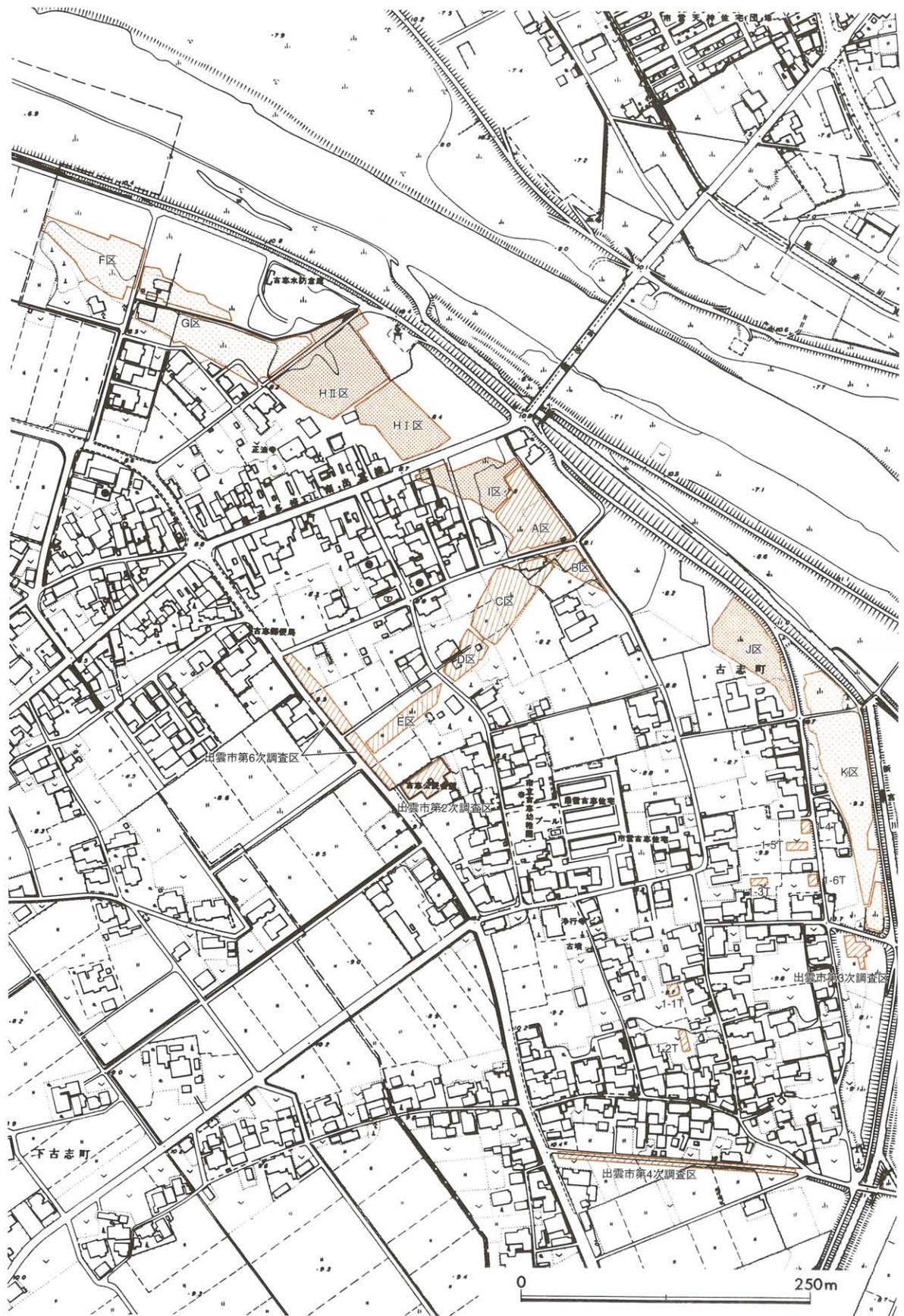
調査区の設定 試掘調査は、拡幅及び周辺整備事業の対象地内を、神戸川左岸の古志橋南詰めを起点に、上流に約300m、下流に約400mの範囲で実施され、多数の遺構・遺物が出土された。この結果を踏まえて、下流側からF～Jの5区が設定された。J区の北側及びF～H区の川側は、試掘調査で明確な遺構・遺物が出土されておらず、また、地山検出面も低いことから神戸川や後世の水田開発などによって攪乱されたものと考えられる。

本報告書は、H・J区の調査結果をまとめたものである。H区は水路にまたがることなどから南側をH I（旧H 2）区、北側をH II（旧H 1・3）区として調査を行った。

なお、平成10・11年度にはF・G・I区の調査も実施された⁽⁷⁾。また、遺跡の南端部に位置するK区は平成11年度の範囲確認調査を経て、翌年度までの2か年間の調査が実施された。

第2節 調査の経過と概要

調査前のH区は、近年までは工場や民家の敷地として使われていたようであるが、絵図（巻頭図

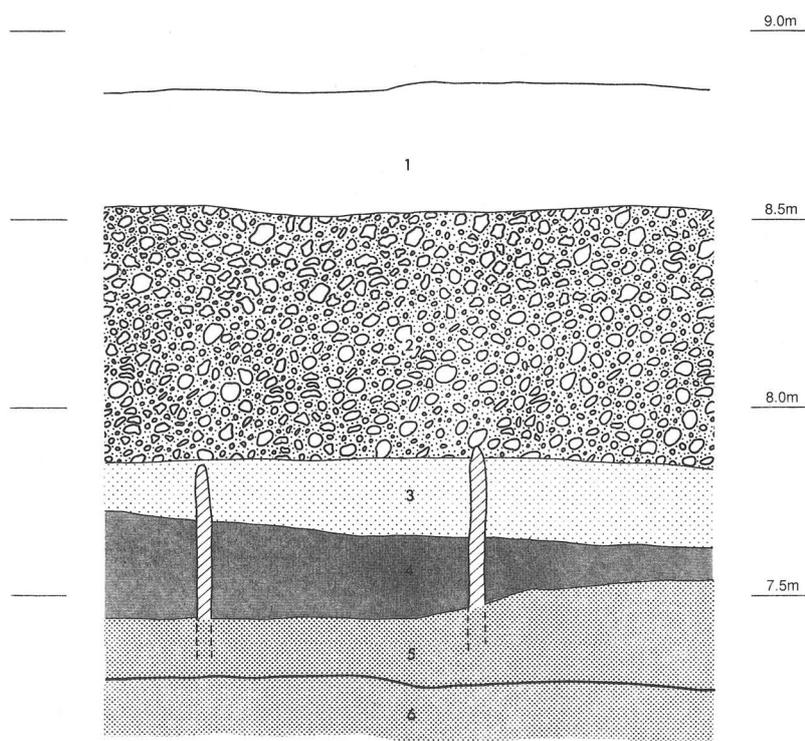


第3図 古志本郷遺跡調査区配置図 (1:5000)

版3)⁹⁾によれば、明治5(1872)年には水田が広がっており、H I区に隣接する県道多伎江南線は、近世の石州街道であったこともあり、この縁辺部には「うなぎの寝床」状に間口の狭い家が軒を連ねた様子も見られる。J区についても、上述の史料から、天保年間には水田として、明治5年には宅地として利用され今日に至った様子が窺える。

基本層序(第4図) 遺跡の層序は先述のような土地利用の違いなどから、調査区や地点によって若干の相違はあるものの、基本的には次のような堆積が認められた。

1. 暗茶灰褐色(粘質)土:表土、耕作土。J区ではほぼ全範囲で認められたが、H区ではほとんど認められておらず、代わりに真砂やダストが敷き詰められているところが多かった。これは工場や民家の立ち退きに際し、更地化した時の盛土と考えられる。
2. 暗茶褐色(粘質)土: H区にのみ認められ、川側ほどその厚みは増す傾向にあった。敷地の造成に伴う客土と考えられ、遺物はほとんど認められなかった。この層にはコンクリートやモルタル建材等の廃棄物を大量に含む攪乱坑が多数掘り込まれていた。
3. 暗青灰色(粘質)土: 両区に見られるが、J区と異なり、H区では非常に粘質で、白色または淡黄褐色系の粘土ブロックを比較的多く含むことが特徴的である。また、H区では近世以降の陶磁器を主とする遺物を多量に包含し、杭列も多く検出している。同様の層は、A~C区(5・7次調査)でも確認されている。一方、J区においては、杭列は検出するものの近世以降の陶磁器はほとんど包含していない状況であった。継続的に水田等に利用されたためと考えられる。
4. 黒灰褐色(粘質)土: 両区に見られ、出土遺物も古代から中世までと幅広い。また、この層の



上面では土坑や柱穴などの遺構が検出され、埋土は3層を主とする。

5. 灰白色(砂質)粘土: かなり締まった、やや砂質の粘土である。H区に限って認められ、その中でも局所的に堆積している状況であった。遺構に伴って張り付けたような類のものではないことから自然堆積によるものと考えられ、無遺物層であるため地山とした。

6. 灰褐色砂: ところによって色調は異なるが、両調査区で普遍的に認められた、

第4図 基本層序模式図

小礫を含む砂層である。5層が堆積する箇所もそれを除去すると直下で検出された。上面で検出する遺構の埋土は3・4層で、近世以降の遺構とともに、中世以前の遺構も検出された。なお、調査終了後に深掘トレンチを設け6層以下の層序観察を行ったところ、有機質の黒褐色シルト層が分布することが確認された。詳細は5章2節で報告するが、分析の結果、 3740 ± 60 yr.BPの年代値が得られた。遺構・遺物が存在する可能性も考えられたが、湧水が著しく調査は断念した。

調査の経過と概要 調査はH I区から着手したが、廃土置き場やその搬出の都合上、H I区の調査は天地返しを余儀なくされた。平成10年4月13日から重機による表土掘削を開始し、3層までを除去した。10m方眼のグリッドを設定し、5月7日から4層以下の人力掘削・精査を行った。7月23日には1回目の空撮を実施し、県道側の3/4は7月27までに終了した。翌日から残り部分の精査に着手した。途中、大雨による遺構の崩壊などもあったが、9月21日には2回目の空撮を終え、24日まででH I区の調査を終了した。H I区の県道縁辺では、足の踏み場もないほどの、近世を主体とする掘立柱建物の柱穴を確認した。また、中・近世の井戸跡、古代の区画溝、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけて廃絶する大溝、土坑などが検出された。

H II (旧H 1)区は、I区の調査と併行して同年9月から重機掘削を開始し、グリッド設定後の28日には精査を開始した。10月18日には現地説明会をF・G区と併せて行い、悪天候にもかかわらず200名以上の見学者が訪れた。12月14日には空撮を行い、24日をもって現地調査のすべてを終了した。

この年の調査では、F・G区で官衙との関連で注目される多くの遺構・遺物が検出され、特にG区では、「出雲国風土記」記載の神門郡家の政庁の一部と推定される大形建物跡が見つかった。これに隣接するH II区でも総柱建物が検出されるなど、遺跡の範囲は広がる様相を示し、G・H II区を画す市道部分とH II区西側を拡張して次年度も継続調査を行った(旧H 3区)。

平成11年度は、J区の調査を優先したため、H II区の調査は8月24日から開始した。市道の付替えのため、表土掘削は拡張部分から着手し、グリッド設定後に人力掘削を行った。10月25日には市道部分の重機掘削を開始し、作業員を増員して調査にあたった。12月の中旬以降からは係内の応援を得て年が明けた1月7日に調査を終了した。調査の結果、10mを越す大形のを筆頭に、掘立柱建物を計11棟のほか、弥生時代終末～古墳時代初頭に埋まる溝や中・近世の井戸跡等多数の遺構を確認することができた。

J区の調査は、平成10年度の11～12月、11年度の4月6日～9月8日まで行った。弥生時代の後期を中心とする竪穴建物7棟、奈良～平安時代の掘立柱建物3棟、中世の井戸跡等を検出した。

第3章 (註)

- (1) 出雲市教育委員会『古志地区遺跡分布調査調査報告書』1988
- (2) 出雲市教育委員会『古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書』1988 の中で、報告後の再整理により得られた事実が補足されている。
- (3) 出雲市教育委員会『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第4集 1994
- (4) 出雲市埋蔵文化財『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第5集 1995
- (5) 前掲註(2)に同じ
- (6) 島根県教育委員会「古志本郷遺跡Ⅰ」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』1999
- (7) I区については「古志本郷遺跡Ⅲ」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ』として今年度報告される予定である。
- (8) 絵図については、古志公民館の御厚意により写真撮影・掲載の許可を得た。

第4章 調査の結果

第1節 HI区の調査

遺構の配置と概要(第5図) 調査面積は2264m²で、旧石州街道(山陰道)の県道多岐江南線に隣接し、前章でも述べたように近年までは宅地や工場用地として利用されていた。検出した遺構は、弥生時代後期後半～近世に至るまで時代幅がある。主な遺構は、弥生時代後期後葉、終末に埋没した溝、古墳時代前期の土坑、古墳時代終末～奈良時代の溝、中・近世の井戸、近世以降と考えられる掘立柱建物等があげられる。

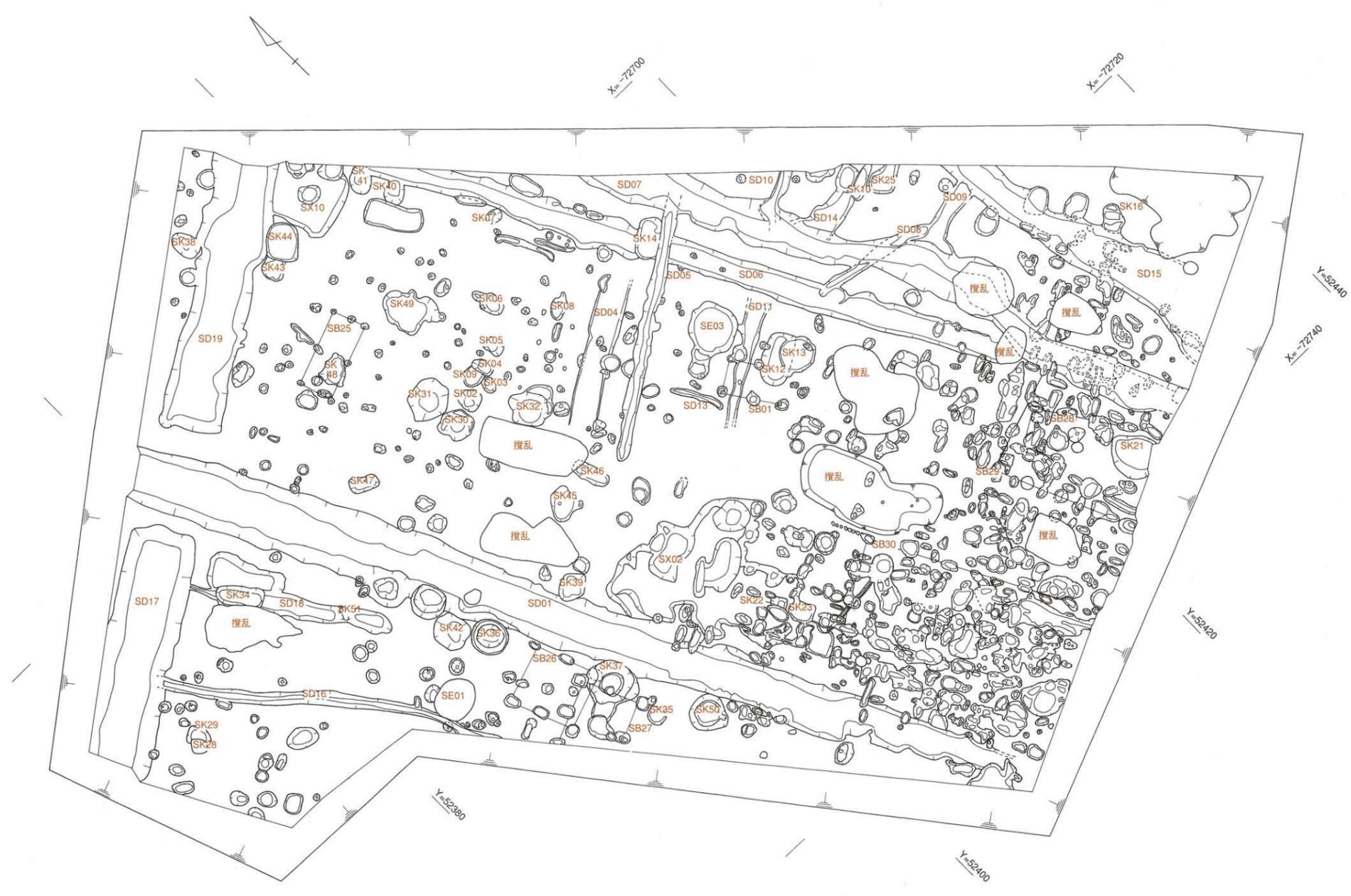
遺構は調査区全面で検出したが、遺構の種別によってはある程度の分布傾向が認められる。弥生時代のSD07・15は神戸川に並行し、この点は他の調査区でこれまでに確認された同時期の溝と共通する。SK31・32や、SD01に沿うようにつくられたSK36・37及びその周辺に見られる、比較的大きい土坑は列状に隣接してつくられ、概して深い場合が多い。神戸川の伏流水脈に沿って設けられた井戸と考えられる。

先述した県道沿いには、土坑状のものも含め建物柱穴が密集していた。そのほとんどは平面長楕円形又は隅丸長方形の大形のもので、遺物や埋土等より、街道筋に発達した近世以降の町屋に伴うものと考えられる。絵図からは間口の狭い建物が道筋に軒を連ねている状況が認められ、検出した柱穴のいくつかもそうした状況にあるのが認められる。なお、当遺跡は地山が砂礫層ということもあり、崩壊しやすく、遺構の規模は検出時と実測時で大きく異なる場合が多いことを追記しておく。

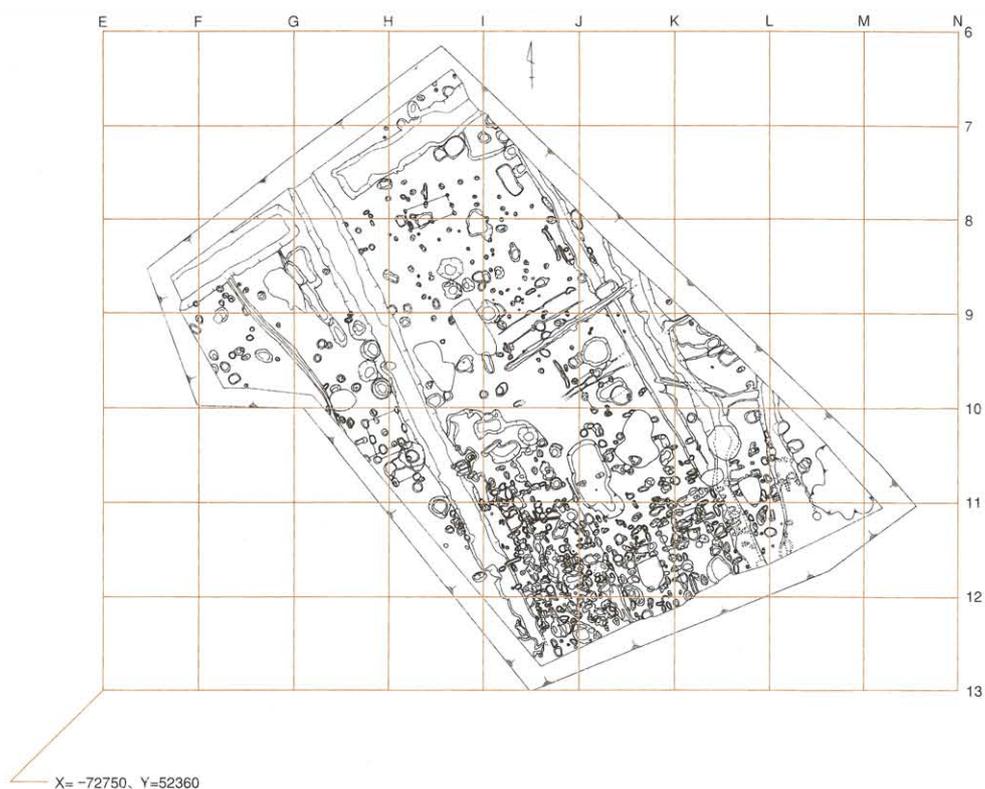
包含層 遺跡の基本層序については第3章で述べたとおりである。3層は10cm程度の厚みを残して重機掘削を行い、以下、グリッドを設定して掘り下げた。グリッドは国土座標系にのる軸に沿って、東にE, F, G・・・南に6, 7, 8・・・と10m間隔に区切って設定した(第6図)。3層は粘質土で、近世以降の陶磁器を主として検出した。また、この層からは水田に伴うと考えられる杭列による区画が確認された。4層上面では、3層を埋土とする遺構が認められたが、その検出は容易でなく、時間的な制約もあったためこの面での精査は断念した。4層は弥生時代後期～中世の遺物を含むが、近世遺構による攪乱を受けて近世陶磁器も相当量出土している。出土遺物に時代幅があるだけでなく、その出土レベルにもまとまりが認められなかったことや、中・近世遺構による攪乱が激しいことから、純粋な包含層とは断定できない。

包含層出土遺物(第7～9図) 7-1・2は高坏で、1は口縁部が外反し、内外面にへら磨きを施す。草田5期に相当する。2は口径に対し坏部が深い低脚のもので、接合部にへら状工具痕が認められる。草田6期以降のものであろう。3・4は複合口縁甕である。3は倒卵形の丸底で、底部内面には指頭圧痕が顕著である。4は小形のもので、口縁～頸部にかけての外面には縦磨き、内面には横磨きを施す。5は複合口縁の壺で、口縁は外傾し、端部はわずかに外傾する面を持つ。3～5は草田6～7期に併行するものである。6は長頸壺で、当地域ではあまり例を見ないものである。外面には縦磨き、頸部内面に刷毛目を施す。草田4～5期のものであろうか。

8は手握土器で、明瞭な底部をつくり、外面は指頭圧痕を部分的になで消す。9は土師器の甕で、口縁部内面には丁寧な刷毛目を施す。10は古墳時代中期後半の碗形高坏で、やや深い坏部の内面には放射状の暗文を施し、接合部付近には明瞭な段をつくる。



第5图 HI区遺構配置図 (1:300)



第6図 HI区グリッド設定図 (S=1/800)

12～15須恵器である。12は口縁内面にわずかにアクセントを持ち、肩部には稜をつくる。出雲4期²⁾にあたる。13は擬宝珠状のつまみがつくものと考えられ、8世紀末～9世紀初頭のものであろう。15は坏部が直線的に立ち上がり、底部のやや内側に高台が取り付く。焼成は良好で、13に近い時期のものであろう。

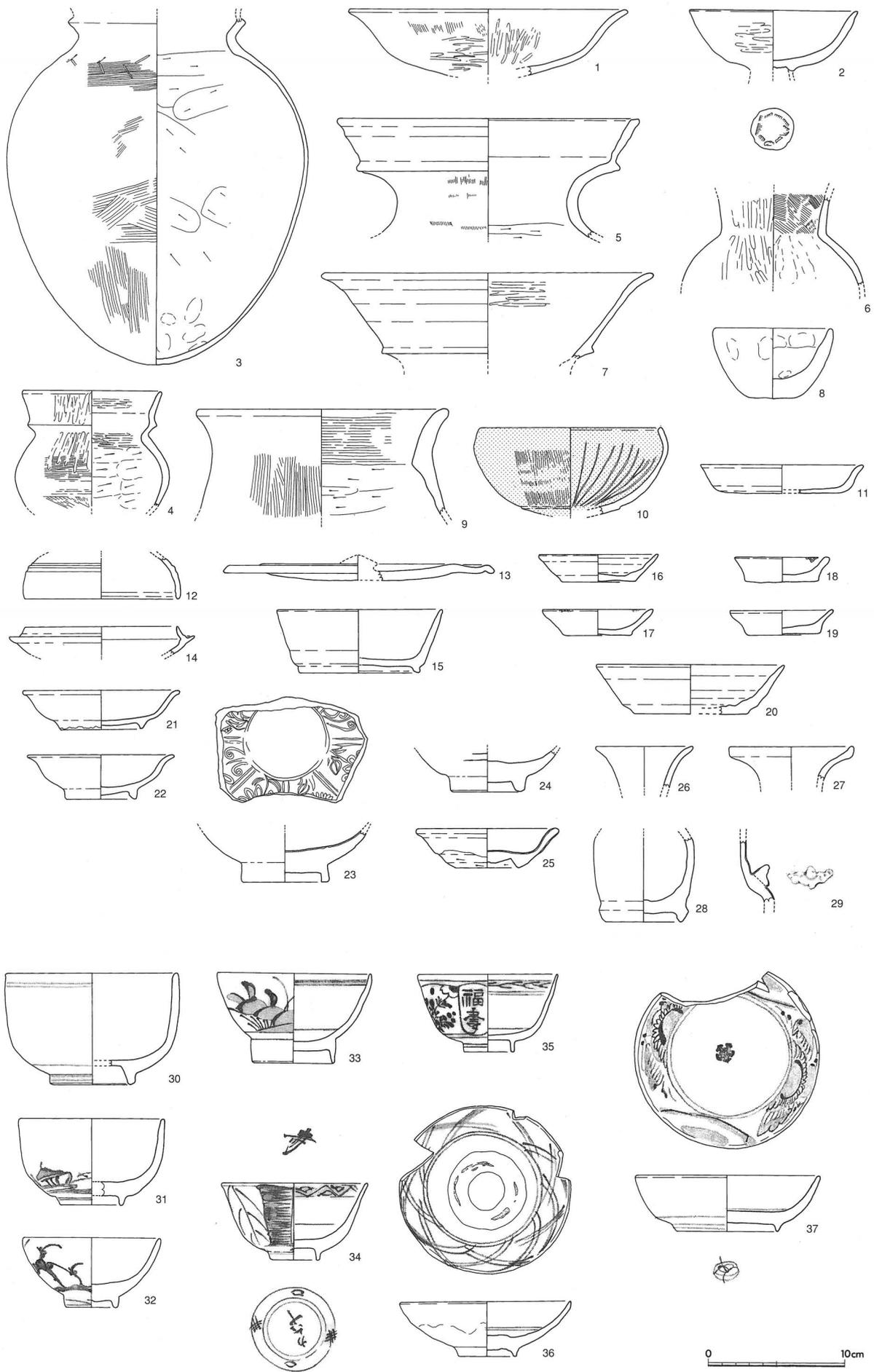
11・16～20は糸切りの土師器である³⁾。16・17は小皿で16世紀代のものか。17は灯明皿に使用したと見られる。18は静止糸切りの小皿で、19とともに近世のものである。20は坏である。

21・22は輸入白磁皿で、森田E-2類⁴⁾である。21は火を受け、全面に気泡が多く見られる。22は漳州窯系のものか、畳付に繊維状の灰が見られる。いずれも16世紀後半～末の資料である。

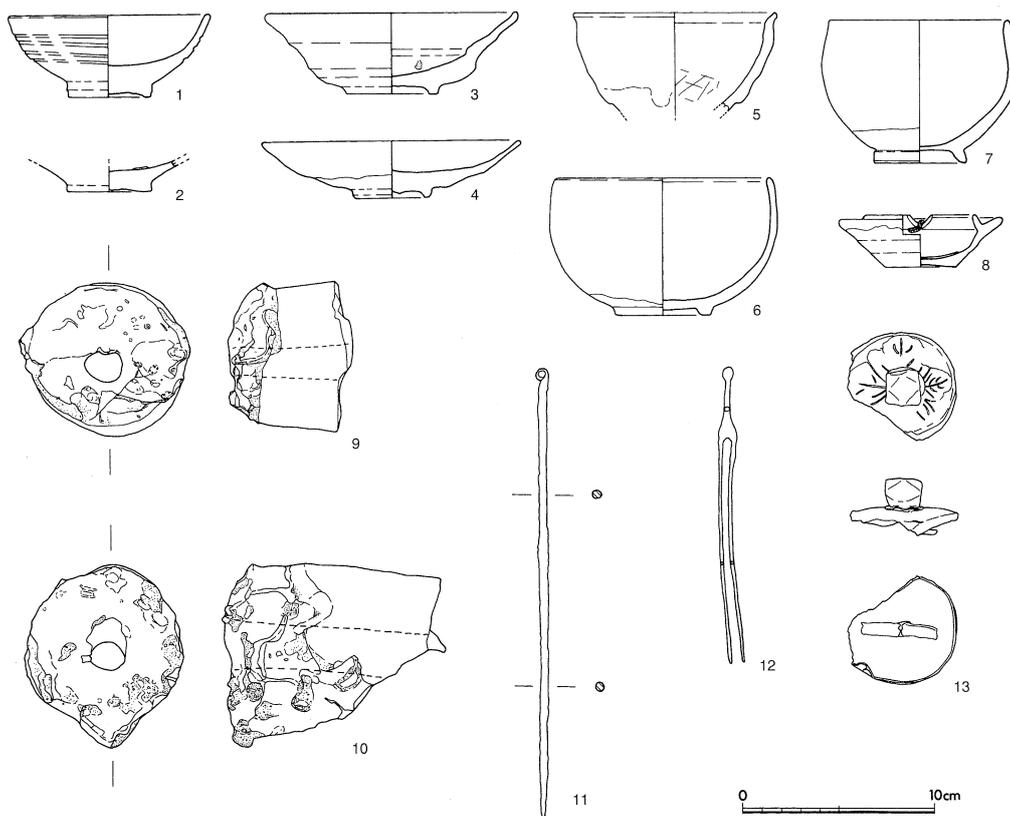
23～25は中国青磁である。23は八つの区画に草花文を型押しで施した15世紀代の碗である。24は貫入のある15世紀～16世紀の碗で、見込みに片彫りによる圏線が認められる。25は16世紀末の碁笥底の皿である。26～29は18世紀代の肥前系青磁で、26・28は瓶、27・29は仏花器である。

30～33・36・37は肥前系陶磁器である。30・31は18世紀前半の陶胎染付碗である。32は波佐見産の染付碗で18世紀後半、33は1780～1810年代の広東碗である。36・37は波佐見産の皿で、36は17世紀末～18世紀前半の見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、重ね焼きするものである。37は五弁花のコンニャク印判の見られる18世紀後半のものである。

34・35は瀬戸産の碗である。34は19世紀中頃の端反り碗で、見込みに「寿」が見られる。焼継ぎ痕と、高台内には朱字で職人の注記が残る。35は19世紀前半で、8分割した花鳥文の間には「福寿」が見られる。

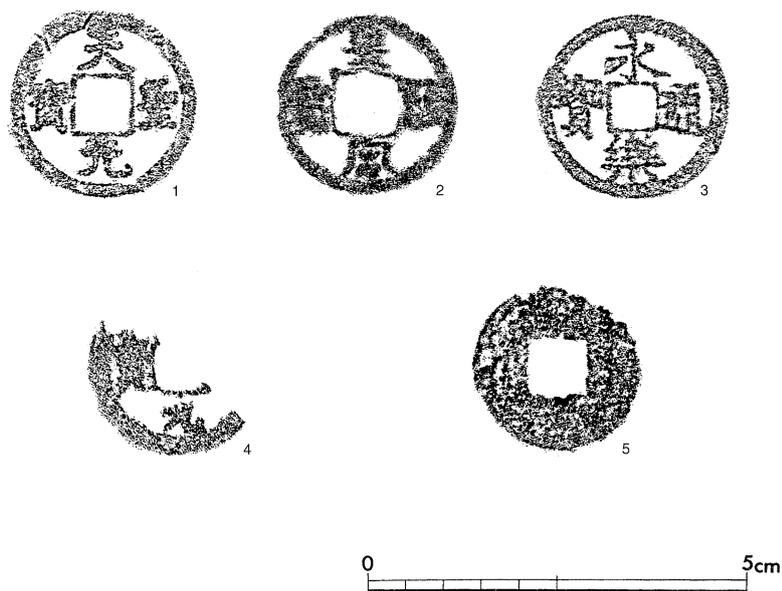


第7图 HI区包含層出土遺物実測図(1)(1:4)



第8図 HI区包含層出土遺物実測図(2) (1:4)

8-1~8は陶器である。1は刷毛目碗で、2は見込みと底部に砂目が見られる碗である。いずれも李朝で、15世紀~16世紀代のものである。3は1590~1610年代の胎土目唐津皿で、4は17世紀中頃~後半の肥前系の皿である。5は瀬戸・美濃の天目碗で16世紀代、6・7は布志名焼、8は灯明皿である。



第9図 HI区包含層出土銭貨拓影(1:1)

11は鉄製火箸、12は簪で銅製であろうか。13は用途不明の銅製品で、把手状のものである。

第2表 HI区包含層出土銭貨計測表⁽⁵⁾

No.	銭名	初鑄年	銭径(A)/銭径(B)		内径(C)/内径(D)		銭厚	量目
1	天聖元宝	1023	25.00	24.85	20.60	20.75	1.15	3.55
2	皇宋通宝	1038	24.60	24.60	21.15	20.80	1.10	2.70
3	永樂通宝	1408	25.10	25.10	20.30	20.75	1.55	3.55
4	不明	—	—	—	—	—	1.15	(1.16)
No.	銭名	銭径	穴形態		穴径	量目	分類	
5	無文銭	22.10	四角		7.2	1.32	B-I-1	

(単位: mm・g)

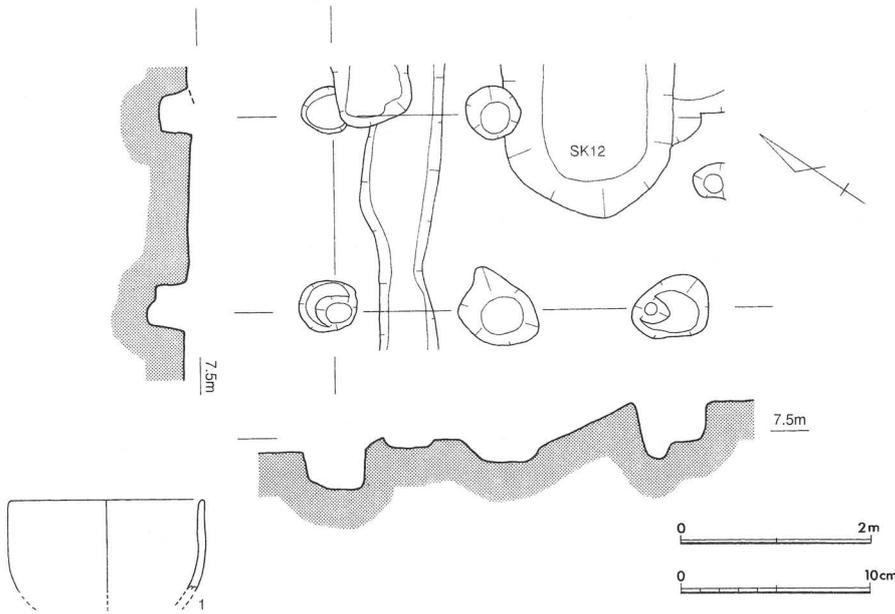
1. 掘立柱建物 (第10~14図)

SB01 (第10図)

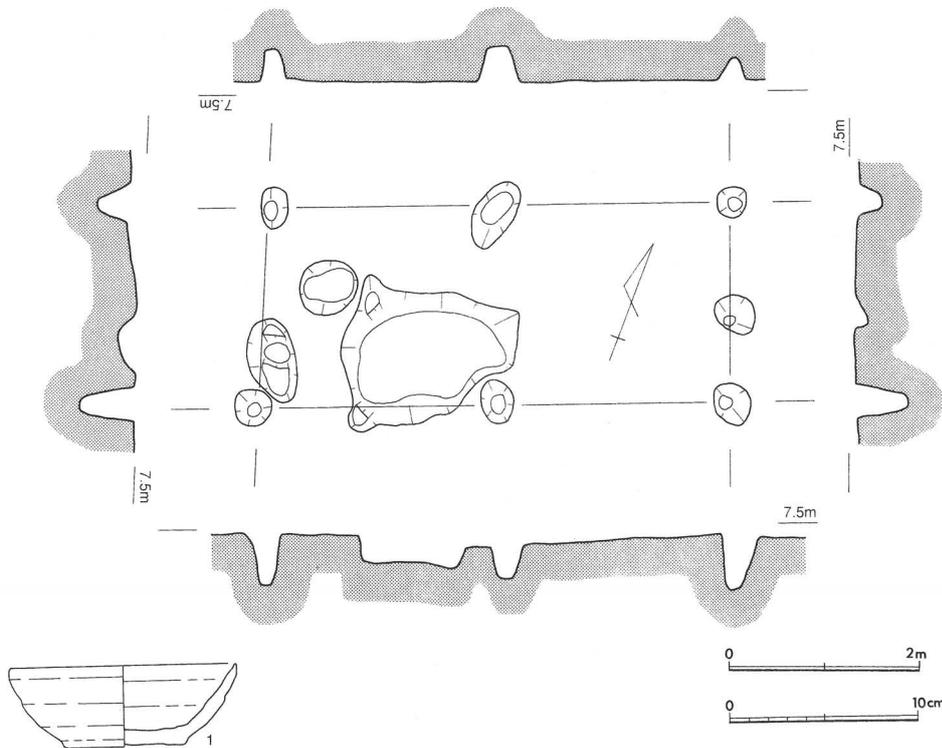
調査区中央のやや東よりに位置する1×2間の側柱建物で、SK12によって切られている。規模は梁行2.1m、桁行3.4(柱間1.7)mである。床面積は7.14m²で、棟方向はN-33°-Wである。柱穴掘方は柱に対して比較的大きく、平面形は概して円形である。

出土遺物は布志名焼と見られる青緑灰色釉の陶器が1点検出されたが、後述するSK12からも同様の遺物が検

出されていることから、建物には伴わない可能性が高い。



第10図 SB01、出土遺物実測図 (1:80、遺物1:4)



第11図 SB25、出土遺物実測図 (1:80、遺物1:4)

SB25 (第11図)

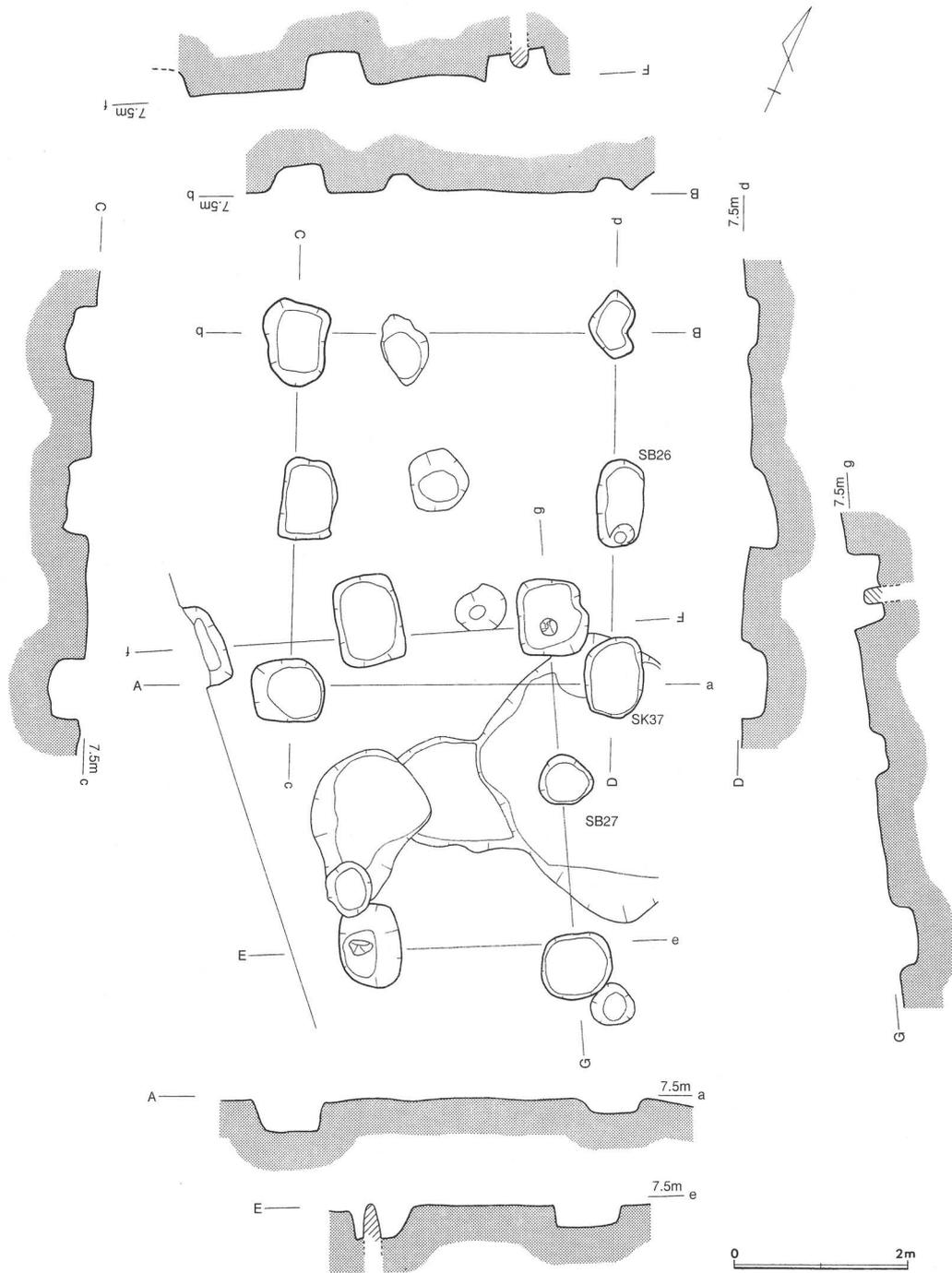
調査区の北側で検出した、1×2間の側柱建物である。規模は梁行2.2m、桁行4.9(柱間2.5)m、床面積10.8m²で、棟方向はN-69°-Eである。柱穴掘方の平面形は円形又は楕円形である。

柱穴からは、底径が広く、器高の低い糸切りの土師器を検出している。14世紀頃のもので、建物もそういった時期と考え

られる。

SB26 (第12図)

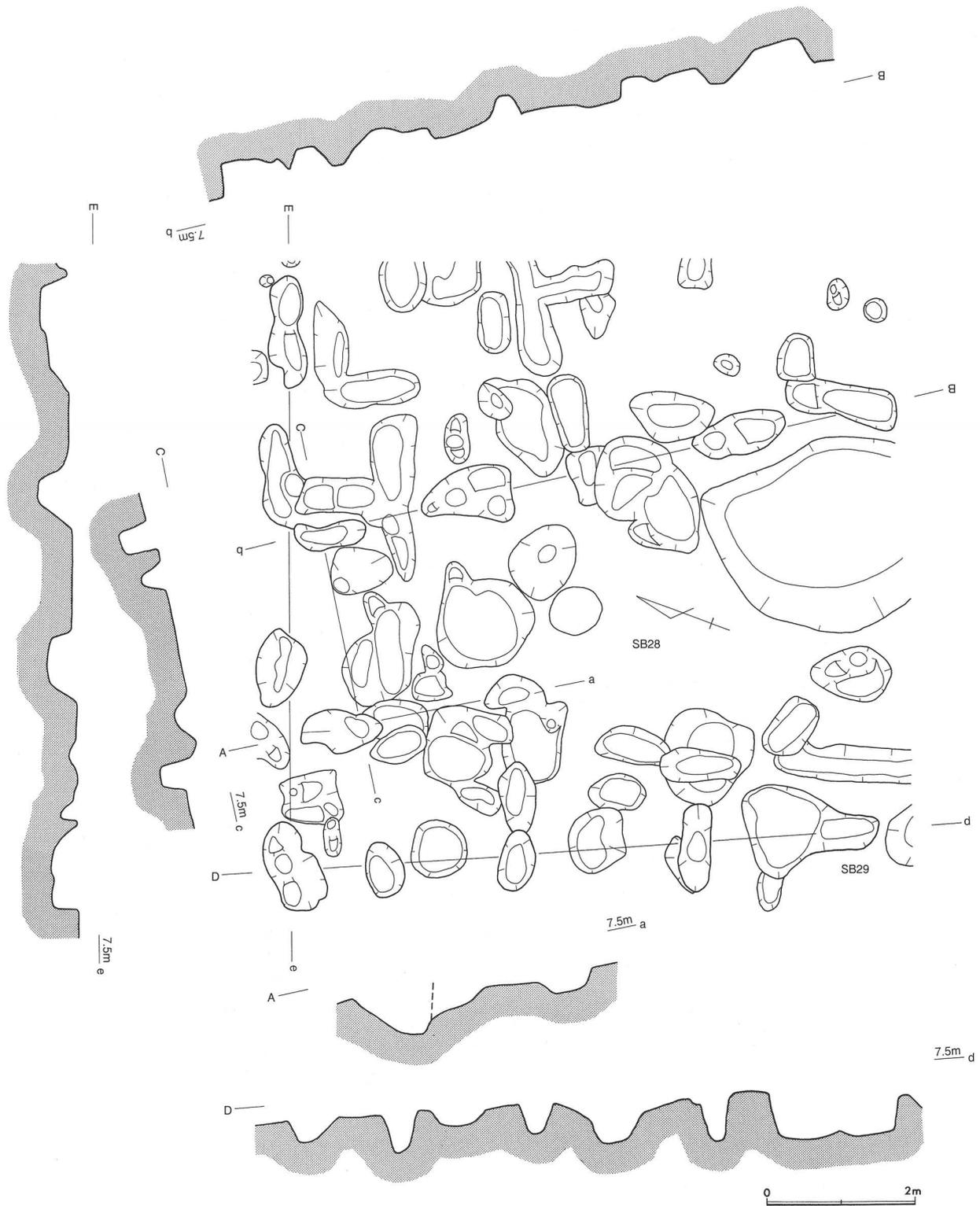
調査区西壁ぎわに位置する側柱建物である。SB26は1×2間で、SK37を切るかたちで検出され、規模は梁行3.7m、桁行4.1m、床面積は15.2m²を測る。棟方向はN-23°-Wで、柱穴掘方は平面長方形である。出土遺物は土師器小片のほか肥前系磁器の小片が出土しており、攪乱された状況でもないので、近世の建物として差し支えないと考えられる。



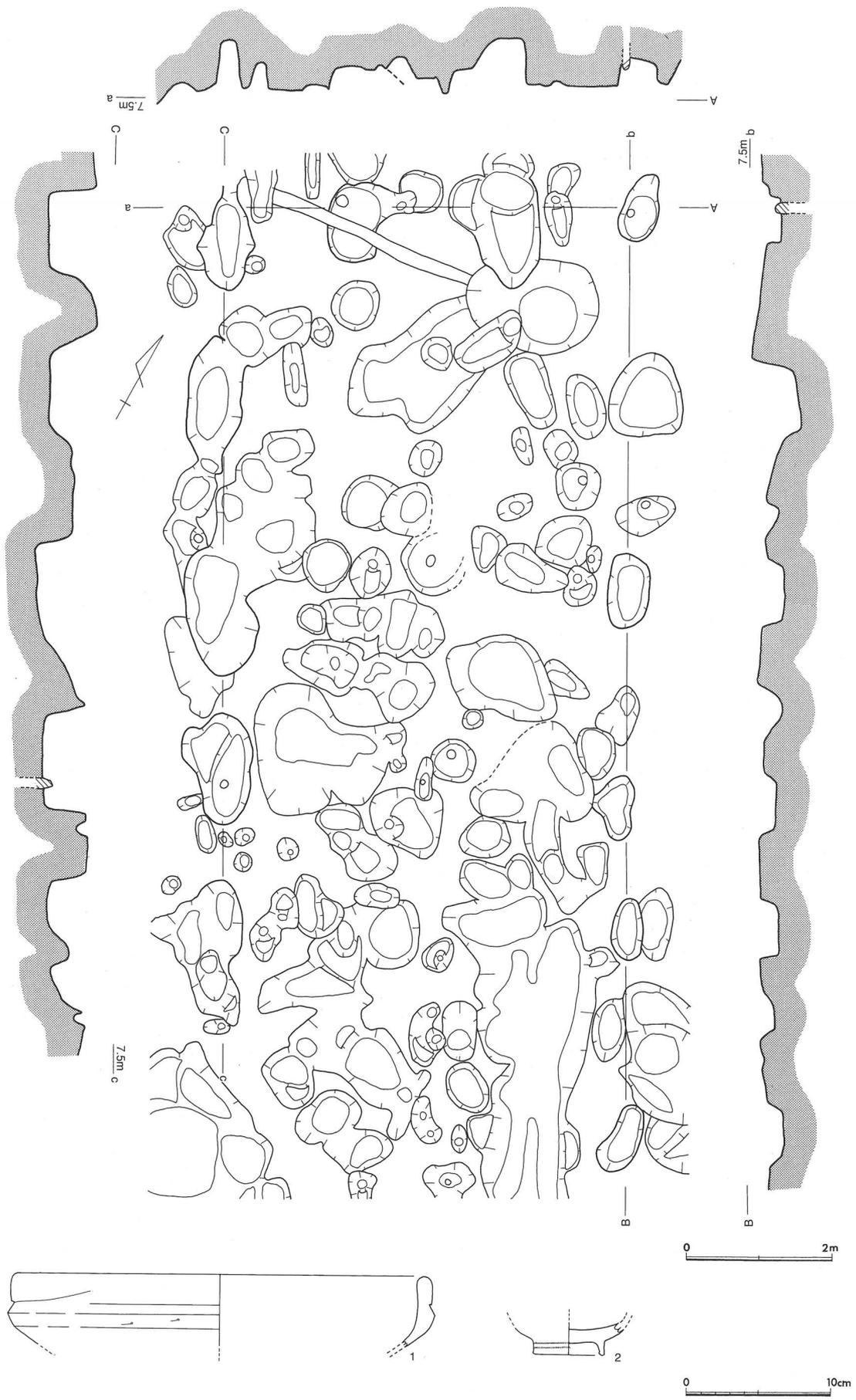
第12図 SB26・27実測図 (1:80)

SB27 (第12図)

2×2間以上の側柱建物と考えられるが、調査区壁にかかるため詳細は明らかでない。規模は梁行3.7m、桁行き4m以上で、床面積は現状で14.8㎡、棟方向はN-67°-Eである。実測しうる遺物はないが、近世陶磁器の小片が出土している。切り合いが無いことから、SB26との前後関係は不明であるが、柱穴の規模や形状等から、SB26と遠くない時期に建てられたか、あるいは



第13図 SB28・29実測図 (1:80)



第14図 SB30、出土遺物実測図 (1 : 80、遺物 1 : 4)

は建て替えの可能性も考えられる。

SB28~30 (第13・14図)

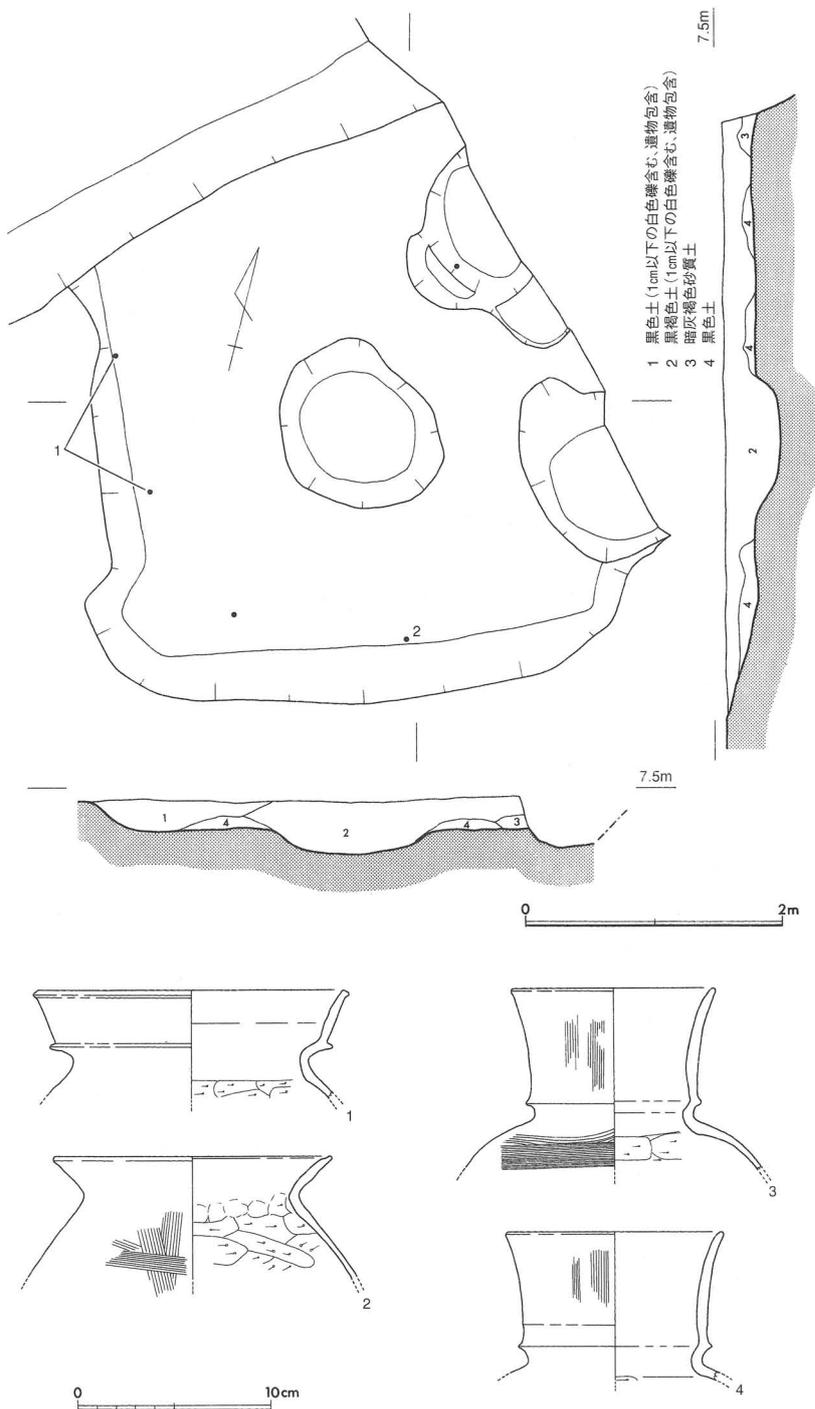
建物を検出した調査区南端の県道沿いの一帯は、足の踏み場もないほどの柱穴が密集する。これらの柱穴は隅丸長方形または長楕円形プランで、長軸長が2mを超える大形のものが多いのが特徴である。切り合いが激しく、建物の検出は困難であったが、細長い柱穴のうち、ある程度規則的に並ぶものが認められた。

SB28 1×4間以上の側柱建物と考えられる。規模は梁行2.7m、桁行7.5mと細長く長屋風のもので、床面積は20.25㎡

を測る。棟方向はN-33°-Wである。非掲載だが、古式土師器小片と肥前系陶器の小片が出土していることから、建物の時期は近世のある時期と考えられる。

SB29 建物の東側は溝と切り合い、柱穴の検出は困難であった。また、南側は調査区の壁にかかり不明である。道に面した柱穴列であることから現状では建物と考えたが、柵列状遺構の可能性もある。建物として捉えた場合、南北7m以上、東西8m以上と大規模で、内部にこれに伴う柱穴が配置されている可能性もあるが確認できなかった。出土遺物は古式土師器小片、糸切りの土師器小片のみだが、柱穴の形態、配置状況から近世以降の建物と考えられる。

SB30 SB29と同様に、道に直交する建物で、3×5間以上の建物である。建物を構成す



第15図 SX10、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)

る柱穴は、ほかにもある可能性もあるが、明確にそれと分かるものはない。規模は梁行5.5m、桁行12.8m以上と考えられ、床面積は70.4m²はあると考えられる。柱穴プランはこれまで見てきた建物と同様に細長いもので、1の焙烙と、2の肥前磁器碗が出土している。碗は18世紀後半の染付で、ほかに17世紀代の肥前磁器小片も出土している。

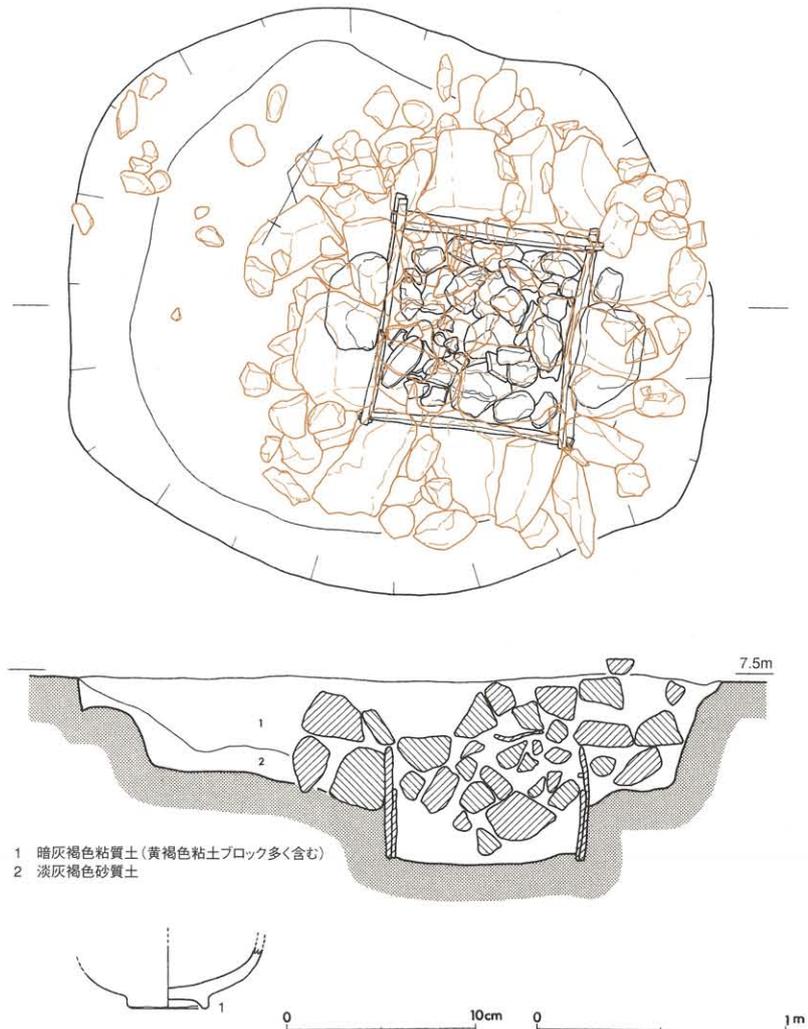
2. SX10 (第15図)

調査区北端部のSD19に切られた、方形の掘込みである。東西4.2m、南北4.4m以上、深さ20cm程の規模で、底面直上には薄く暗灰褐色の砂質土が堆積していた。また、中央で大きな浅い土坑が検出されたが、これに伴うものかは不明である。底面からやや浮いた位置で、掘方に沿うように遺物を検出した。土器は時期的にまとまりのあるもので、無柱穴の竪穴建物である可能性が高い。土器は、複合口縁(1)及び単純口縁の甕(2)と、直口壺が2個体(3・4)である。2はいわゆる布留系で、口縁部は内湾気味にやや肥厚し、端部の内側にアクセントが付くものである。頸部内面は指頭圧痕が顕著である。これらは概ね草田6期併行のものであろう。

3. 井戸⁽⁶⁾ (第16~18図)

SE01 (第16図)

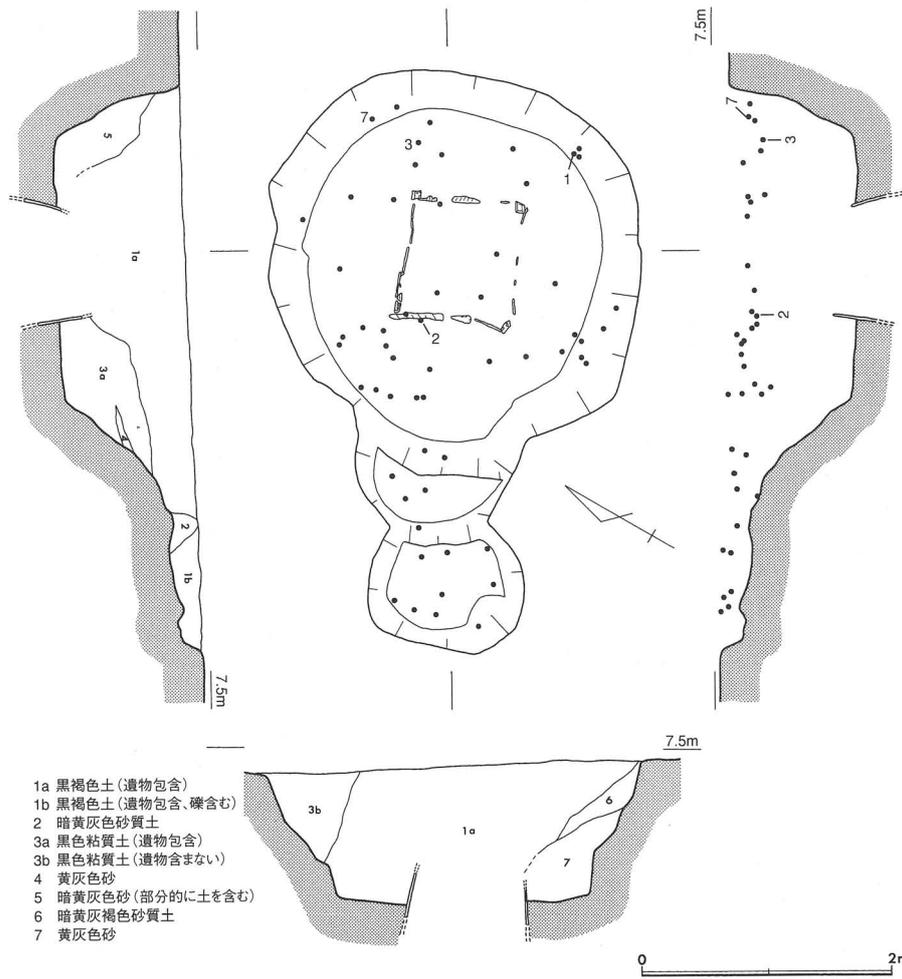
調査区の南西壁中央付近に位置する。長径2.6m、短径2.3m、深さ45cmの掘方の東側を、30cmほど2段掘りし、その中に井字状に板材を組んでいた。板組みの周囲から内部に至るまで大量の石が見られたが、周囲には40cm大の石が規則的に配置されていた。板組みは井筒と考えられ、石組みによる井側を構築していたと見られる。内部に見られた石は廃棄時に破壊し、投入したものであろう。出土遺物は1の陶器碗のほか、燻し瓦の小片がある。近世以降の井戸跡であろう。



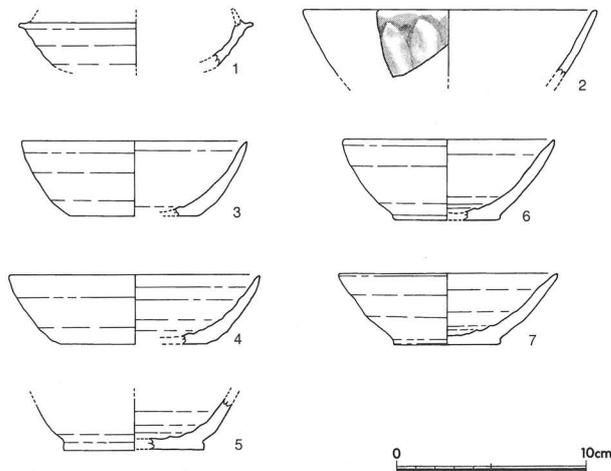
SE03 (第17図)

調査区中央部の東寄り

第16図 SE01、出土遺物実測図 (1:30、遺物1:4)



第17図 SE03実測図 (1 : 60)



第18図 SE03出土遺物実測図 (1 : 4)

の地点に位置する。本体の掘方は径約3 m、深さは現状で1.1mを測り、西側には浅い土坑状の掘方が取り付く。掘方中央の2段掘り部分に、木組みによる井側が検出された。井側は四隅に柱を設け、各辺に縦板を並べ立てるもので、棧は残存していなかったが、縦板組隅柱横棧型で、廃棄の際に上半部は破損したものと推定される。井筒は湧水が激しく確認することはできなかった。

掘方内の3・5・7層が井側の裏込め、1 a層は廃棄時の攪乱層で、遺物はこの層を中心に出土した。土坑状の

浅い掘方からも連続的に出土遺物があるため、この掘方も廃棄の際の所産と思われる。

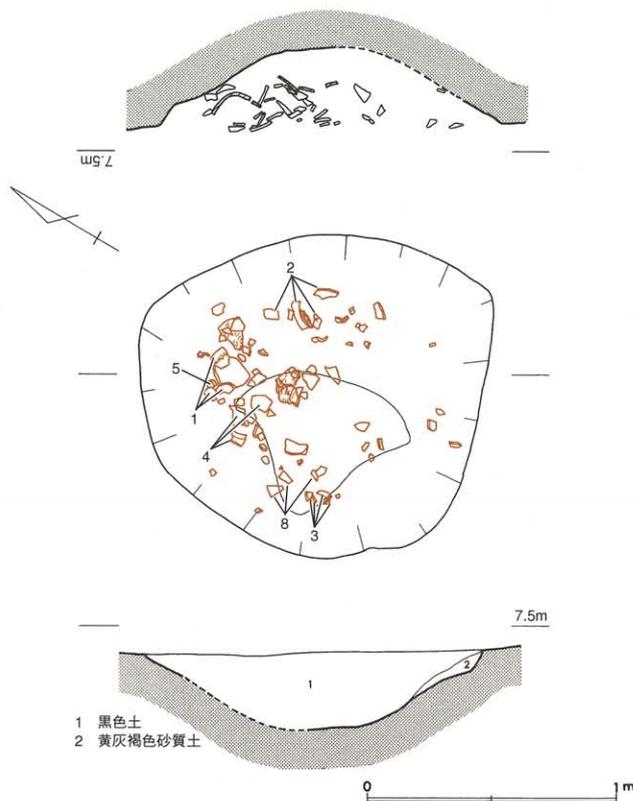
出土遺物（第18図）には1の須恵器坏身のほか、龍泉窯系の青磁碗でI-5類⁷⁾（2）、糸切りの土師器（3～7）があり、13世紀後半～14世紀に廃棄されたものと考えられる。

4. 土坑（第19図～40図）

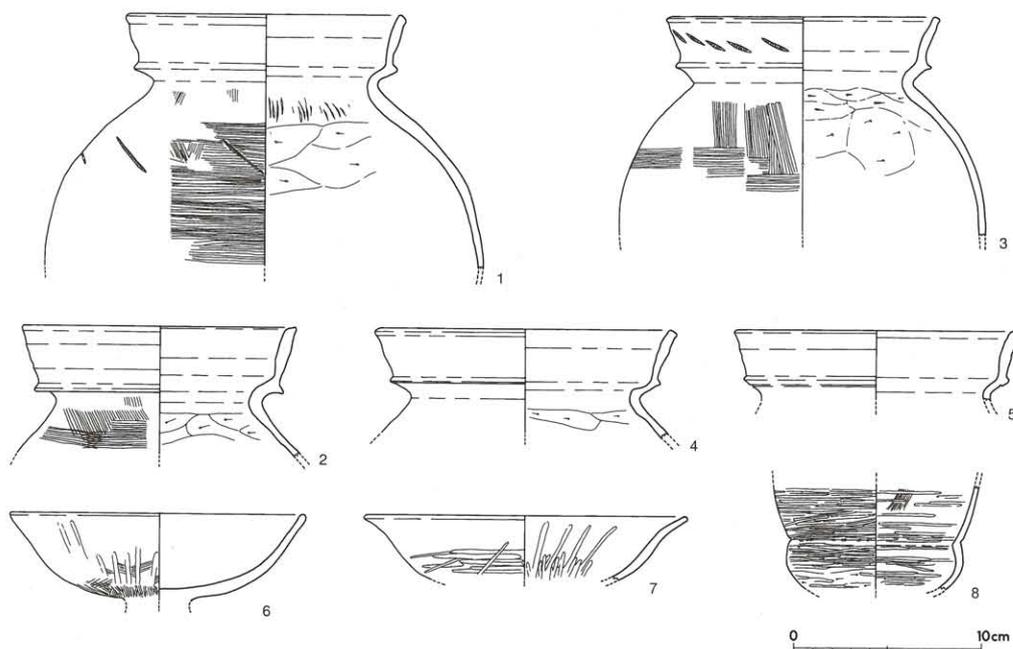
SK02（第19図）

調査区中央部やや北よりのところに位置する平面不整円形の土坑である。規模は長径140cm、短径130cm、深さ30cmである。土坑内には黒色土が堆積しており、流れ込みなどによる自然堆積の様子は認められなかった。黒色土中からは小片ながら、土器が一括して出土しており、土層観察と併せて考えると、土坑墓である可能性が高い。

土器は、1～5が複合口縁の甕で、6は低脚坏、7は高坏、8は小形丸底壺である。1は肩部に幅3cm程の刷毛状工具の小口による列点文が施される。破片のため列点が全周するものかどうかは不明である。3は口縁部に列点文を施し、工具幅や施文間隔は2に比べて狭いもので、全周するものかどうか



第19図 SK02実測図（1：30）



第20図 SK02出土遺物実測図（1：4）

は不明である。8は外面の体部下半にへら削りを施し、内外面に幅1mmほどの浅い沈線状の横磨きを施す。頸部には棒状工具の小口による調整が認められる。内外面ともに化粧土を施し、胎土も精良で、畿内の精製器種の作り方を意識したものである。

草田7期に併行すると考えられる。

SK03~05 (第21図)

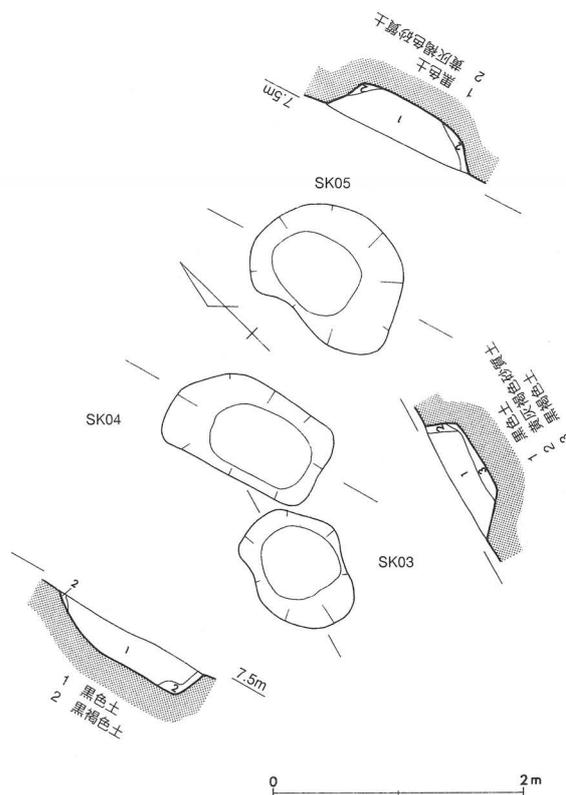
SK02の東側に隣り合って検出した土坑である。柱穴である可能性も考えられたが、建物を構成するほかの柱穴が認められなかったことから土坑とした。これらからは土師器小片が少量出土しているが、遺構の時期を決定し得る遺物は検出していない。

SK03 掘方は平面不整形で、規模は上端で長径約100cm、短径約80cm、下端で径約60cm、深さ約25cmを測る。黒色土が堆積しており、流入などによる自然堆積は認められなかった。

SK04 掘方は平面隅丸長方形で、規模は上端で長軸長約130cm、短軸長約80cm、下端で長軸長約80cm、短軸長約50cm、深さ約30cmを測る。上部に黒色土、底面には黒褐色土が堆積していた。

SK05 掘方は平面不整形で、規模は上端で長径約125cm、短径約95cm、下端で長径約90cm、短径約55cm、深さ約30cmを測る。土坑内には黒色土が堆積し、自然堆積の様子は認められなかった。

いずれの土坑も埋土の様子から近世までは下らないものと考えられる。



第21図 SK03~05実測図 (1:60)

SK06 (第22図)

SK05の北側に位置する平面隅丸長方形の土坑で、規模は、上端で長軸長約145cm、短軸長約100cm、下端で長軸長約100cm、短軸長約65cm、深さ約50cmを測る。掘方内には黒色土が堆積し、自然堆積した様子は認められなかった。土師器小片が出土している。

SK07 (第22図)

調査区東側のSD06に隣接する位置関係にある。掘方は平面隅丸長方形で、規模は、上端で長軸長110cm、短軸長75cm、下端で長軸長50cm、短軸長45cm、深さ40cmを測る。土坑内には黒色土が堆積し、土器の小片が出土したのみである。

SK08 (第22図)

SK06の南側4mの地点に位置する。掘方の平面形は基本的に隅丸長方形だが、東側

の小口に突部が取り付く。規模は、上端で長軸長170cm、短軸長95cm、下端で長軸長105cm、短軸長60cm、深さ50cmを測る。検出面において、掘方内に落ち込む状況で糸切りの土師器（1）が出土しており、13世紀後半～14世紀と考えられる。

SK09 (第22図)

先述のSK04に切られるかたちで検出した土坑である。掘方は平面隅丸三角形で、規模は、上端で長さ120cm、幅105cm、深さ20cmを測る。埋土は黒色土で、土師器小片が出土している。

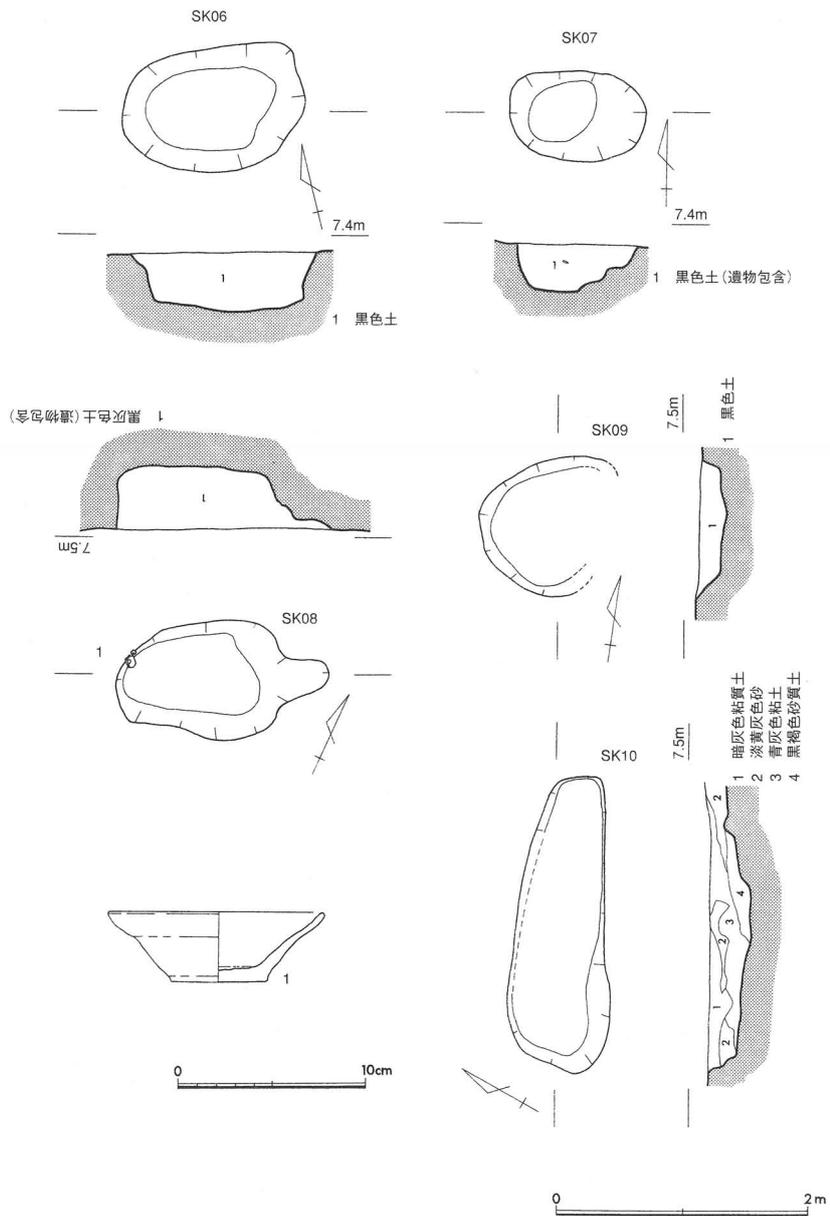
SK10 (第22図)

調査区東壁の中央部に位置する細長長方形の土坑である。規模は、上端で長軸長235cm、短軸長65cm、深さ約30cmを測る。1層の暗灰褐色粘質土、3層の青灰色粘土などの埋土が近世の包含層と類似し、出土遺物も土師器・須恵器のほか陶磁器小片があることから、近世以降の土坑と考えられる。

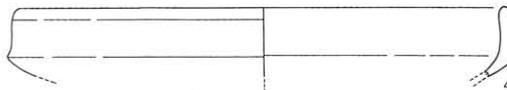
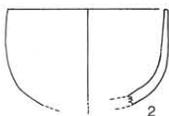
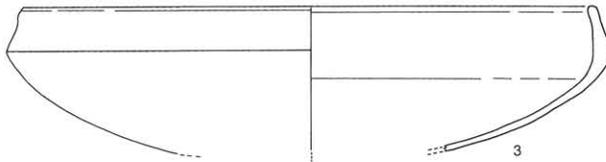
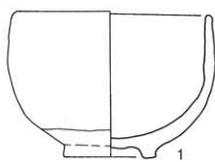
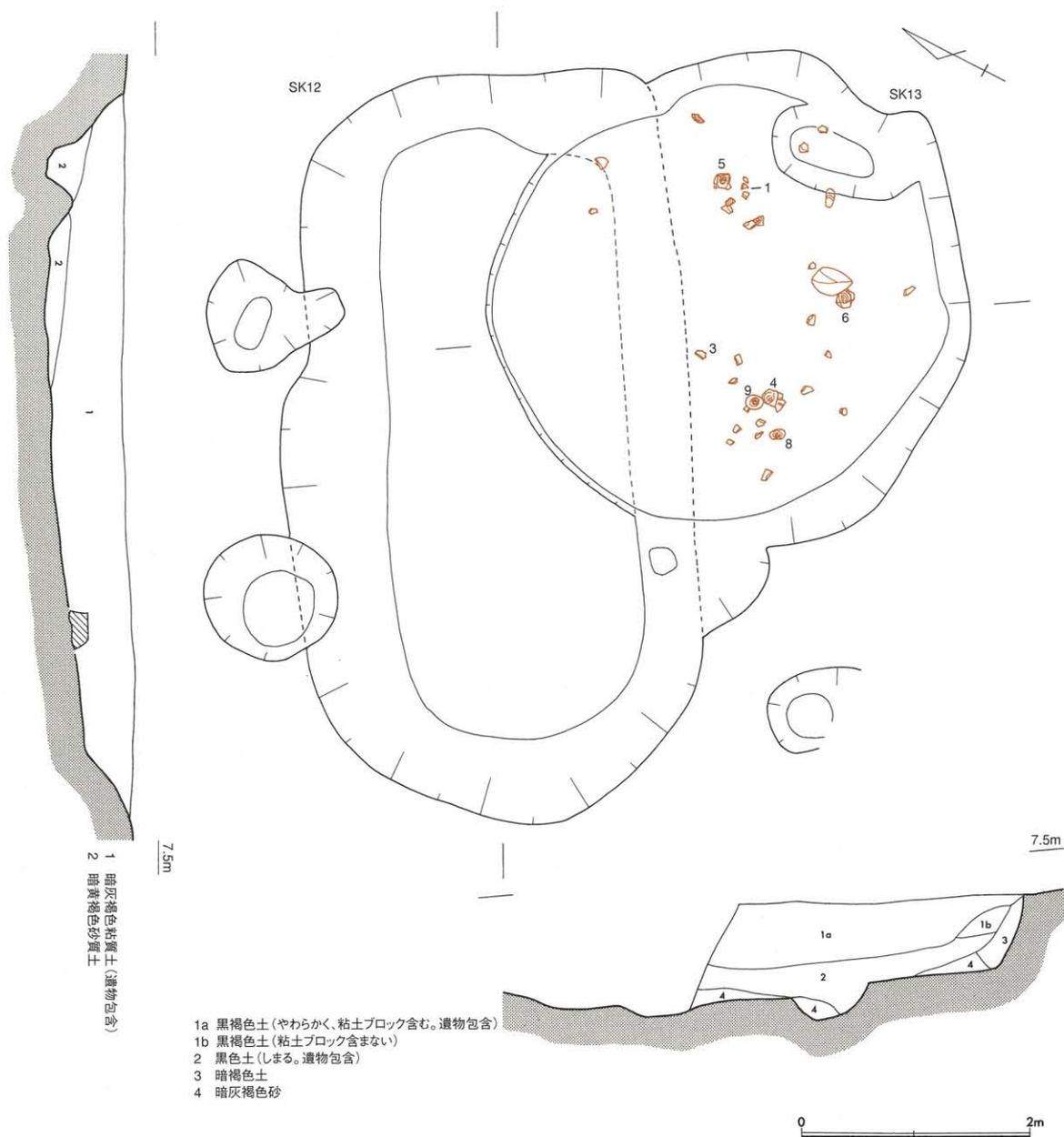
SK12・13 (第23図)

調査区中央の南東寄りに位置する2基の土坑で、重複して検出されたものである。切り合い関係からSK13が先行するもので、前述したように、SK12はSB01を切っていたと考えられることから、各遺構の前後関係はSK13・SB01→SK12と考えられるが、SK13とSB01の前後関係については不明である。

SK12 掘方は長方形に近く、規模は、上端で長軸長3.32m、短軸長1.82m、下端で長軸長2.7m、短軸長1.05m、深さ0.33mを測る。



第22図 SK06～10、SK08出土遺物実測図（1：60、遺物1：4）



0 10cm

第23図 SK12・13、SK12出土遺物実測図 (1:30、遺物1:4)

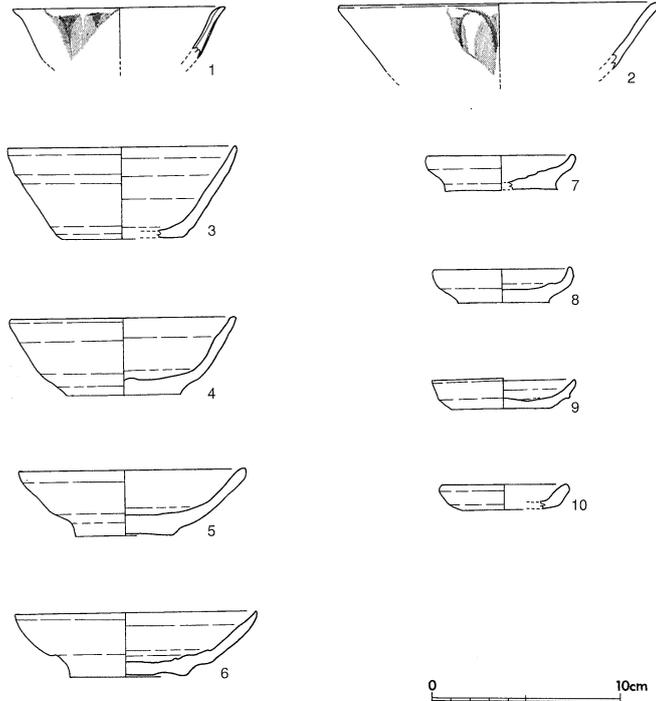
土坑内の堆積状況は単純で、基本的には暗灰褐色粘質土が堆積しているのみであった。

出土遺物は1の陶器碗、2の磁器碗、素焼きの焙烙が2個体ある。1は緑灰色釉で布志名焼である。3・4の底部には煤が付着し、被熱してひび割れと剥離が顕著である。

SK13 掘方は平面円形で、規模は、上端で径2.18m、下端で径1.88m、深さ0.42mを測る。土坑内には、黒褐色系の土砂が堆積し、SK12とは明らかに異なる埋土である。

遺物（第24図）は2層またはその上面で検出され、細片にな

った状態で出土した。1・2は龍泉窯系青磁で、いずれも鎬連弁文を削り出す。1は口径が小さいが碗で、口縁部が端反りになる。1・2ともに13世紀代のものである。3～10は糸切りの土師器で、坏は器高の高い3、低い5・6、中間の4があり、いずれも体部から口縁にかけて内弯するものである。小皿は細部のバリエーションが多様だが、底部が柱状に発達する7や、器高が低く口縁部が内弯する8・9が特徴的である。これらは概ね13世紀後半～14世紀の所産と考えられる。



第24図 SK13出土遺物実測図（1：4）

SK14（第25図）

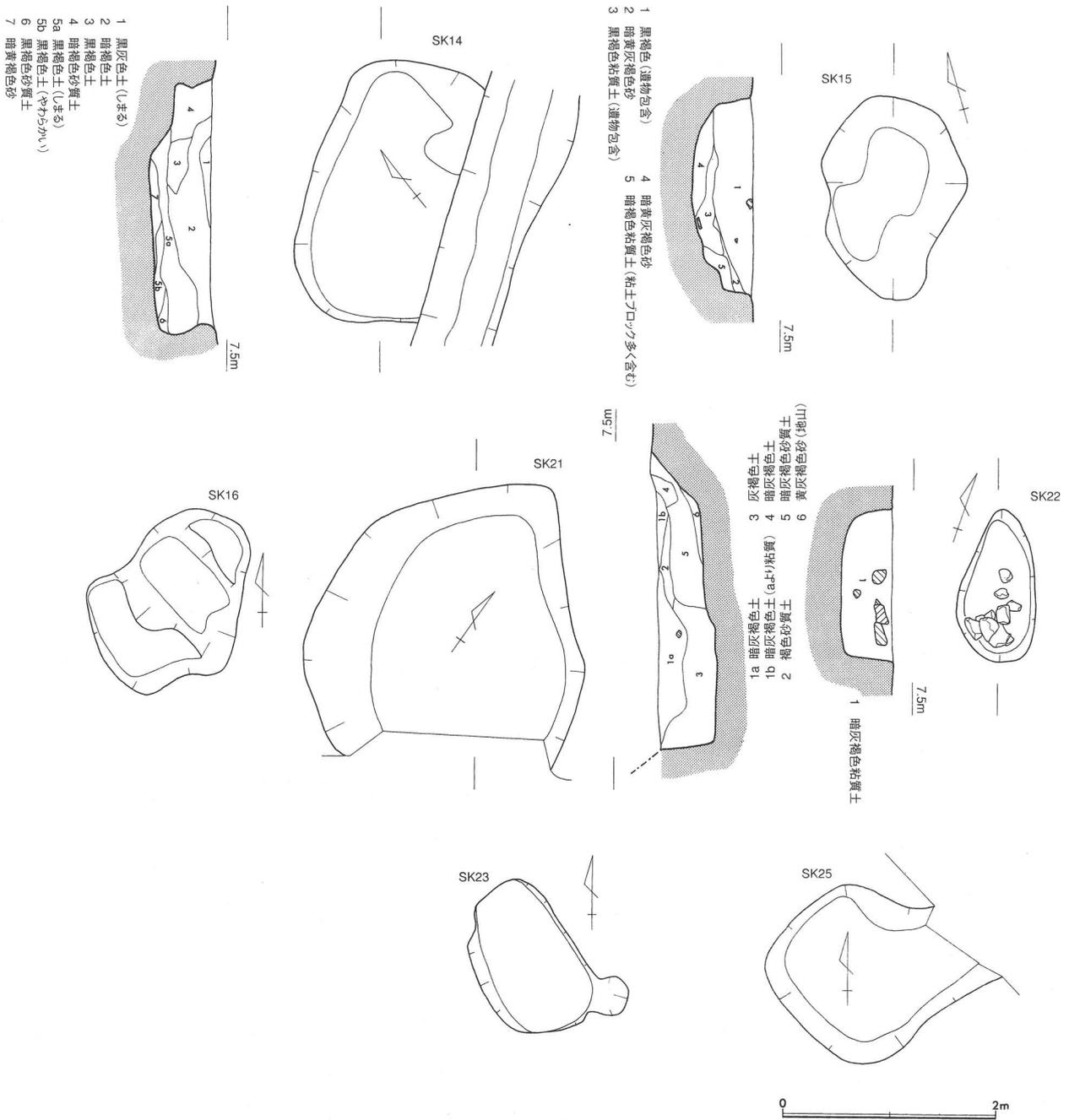
調査区中央の東寄りに位置し、SD05・06と切り合う土坑である。平面隅丸長方形で、規模は、上端で長軸長250cm、短軸長135cm、深さ60cmである。埋土は黒褐色系の土砂である。切り合い関係はSD06→SK14→SD05で、後述するSD05からは17世紀後半～18世紀前半の肥前陶磁器が出土していることから、SK14の下限もそうした時期ということになる。

SK15（第25図）

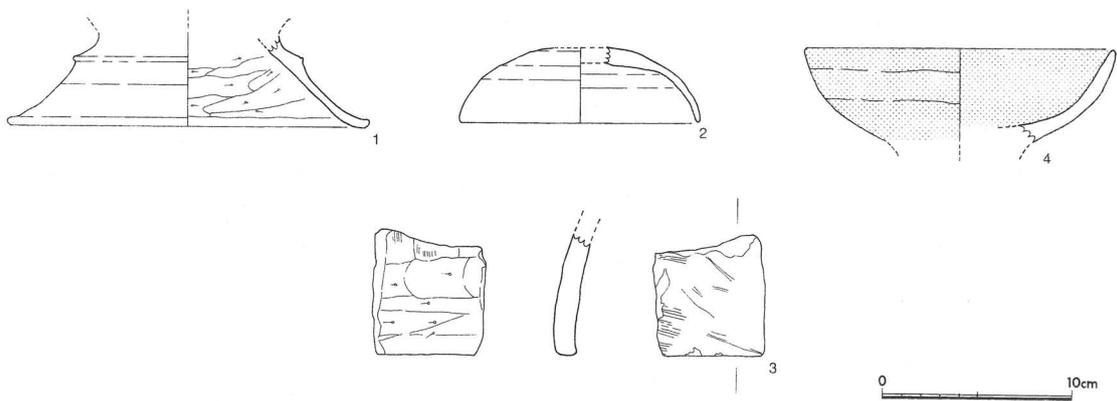
SD06南端の西側に位置し、掘方は不定形である。二つの柱穴が重複している可能性もあるが、断面では確認できなかったので単一の土坑とした。規模は上端で最大長195cm、最大幅130cm、下端で最大長130cm、最大幅80cm、深さ55cmである。埋土は黒褐色系だが、近世以降の陶磁器小片が出土している。

SK16（第25図）

調査区南東隅に位置し、SD15を切るかたちで検出した。掘方は2段掘りで、上端の長軸と下端の長軸は直交する。規模は、上端で長軸長185cm、短軸長130cmを測る。

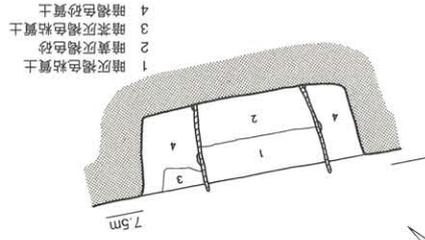


第25図 SK14~16・21~23・25実測図 (1:60)



第26図 SK16・23・25出土遺物実測図 (1:4, 1はSK16、2・3・4はSK23、4はSK25)

出土遺物として鼓形器台（第26図-1）があるが、これと同時期の溝を切っていることから、この土坑に伴うものかは疑わしい。

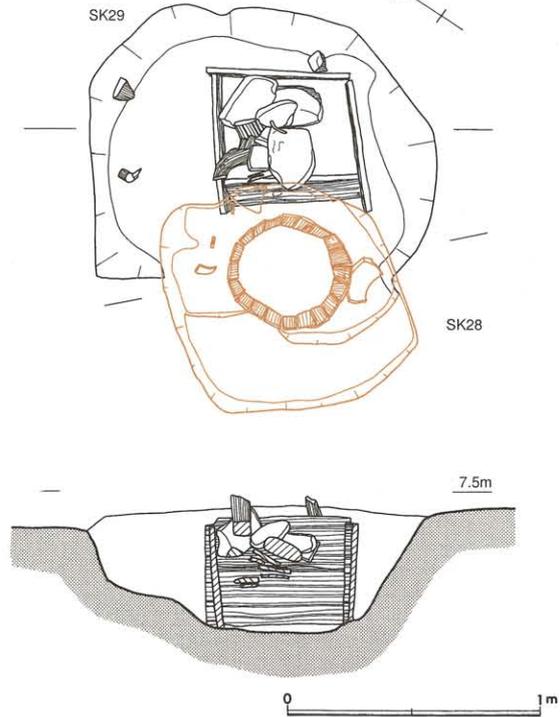


SK21 (第25図)

調査区南壁中央部に位置し、南東側は壁にかかる。掘方は胴膨れの長方形で、規模は、上端で長軸280cm以上、短軸260cm、深さ55cmを測る。出土遺物は皆無だが、埋土は暗灰色系の近世以降の堆積土である。

SK22 (第25図)

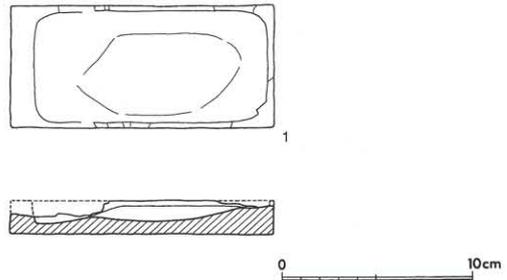
SX02の南端部に位置する、平面長楕円形の土坑である。上端の規模は、長径145cm、短径75cmで、深さは50cmを測る。埋土は1層で、10~20cm大の礫が面的に検出された。出土遺物はないが、埋土より近世以降のものと考えられる。



第27図 SK28・29実測図 (1:30)

SK23 (第25図)

SK22の南側に隣接する、平面隅丸長方形の土坑である。規模は上端で長軸長150cm、短軸長100cmである。出土遺物は須恵器の坏蓋と移動式竈の脚部がある（第26図-2・3）。2の天井部はへら削りを省略するもので、出雲5期に相当する。



第28図 SK29出土遺物実測図 (1:4)

SK25 (第25図)

調査区東壁にかかる、不定形の土坑である。規模は上端で南北165cm、東西200cm以上を測り、内外面赤彩の土師器高坏を出土している。古墳時代中期に見られる高坏ほど坏部は内弯せず、浅い。後期以降まで下るものであろう。

SK28・29 (第27図)

調査区北西端に位置し、重複して検出した。切り合いから前後関係はSK29→SK28である。

SK28 不整形の掘方の中心に桶側を据え、周囲を砂質土で裏込めしたものである。掘方の規模は上端で一辺90cm、深さ32cmで、検出面において近世以降の陶磁器片を検出したが、詳細な時期は不明である。性格は、現状では掘方が浅く、湧水もないことから土坑としたが、桶側を井筒とする井戸であった可能性も十分ある。

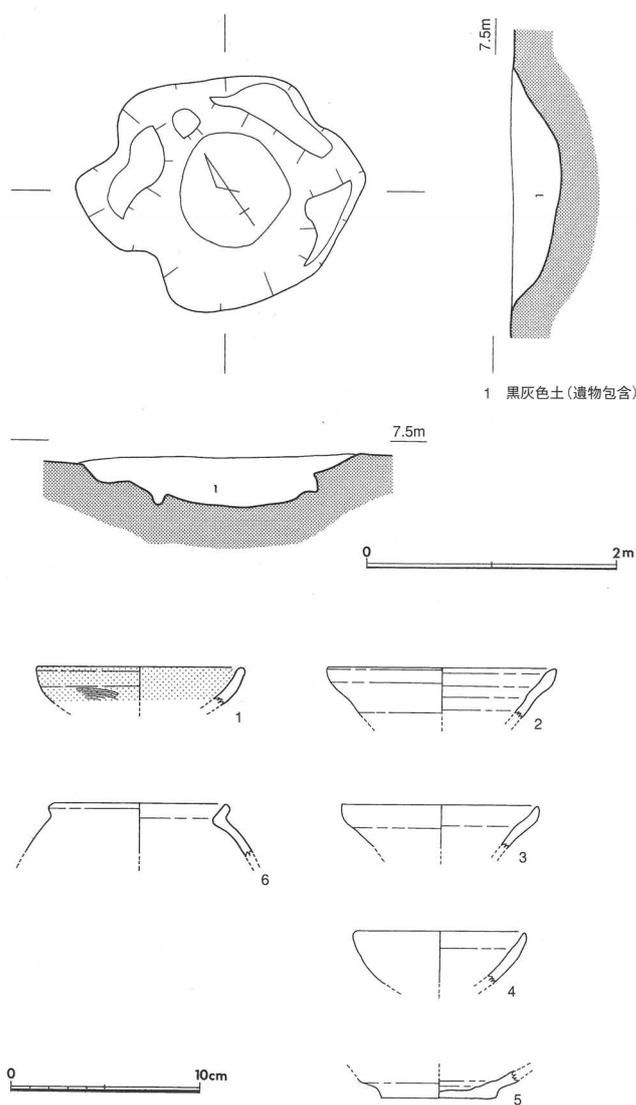
SK29 不整円形の掘方の南東側に柱目の板材を単純に組み合わせたもので、ほぞ穴等は認められなかった。掘方の規模は、上端で径140cm、深さ50cmを測る。土坑内には3本の杭が認められた。杭は位置的に見て、板を支えるためのものではない。板組みの内部上半には20cm大の礫と板切れ、燻し瓦小片が廃棄してあった。また、硯が出土している（第28図）。長辺14cm、短辺11.5cm、高さ1.75cm、重量240.1gで、海・陸部に墨痕がよく残る。また、長期間使用したと見られ、陸部の中央は摩耗が著しい。石材は不明である。

遺構の性格はSK28と同様の理由で、井戸と見られ、正確な時期は不明だが、近世以降と考えられる。

SK30 (第29図)

調査区中央付近に位置する平面不整円形の土坑である。規模は上端で南北200cm、東西175cm、下端で南北90cm、東西85cmで、深さは35cmである。埋土は遺物を包含する黒灰色土で、流れ込みによる自然堆積の痕跡は認められなかった。

出土遺物として、1の赤彩土師器の坏、2～5の糸切りの土師器、6の陶器の壺などがある。6は近代以降の可能性はあるが、2～5の土師器にまとまりがあることと、埋土を考慮に入れると6は攪乱による混入と考えるのが妥当であろう。土師器は外反気味に立ち上がり、口縁部で内弯する特徴から13世紀後半頃のものと考えられる。



第29図 SK30、出土遺物実測図 (1:6、遺物1:4)

SK31 (第30図)

SK30の北側に隣り合う平面不整円形、断面すり鉢状を呈す土坑で、掘方の規模は、上端で径2.5m、下端で径0.65m、深さ0.7mを測る。土坑内には黒色土、黒灰色土が凹状に堆積していた。性格は不明であるが、底面近くに達すると湧水があることから、井戸であった可能性もある。

出土遺物として、1の瓦質のすり鉢があるほか、須恵器小片、糸切りの土師器小片等があるが、遺構の時期を判断するに足るものはない。埋土と併せて考えると、中世のある時期ということになる。

SK32 (第31図)

SK30の南東に位置する土坑である。掘方は平面不整円形で、東側に浅い段が取り付く。規模は上端で南北2.5m、東西3.1m、下端で、南北1.4m、東西1.5m、深さ1.1mである。

土坑内の堆積状況は、1～4・6層がレンズ状に堆積し、上述の浅い段に連続的に堆積していることから、5層上面で掘り返しが行われたものと推測される。5層は湧水のため十分な観察ができなかった。土坑の中心部からは10～30cm大の礫が検出されたが、組んだ状態ではなかった。

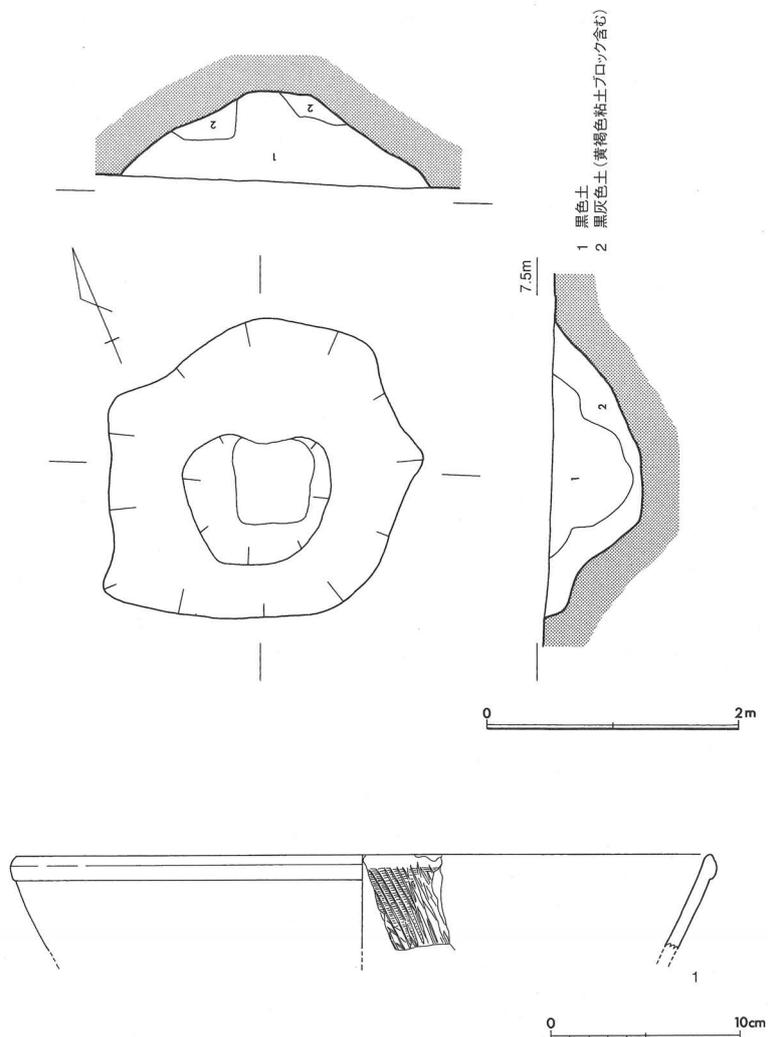
土坑の性格を決定付ける積極的な根拠はないが、比較的大型の礫が出土していること、掘り返しが行われたこと等から、本来は井戸であった可能性も否定できず、廃棄時に再掘削して石組みによる井側を取り壊したものと推測される。

遺物は小片であるが1層から出土している。1・2は複合口縁の甕で、3は高坏、4は須恵器の坏身である。5は糸切り底の土師器で、底部の内外面に煤が付着する。このうち、1～4は遺構に直接伴わないものである。時期については、埋土や5から、SK31と同様に中世のある段階としか言及できない。

SK34 (第32図)

調査区北西のSD18と切り合う土坑である。掘方平面は隅丸長方形で、規模は、上端で長軸長2.95m、短軸長1.2m、下端で長軸長2.65m、短軸長0.7m、深さ0.35mを測る。土坑内には遺物を包含する黒色土が堆積していた。切り合い関係はSD18→SK34である。

出土遺物は須恵器の坏身(1)と高坏脚部(2)以外はある程度の時期的なまとまりが認められる。3は底部を欠損するが糸切り底の土師器坏で、口縁が大きく開きながら直線的に立ち上がる。4は同様の小皿である。5は口縁部が内弯して浅い沈線状のアクセントを持つ上田E類[®]で、14世紀後半～15世紀前半頃の



第30図 SK31、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)

青磁碗である。6は李朝の陶器碗で、見込みと削出し高台の畳付に砂目が残る。15～16世紀代と見られる。7は備前IV期⁹新相またはV期のすり鉢、8は在地の陶器で、すり鉢である。

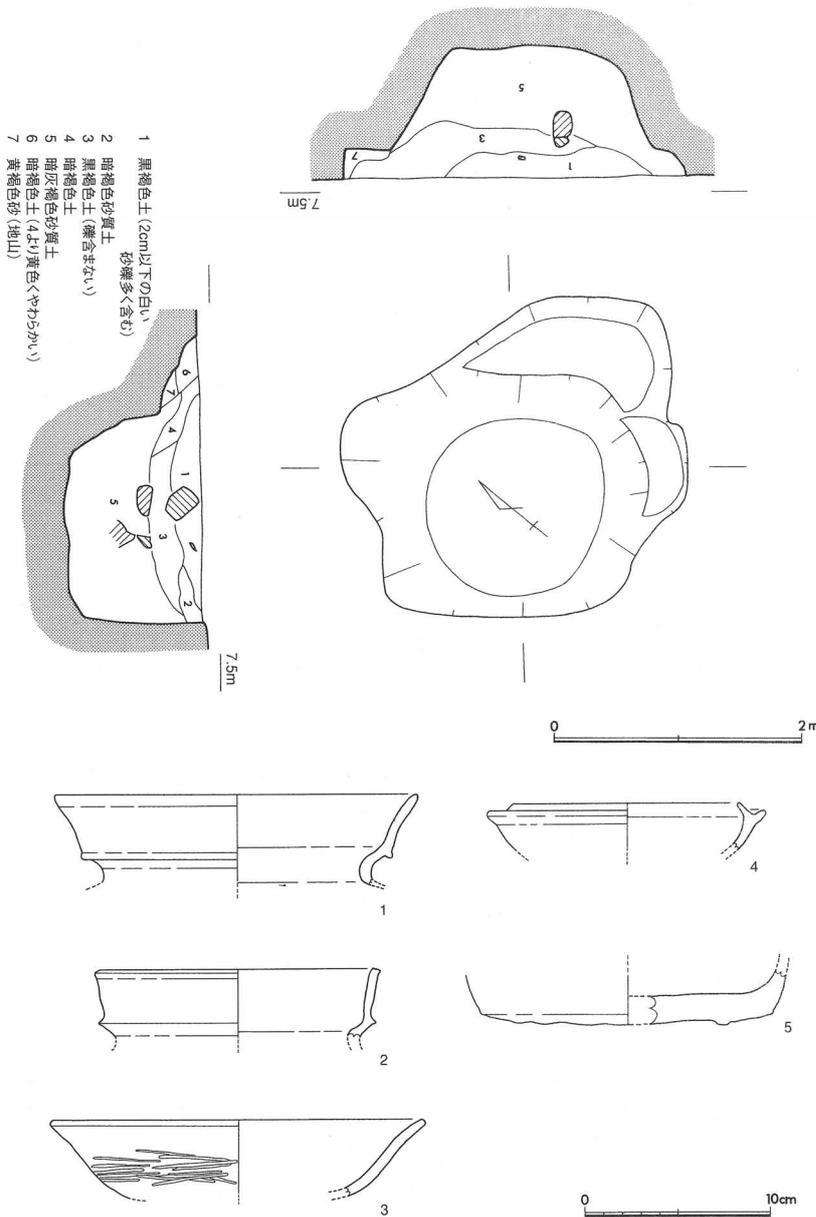
SK34の性格は不明だが、15世紀を中心とした時期といえよう。

SK35 (第33図)

調査区南東壁の中央付近に位置する、平面円形の土坑である。掘方の規模は、上端で径105cm、下端で径70cm、深さ30cmを測る。掘方の底面にはもう一段掘り窪められた部分があり、柱穴の可能性もあるが、土層観察から古い柱穴を切ってつくった土坑とした。土坑内には遺物を包含する黒色土が堆積していた。

出土遺物には陶器と青磁がある。1は濃茶褐色釉の甕で、石見焼であろうか、2は上田B-IV類の線描蓮弁文碗で、15世紀末～16世紀初頭のものである。1は古く見ても19世紀より遡るものではないことから、2は混入

もしくは先行する柱穴に伴うものと思われる。この他、図示できなかったが絵唐津の陶片も出土している。



第31図 SK32、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)

SK36 (第34図)

SD01中程の西側に位置する、平面円形の土坑である。掘方の規模は、上端で径2.25m、下端で長径1m、短径0.8mで、深さは0.9mを測る。埋土は黒褐色系のもので、乱れや掘削面などは認められなかった。2層中からは、5～30cm大の礫による集石が検出された。出土状況から流入とは考えられず、人為的なものと思われる。土坑底部付近では湧水が激しいことから、井戸の可能性も考えられる。出土遺物は、1が備前IV期古相のすり鉢で、底部と口縁部は別資料であるが同一個体と思われる。

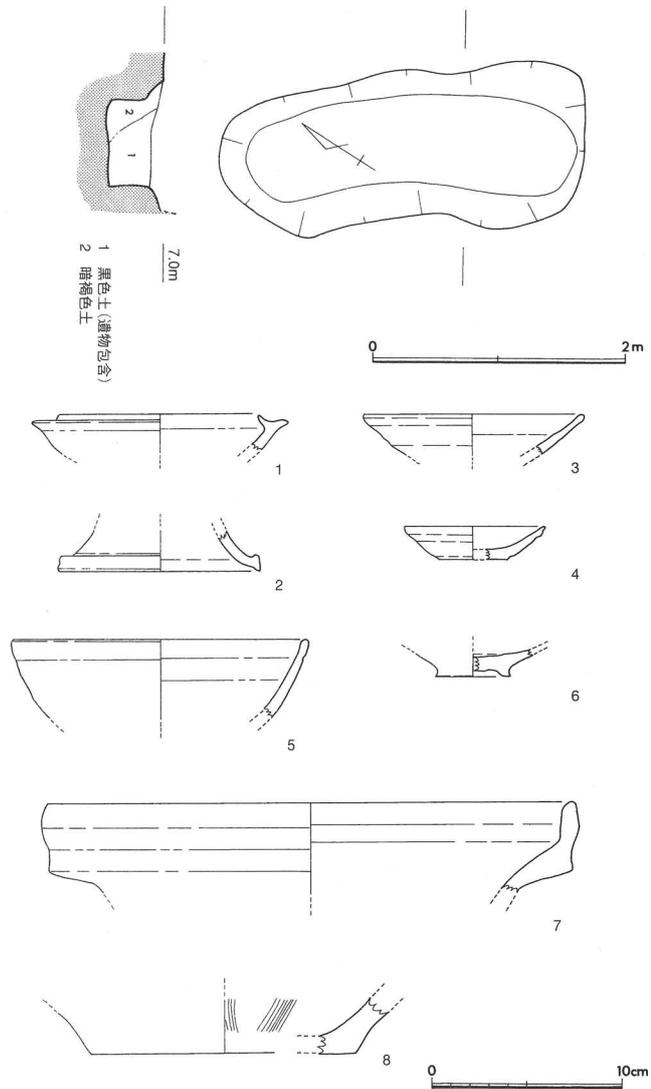
時期は15世紀前半頃である。2は糸切り底の土師器である。

SK 37 (第35図)

SK 35と36の間に位置する、平面不整楕円形の土坑である。掘方は中央部が一段低い2段掘となる。規模は、上端で長径3.4m、短径2.9m、下端で長径1.2m、短径1.1m、深さ1.35mを測る。堆積状況は、黒褐色系の土砂が単純に堆積していたが、2段掘りになる辺りから湧水が激しくなり、2層の下半部については十分な観察ができなかった。

2層の上面以下からは10~30cm大の角礫が少量検出されたが、井側の部材として使用したものかどうかは明確にできなかった。遺構の性格は、掘方の特徴から井戸である可能性が高い。

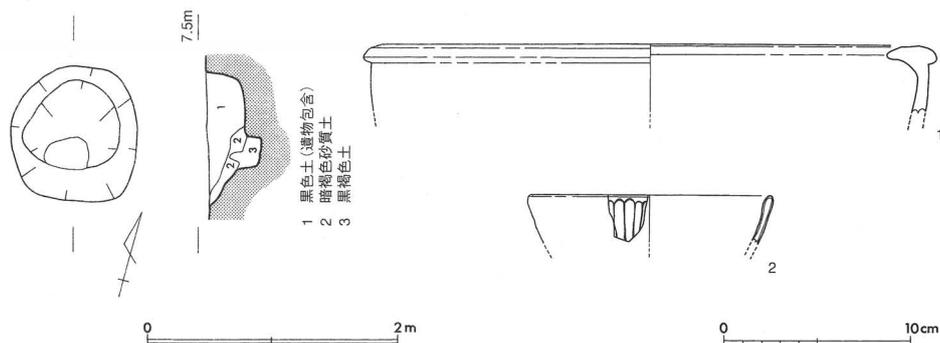
遺物は少量ながら2層から出土している。1は複合口縁の甕、2・4は単純口縁の土師器甕である。3は高坏であろうか。いずれも小片で、遺構に伴うものとは断定できない。



第32図 SK34、出土遺物実測図 (1 : 60、遺物1 : 4)

SK 38 (第36図)

調査区北端部のSD 19に隣接する、平面隅丸長方形の土坑である。掘方の規模は、上端で長軸長2m、短軸



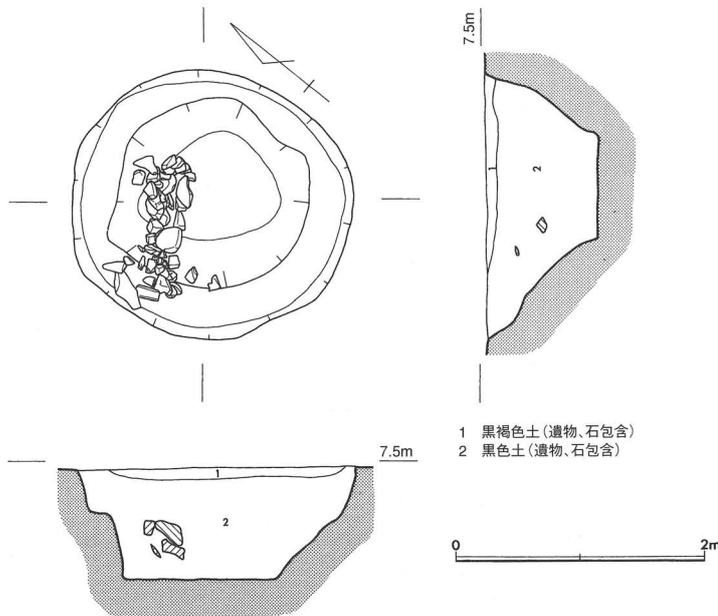
第33図 SK35、出土遺物実測図 (1 : 60、遺物1 : 4)

長1.2m、下端で長軸長1.4m、短軸長0.45m、深さ0.85mを測る。土坑内には、6層を除いてレンズ状の堆積が見られ、最上面には近世の暗青灰色粘質土が見られた。性格は不明で、遺物（第37図）は須恵器が出土している。1は高台が直立し、底部に回転へら削りを施す壺か鉢の類であろう。2は3方透かしの高坏である。図示できなかったが、ほかに赤彩土師器の小片が出土している。

SK39 (第36図)

調査区中央やや西寄りに位置する不整円形の土坑である。掘方の規模は、上端で長径2m、短径1.5m、下端で長径1.35m、短径1.1m、深さ0.3mを測る。堆積土は黒灰色土で、10cm前後の礫とともに遺物が検出された。

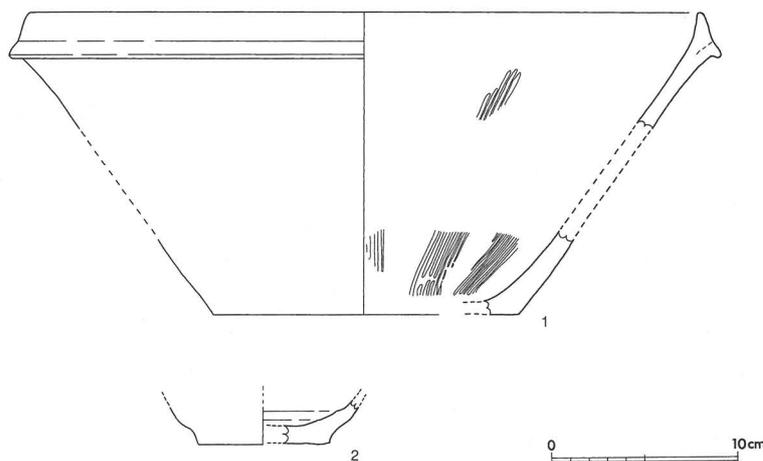
第37図-3は肥前系磁器の皿、4~7は陶器である。4は皿、5は胎土目の唐津皿、6は在地のすり鉢、7は小碗で、肥前系であろうか。出土遺物には時期幅があるが、遺構は19世紀以降の可能性が高い。



SK40 (第36図)

調査区の北端付近に位置する平面隅丸長方形の土坑である。掘方の規模は、上端で長軸長1.65m、短軸長1.1m、下端で長軸長0.85m、短軸長0.7m、深さ0.7mを測る。土坑内には黒褐色系の土砂が厚く堆積していた。

出土遺物（第37図）は、8の土師器甕のほか、須恵器の小片が出土している。古墳時代後期と考えられる。



SK41 (第36図)

SK40の北に隣り合う、平面楕円形の土坑である。掘方の規模は、上端で長径1.5m以上、短径1.35m、下端で長径0.85m、短径0.8m、深さ0.75mを測る。黒褐色系の土砂が堆積しており、遺物は土師器小片が出土しているが、図示できるものはなかった。

第34図 SK36、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)

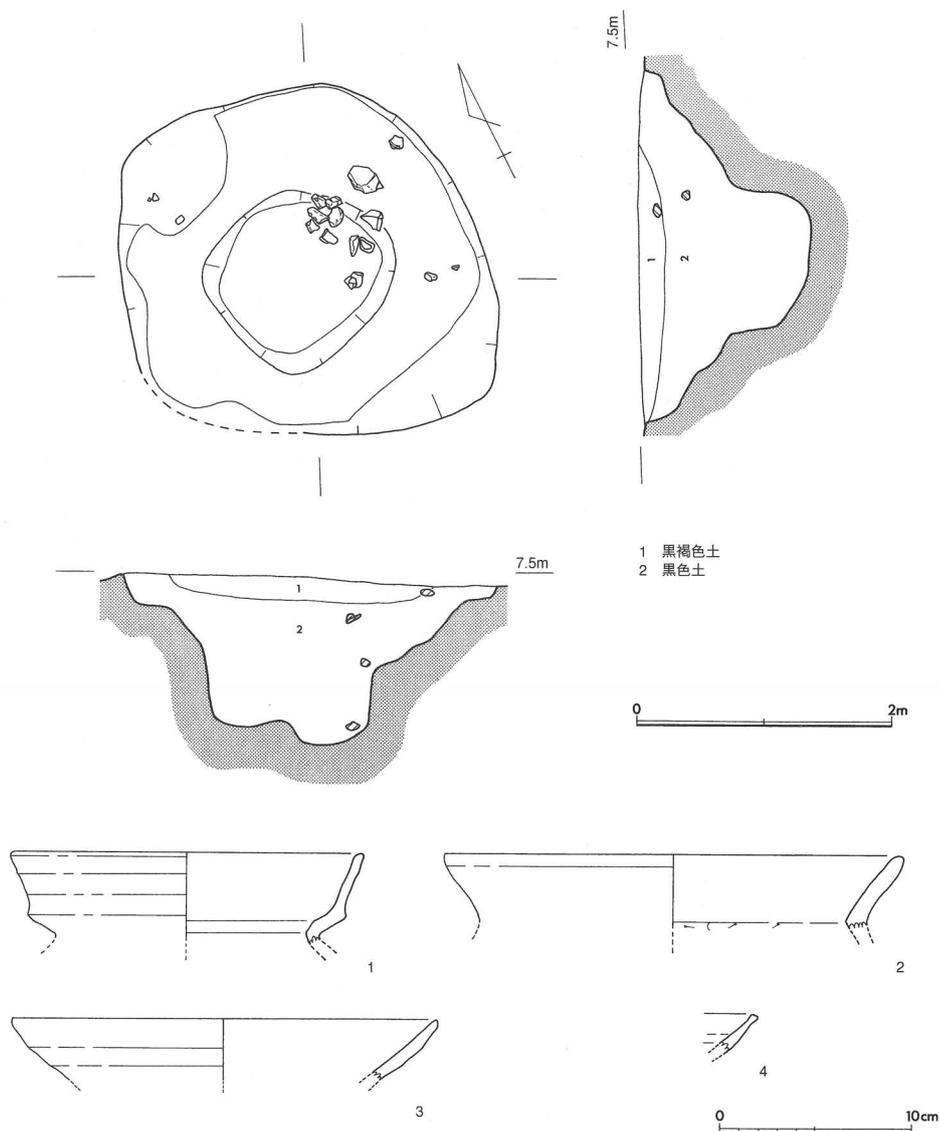
SK42 (第36図)

SK36の北側に隣接する、平面隅丸方形の土坑である。掘方の規模は、上端で南北2.1m、東西1.9m、下端で南北1.1m、東西0.95m、深さ0.75mを測る。土坑内には黒褐色系の土砂がレンズ状に堆積しており、糸切りの土師器、土師器、須恵器等の小片が出土しているが、いずれも図示し得るものではなかった。なお、1層はSK36の埋土で、2・3層はこれに切られている状況が観察できる。このことから、SK42は15世紀の前半を下らないものと考えられる。

SK43・44 (第36図)

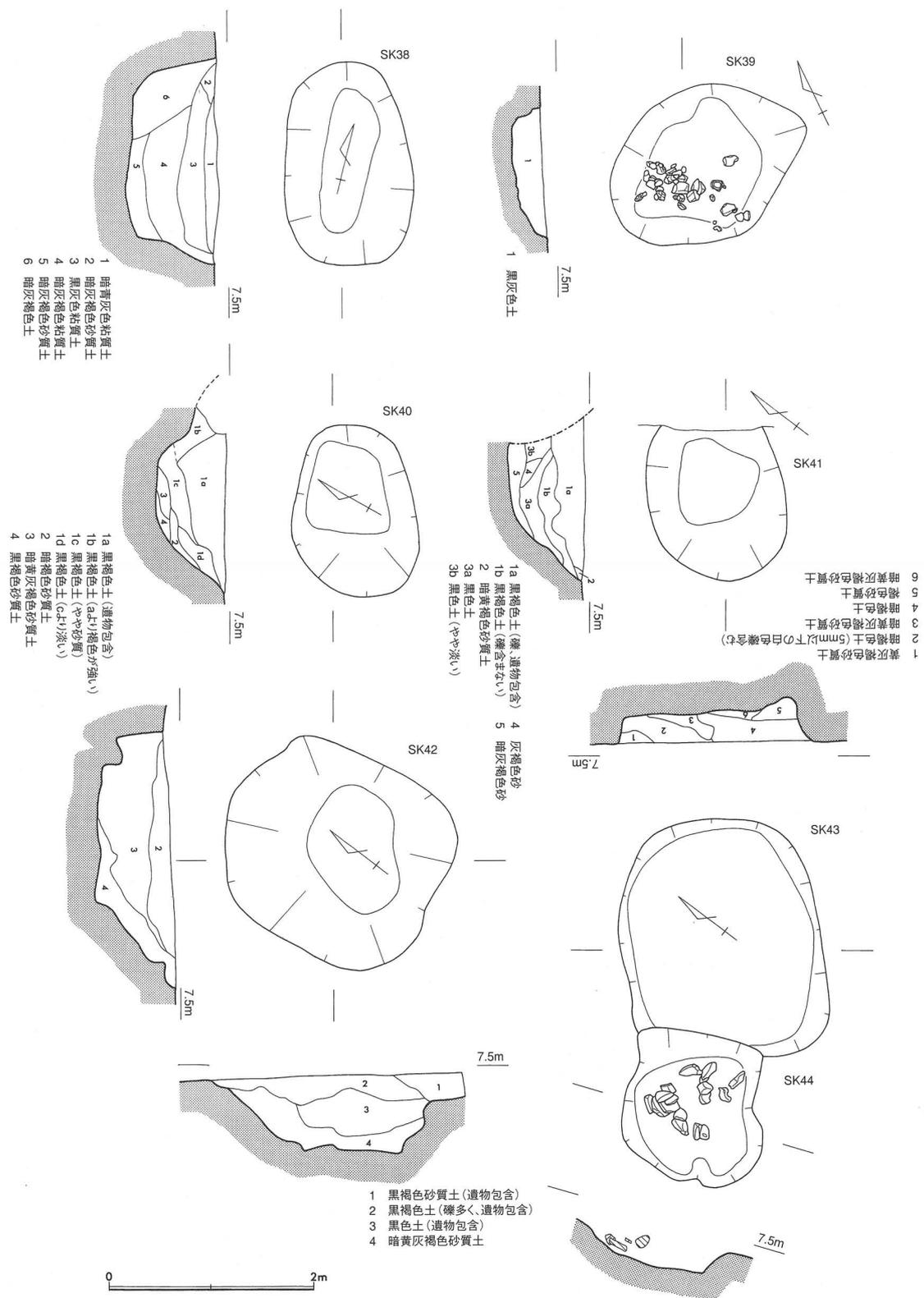
調査区北端部に位置し、切り合って検出された浅い土坑である。前後関係はSK43→SK44で、SK43からは須恵器、赤彩土師器等の小片が、SK44からも赤彩土師器の小片が出土している。

SK43 掘方は平面隅丸長方形で、規模は、上端で長軸長2.3m、短軸長1.95m、下端で長軸長2.1m、短軸長1.75m、深さ0.3mを測る。



第35図 SK37、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)

SK44 掘方は平面不整形で、規模は、上端で南北1.45m、東西1.45m、下端で南北1.15m東西1.2m、深さ0.3mを測る。土坑の底部で20cm前後の集石を検出した。



第36図 SK38~44実測図 (1:60)

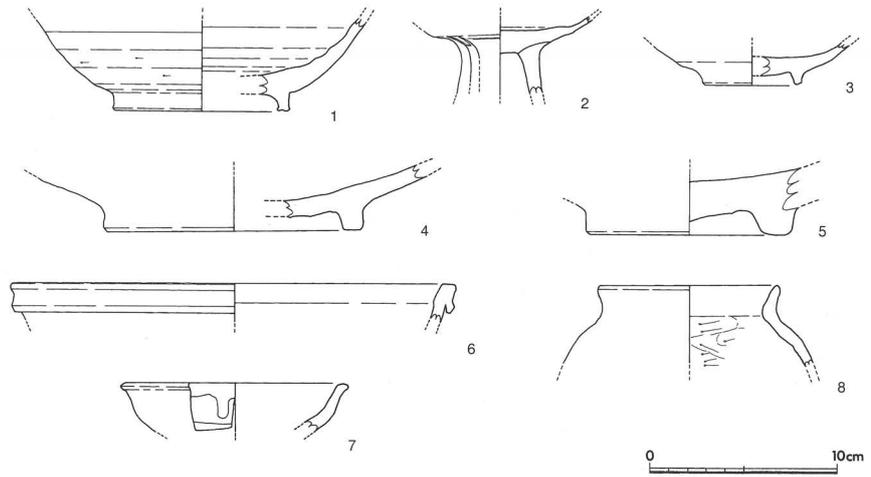
SK45 (第38図)

調査区中央に位置する、平面不整楕円形の土坑である。掘方の規模は、上端で長径2.1m、短径1.6m、深さ0.44mである。土坑内には黒褐色系の土砂がレンズ状に堆積しており、1・2層からまとめて土器が検出された。土器は2個体で、細かく割れた状態で土坑の東西に分かれ出土した。そのほか須恵器、糸切り底の土師器等の小片も少量出土しているが、遺構には伴わないものと見られる。

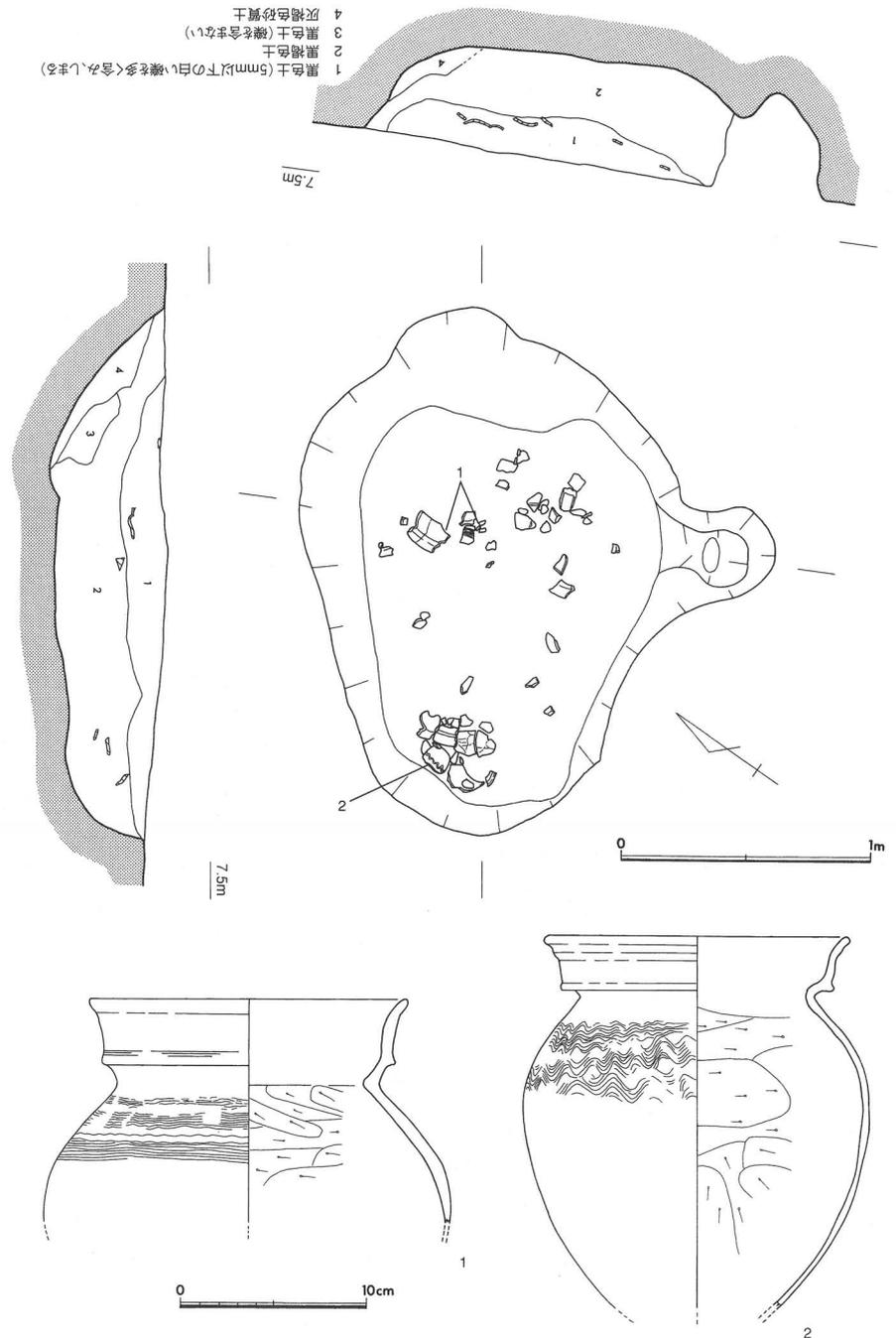
1・2ともに弥生土器の甕で、1は肩部に平行線文と波高の低い波状文を施す。頸部内面は鋭く屈曲し、口縁部は薄く外反する。2は肩部に2～3段の波状文を施す。口縁から頸部にかけては1と異なる特徴を持つが、いずれも草田5期に相当すると考えられる。

SK46 (第39図)

SK45に隣接す



第37図 SK38～40出土遺物実測図 (1:4、1・2はSK38、3～7はSK39、8はSK40)

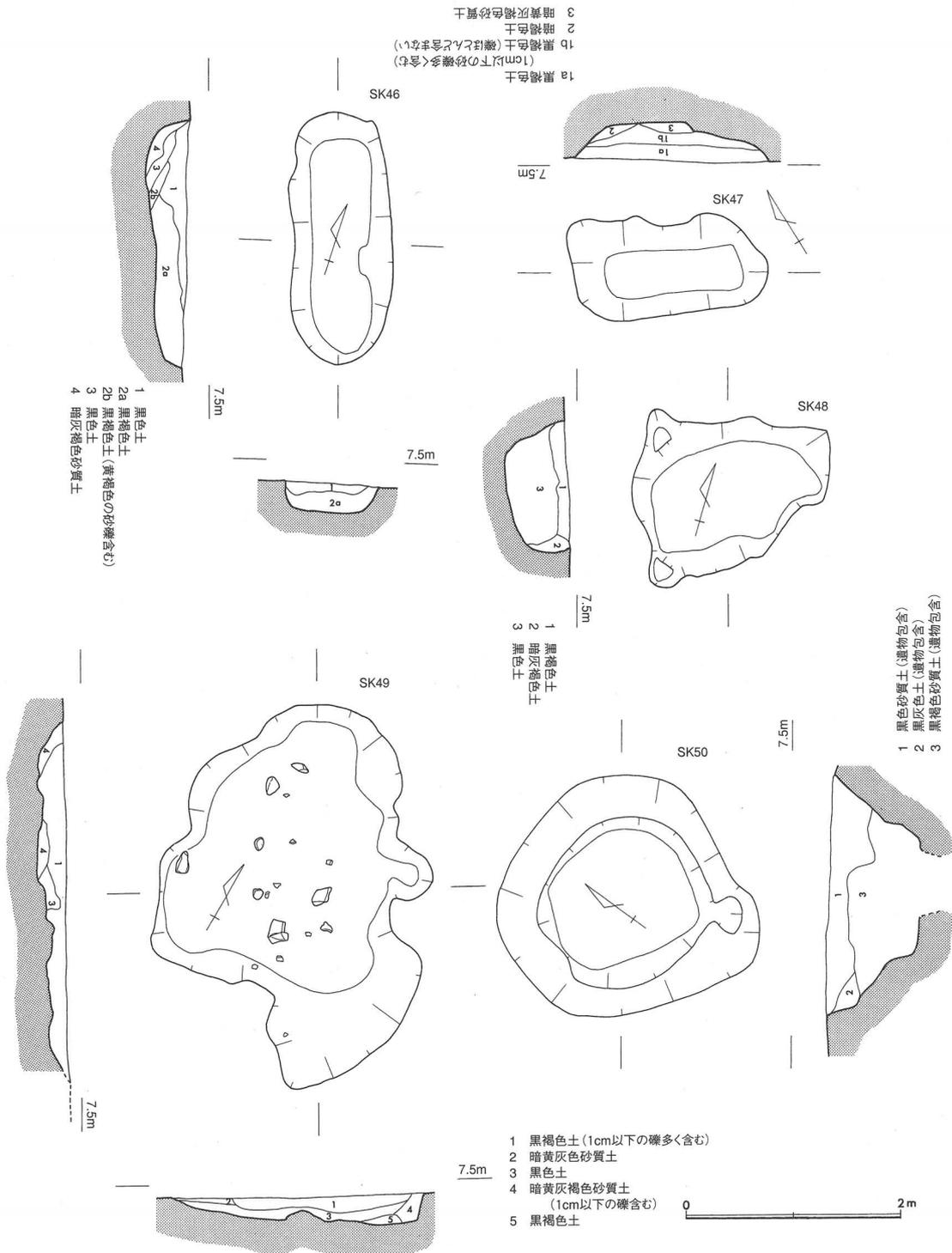


第38図 SK45、出土遺物実測図 (1:30、遺物1:4)

る隅丸長方形で、掘方の規模は、長軸長2.4m、短軸長0.9m、深さ0.4mを測る。黒褐色系の土砂が堆積し、第40図-1~3が出土した。1は須恵器の高坏で、2・3は糸切りの土師器である。

SK47 (第39図)

SK31の西側に位置する、平面隅丸長方形の土坑である。規模は長軸長1.8m、短軸長0.85m、深さ0.35mである。黒褐色土が堆積し、竈の軒庇と瓦質のすり鉢が出土した(第40図-4・5)。



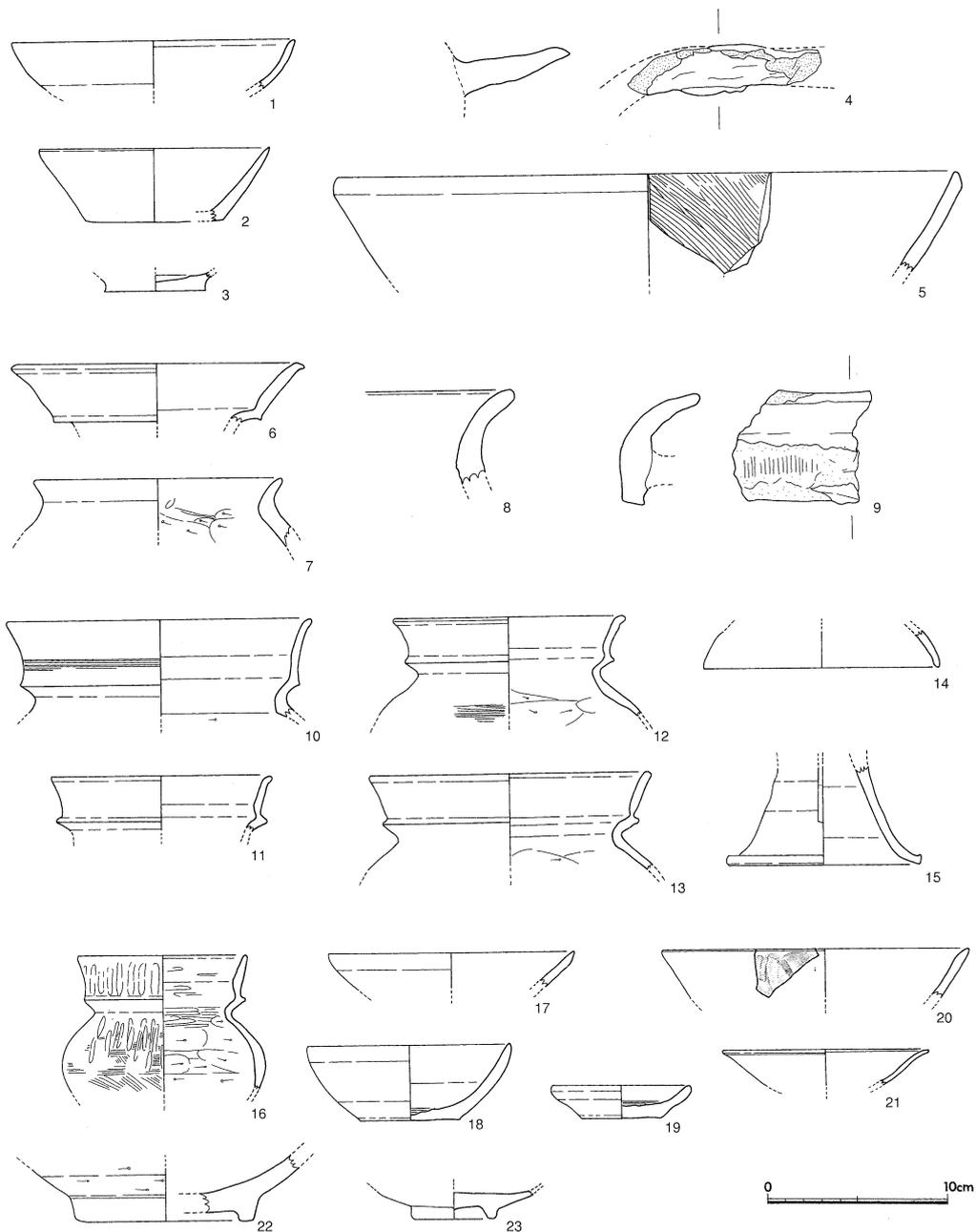
第39図 SK46~50実測図(1:60)

SK48 (第39図)

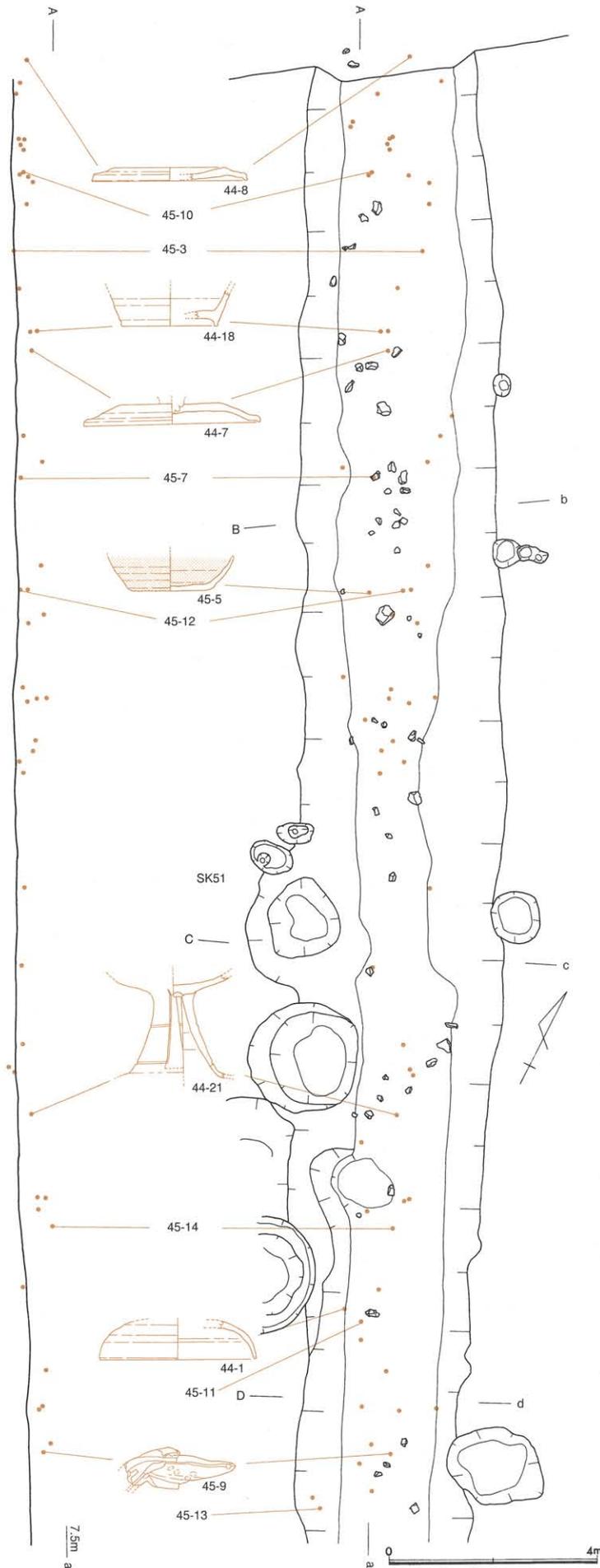
SK31の北側に位置する。平面は不整形で、規模は南北1.4m、東西1.9m、深さ0.55mである。黒褐色系の土砂が堆積し、小片ながら遺物も出土した(第40図-6~9)。9は竈で、軒庇は剥離して失われている。

SK49 (第39図)

SK48の東側に位置する不整形の土坑で、掘方の規模は南北2.8m、東西2.2m、深さ0.3mである。黒褐色系の土砂が堆積し、小礫に混ざって、草田4・6期の土器と須恵器が出土している(第40図-10~15)。15は3方透かしの高坏である。



第40図 SK46~50出土遺物実測図 (1:4、1~3はSK46、4・5はSK47、6~9はSK48、10~15はSK49、16~23はSK50)



第41図 SK50実測図(1) (1:120)

SK50 (第39図)

SK35の南側に位置する、平面円形の土坑で、南東部には柱穴状の窪みを取り付く。規模は上端で径2.2m、深さ0.85mである。底部は2段掘りとなるが、湧水が激しく、土層観察と最底面の検出はできなかった。

出土遺物は第40図-16~23がある。16は3層出土の土師器の小形甕である。17~19は糸切りの土師器である。20は口禿白磁皿でⅨ-1類、21は龍泉窯系青磁碗でⅠ-5類である。17~21は13世紀後半~14世紀におさまる。22は淡青灰色釉の肥前系陶器皿で、見込みに目跡が残る。17世紀代であろう。23は17世紀中葉~後半の三川内の皿で、濃緑色釉を蛇の目に剥ぎ取る。22・23は柱穴状の窪み周辺から出土したことから、後世の柱穴に伴うと考えられる。

湧水が著しい点と、掘方の特徴から、土坑は中世の井戸の可能性が高い。

5. 溝 (第41~62図)

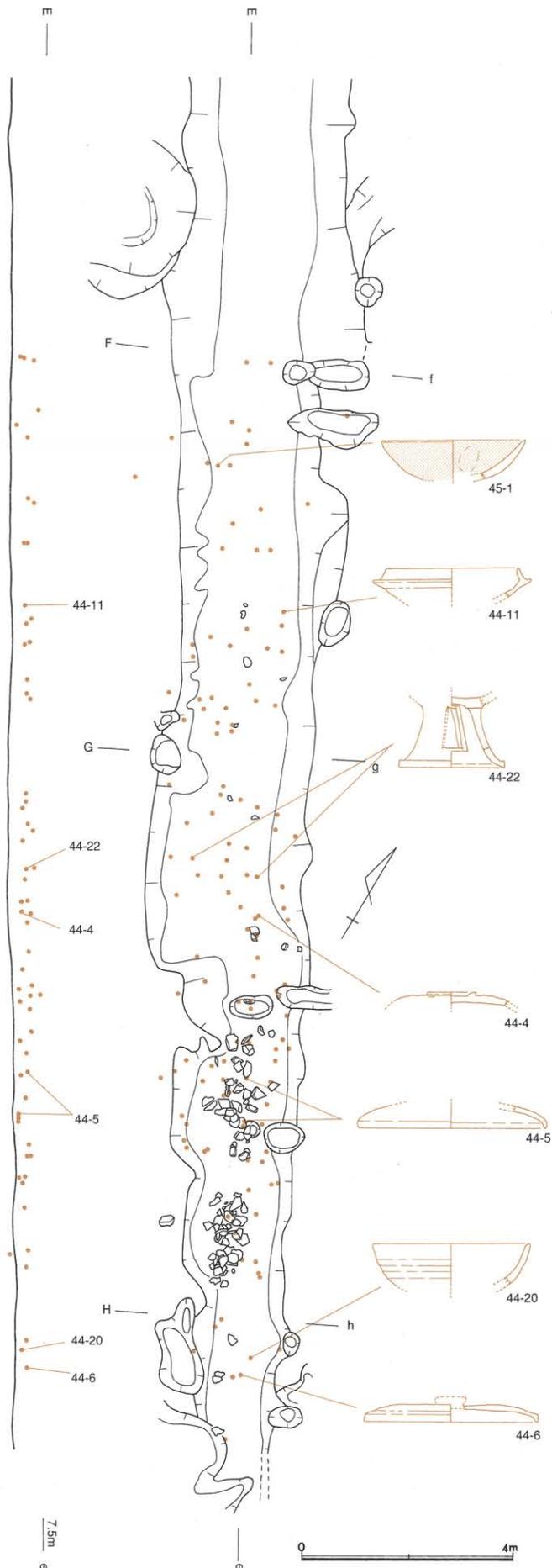
SD01 (第41図)

調査区西側を南東-北西方向に貫く溝で、北端部は壁にかかり、南端部は近世の遺構によって攪乱されている。規模は、現状で長さ54.6m、幅1.5~4.1m、深さ0.2~0.8mである。溝の横断面形は隅丸逆台形で、幅は、南側の検出面が低いため狭くな

っているが、本来は一定の幅であったと推測される。底面のレベルは概して南側が高く、北側ほど低くなる傾向が認められるが、南端と北端のレベル差はわずか20cm足らずである。溝は直線的で、H II区でその延長部分が確認されることが期待されたが検出されず、調査区間 8 mの間で方向転換するか、終わっていると考えられる。なお、この溝から20m東にはこれとほぼ平行な位置関係を持つSD06がある。詳細は後述するが、SD01に比して底面レベルは20cm以上浅い。また、出土遺物の絶対量も圧倒的に少なく、同時期の遺物もないことから関連する可能性はない。

出土状況 遺物は溝の全域から検出しているが、分布には北半分域と南半分域に濃淡が認められる。後述するが、遺物には時期幅があり、堆積土の層位とは必ずしも対応しない状況であった。また、上層で、遺物のほかに比較的扁平な礫も多数検出された。とりわけ南端付近で顕著である。礫は後世の遺構による攪乱で混入している可能性もあるが、周囲の柱穴などに根石を施すものはほとんど確認されていないので、溝の埋没に伴うものと考えられる。

堆積状況 溝の調査は、横断ベルトを6か所に設けて行った。堆積状況及び埋土は(第43図)一様でなく、また、近世を中心とした、後世の遺構による攪乱を受けている様子が観察された。攪乱されていないところでは、基本的にB-bやH-hにあるようなレンズ状の堆積が見られ、徐々に埋没していった様子が窺える。掘り返し等の人為的な痕跡は認められなかった。C-c



第42図 SD01実測図(2) (1:120)

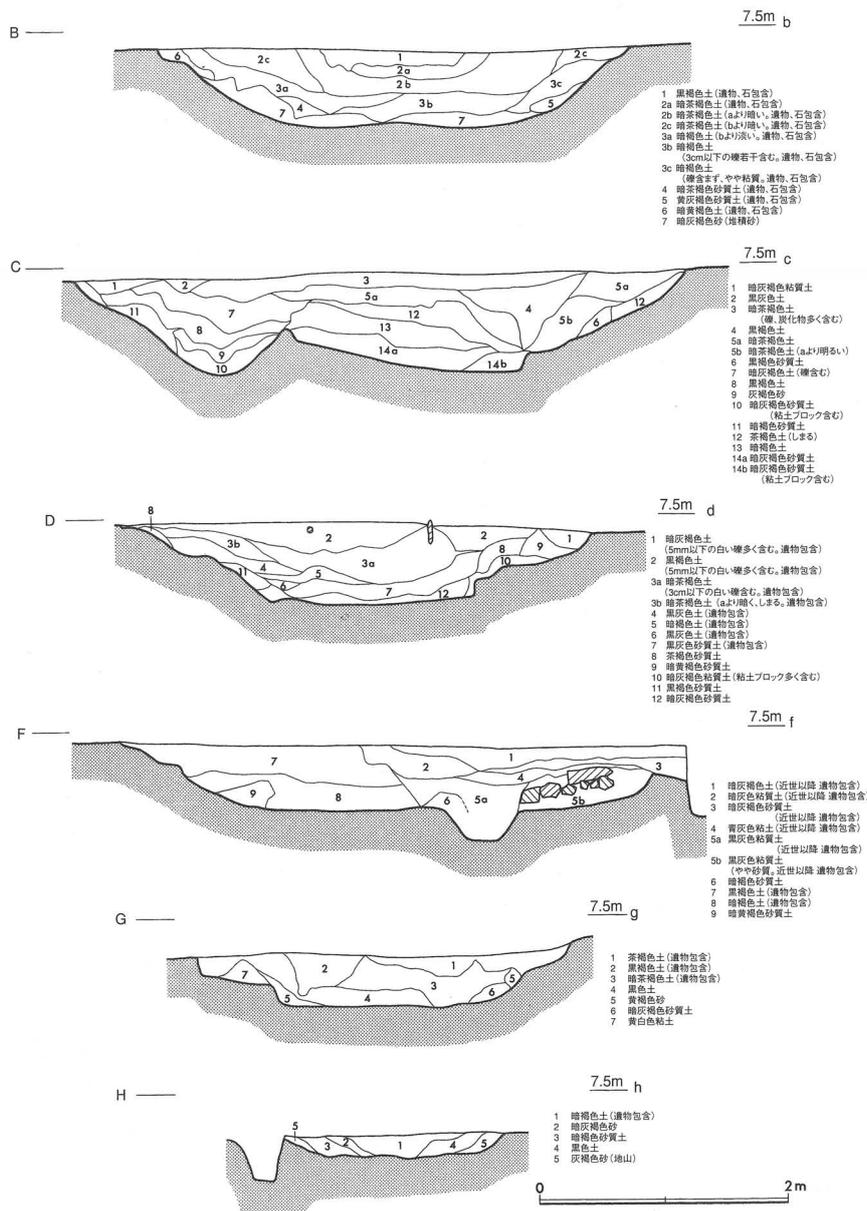
では、溝の堆積土12~14層がSK51（7~10層）に切られている。また、平面では確認できなかったが、4~6層も後世の遺構による攪乱である。F-fの1~6層は近世の柱穴等による攪乱層である。堆積土は暗褐色系の土または砂質土で、流水・滞水作用による砂・粘土層の形成はほとんど認められなかった。ただし、周囲の深い遺構には常時、排水ポンプを多数設置して調査していたため、湧水は著しくなかったが、ポンプを止めると溝の半ばまで水位が上がったことは注意すべき点である。

出土遺物（第44・45図） 遺物は上述したように溝の全域から出土している。

44-1~22は須恵器である。1~8は蓋である。1は天井部を欠くが、肩に稜線・沈線を持たないもので、2は口径は1と変わらないが、肩に沈線を巡らす。3は口縁部が内弯し、天井部は回転へら起こし後未調整である。4・5は口縁と天井部を欠損するが、輪状つまみでかえりのないタイプである。4は内面天井部が摩耗して滑らかで、皿に転用された可能性がある。5は灰白色の生焼けの資料

で、内面に墨痕様の黒色の付着物が認められる。6~8は擬宝珠つまみで怒り肩のタイプである。7も4と同様に天井部に使用痕が見られる。9~16はかえりのある坏身である。9~12はかえりが高く、13・14はかえりがやや低くなるが口径が大きいもの、15・16は口径が更に小さくなるものである。17・18は直線的で高台が取り付く。19は壺か鉢の類で、内面底部には静止などで、外面に回転へら削りが見られる。20~22は高坏で、21・22は2方透かしである。20は坏の可能性も考えられる。

時期は蓋の1・2が出雲5期、3が出雲6期に併行する。4・5は7世紀末~8世紀前葉頃であろう。7・8は8世紀末~9世紀前葉頃と考えられる。一方坏身は9~12が出雲4期、



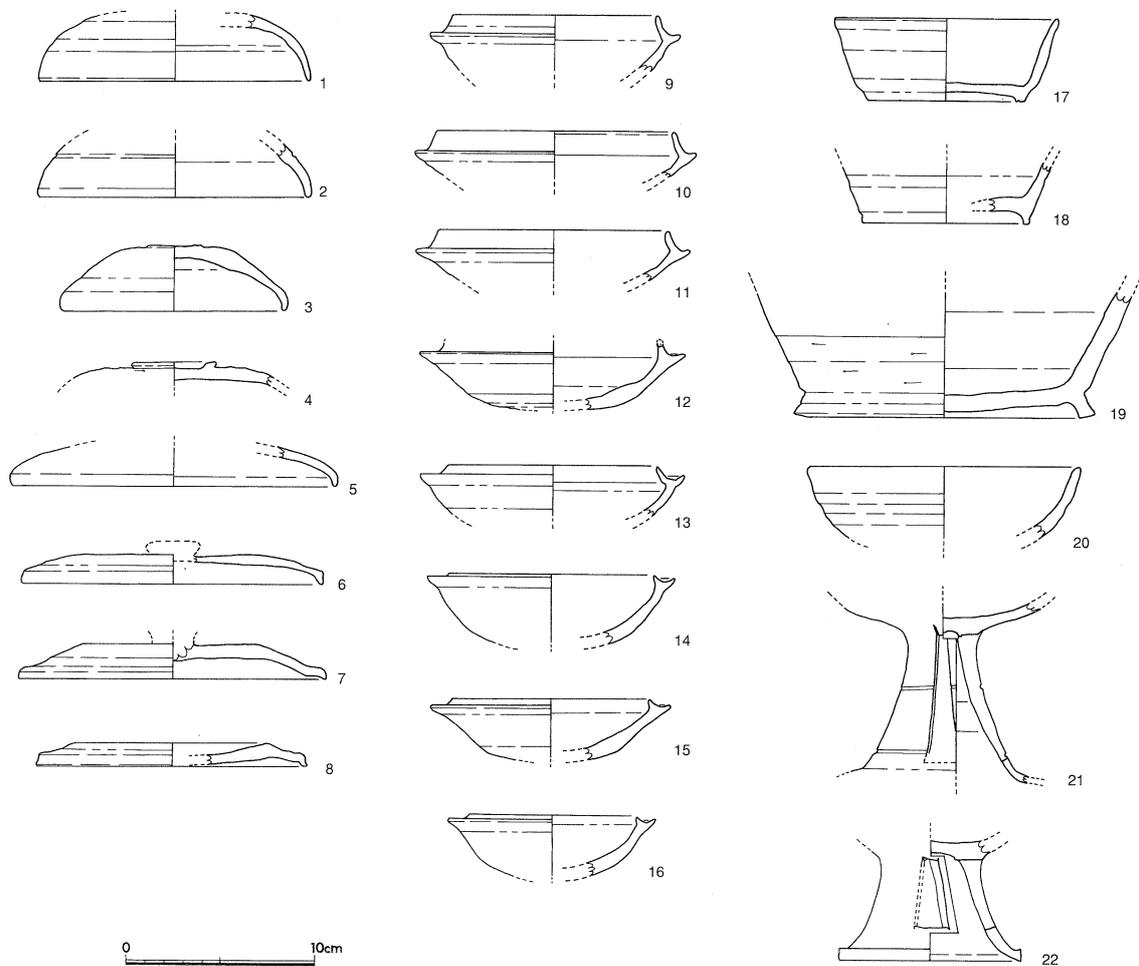
第43図 SD01土層断面図 (1:60)

13・14が5期、15・16が6期に相当する。17・18は7・8と同様の8世紀末～9世紀前葉頃であろう。

須恵器以外の遺物は第45図に示した。1～6は赤彩を施した土師器である。1は高坏か碗、2・3は高坏で、少なくとも古墳時代後期までは下ると考えられる。4～6は坏である。4は底部が手持ちへら削りで、口縁部内面に沈線状のアクセントを持つ。5は回転なでで仕上げ、やや内弯する。底部外面は不明瞭だが、へら削りか。6は底部外面が手持ちへら削りで、内面には静止なでを施す。口縁部は回転なでである。いずれも暗文は見られず、8世紀～9世紀初頭のものと考えられる。

7～10は煮炊き具で、甕・竈・支脚である。11は土師器甕、12は低脚坏である。13は石製紡錘車で鋸歯文が見られる。14は素焼きの七輪か焜炉の類である。近世以降の攪乱による混入であろう。

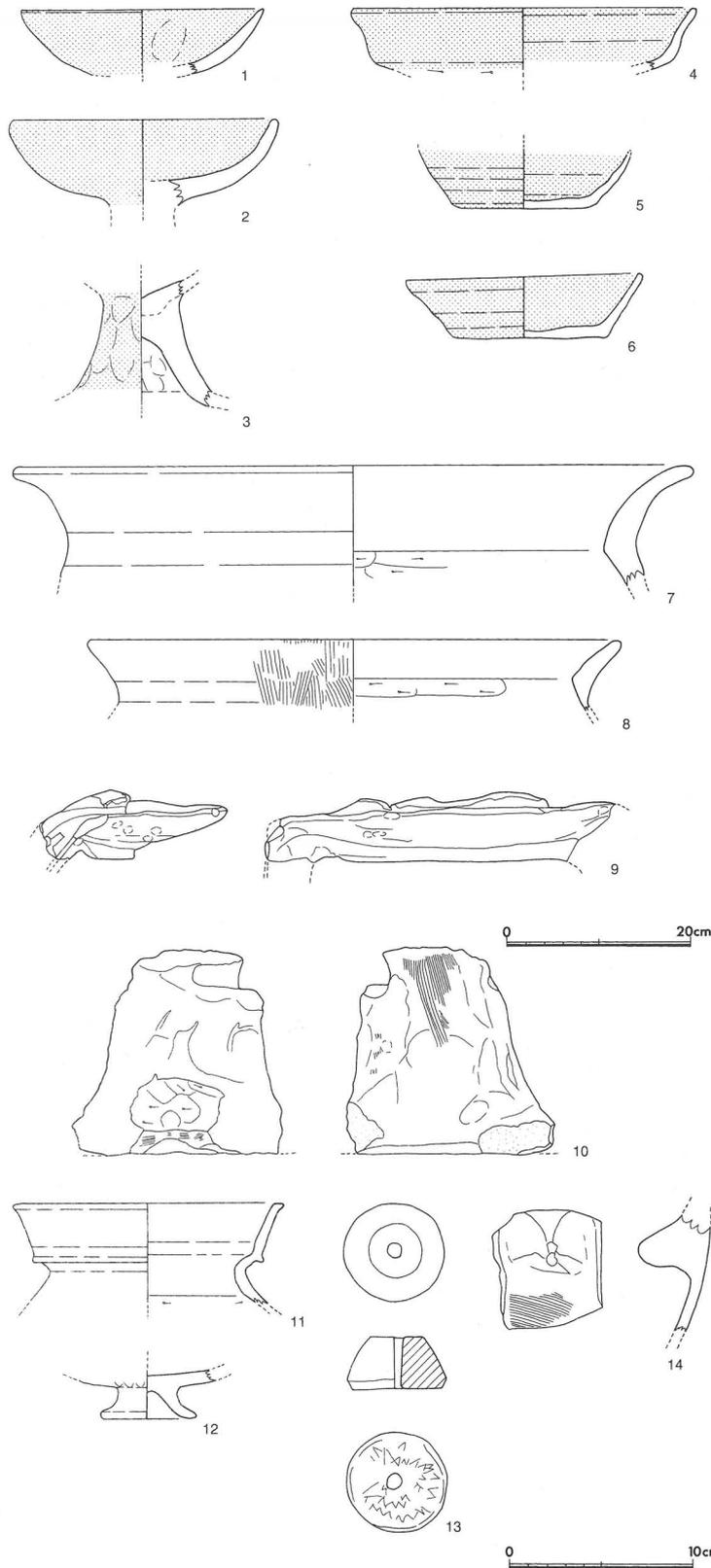
以上、おもな出土遺物について述べてきたが、遺構の埋没時期を示す可能性があるものは須恵器と赤彩の土師器の一群である。前述の通り堆積状況からは掘り返しの痕跡が認められなかったことから7世紀前葉～9世紀前葉までの長期にわたって使用したとは考えにくい。また、かえりを持つ坏蓋や、それに伴う坏も出土していないことを考えると、溝の埋没し始めるのは概ね8世紀代のことと考えられ、徐々に埋まっていたと推測される。



第44図 SD01出土遺物実測図(1)(1:4)

SD04・05 (第46図)

調査区中央から東にかけて位置する2条の溝である。溝は南西―北東方向に並行するかたちをとるが、互いに関連する状況は認められなかった。

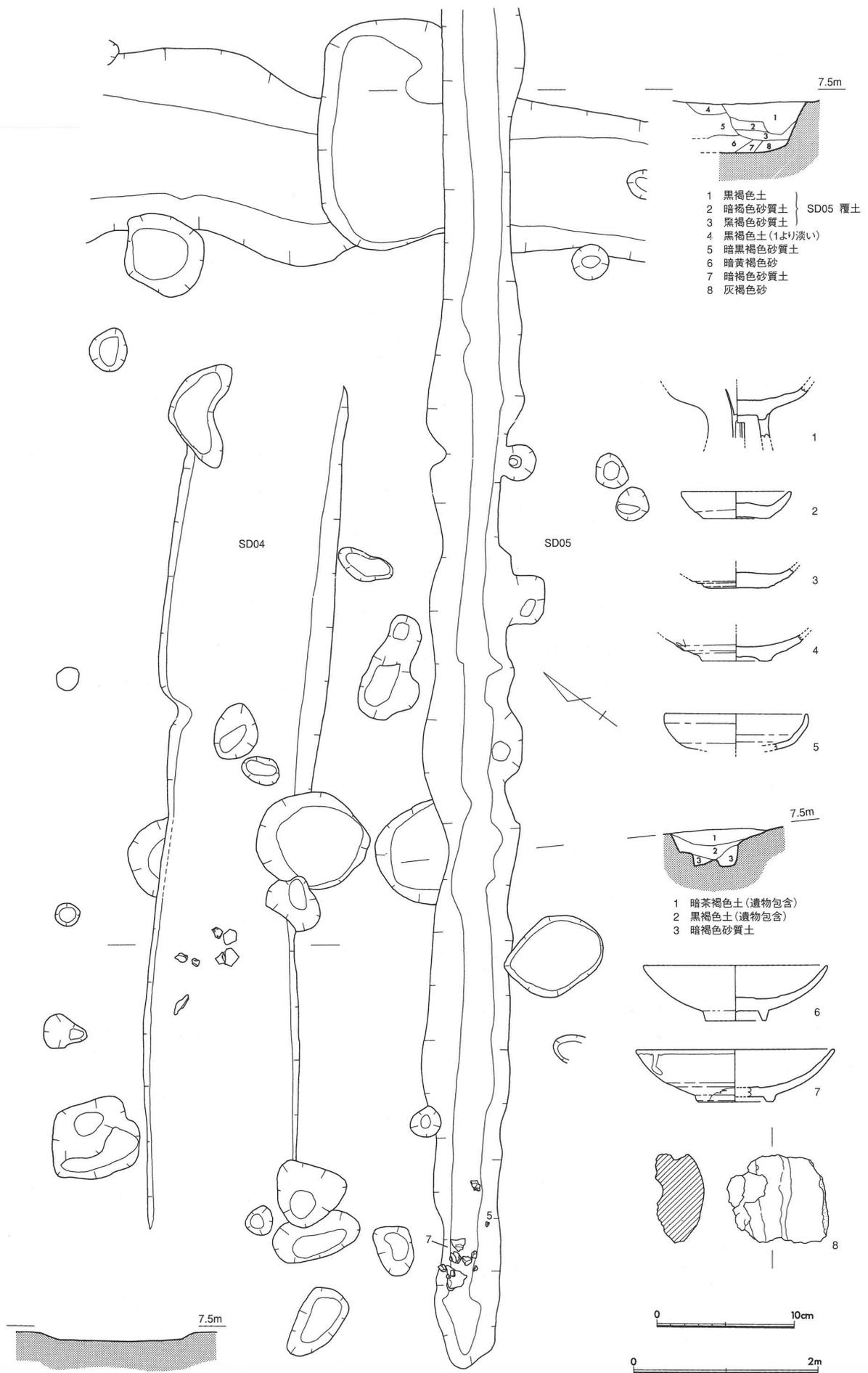


第45図 SD01出土遺物実測図(2) (1:4、9は1:8)

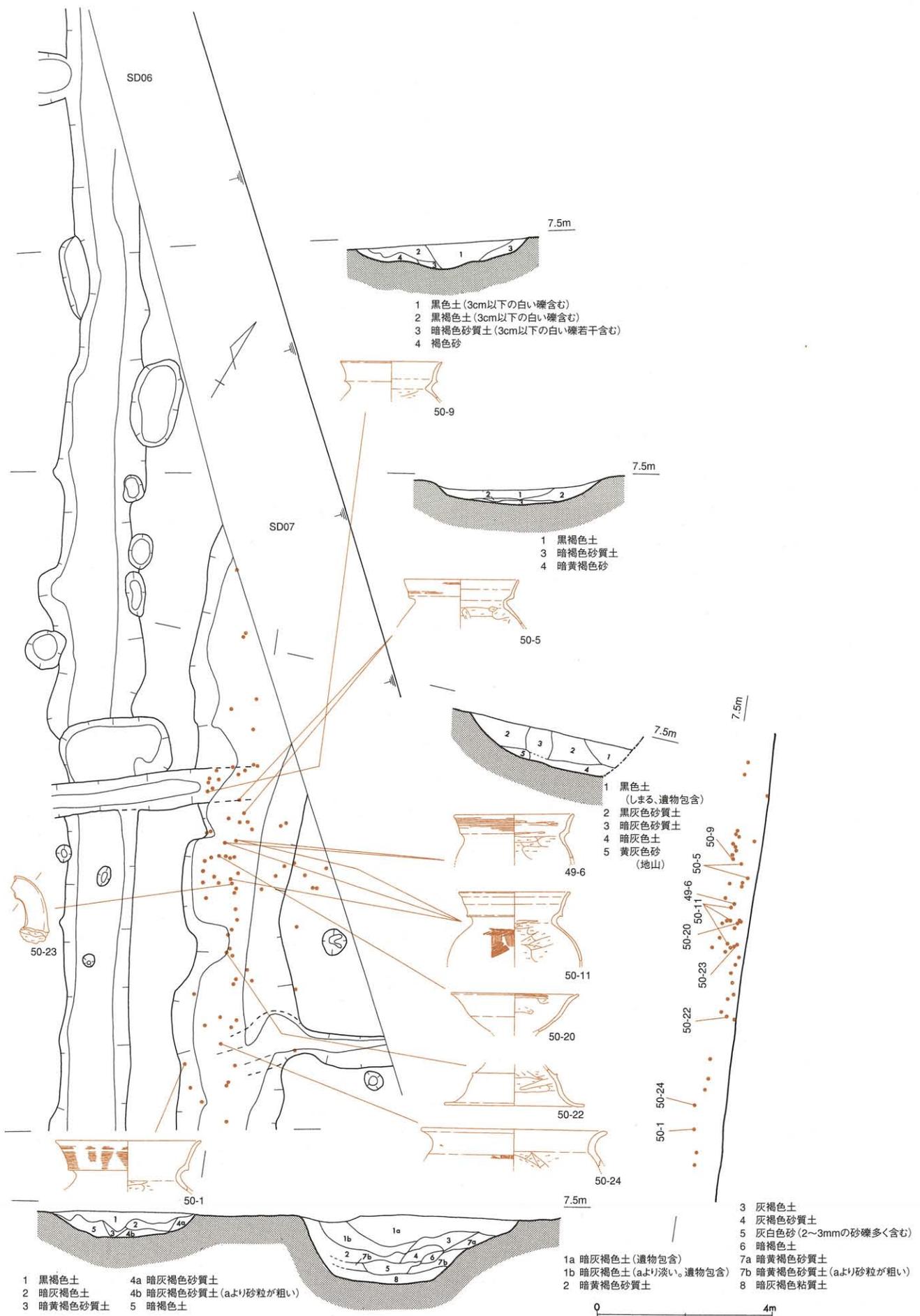
SD04 直線的に延びる溝で、規模は、現状で長さ9.6m、幅1.9mで、深さは10cmと極めて浅い。掘方の掘削は高い位置からであったと考えられ、本来の深さと長さを留めていない。図示していないが、埋土は黒褐色系の土砂で、遺物は須恵器大甕体部の破片が出土したにすぎない。

SD05 SD06・07及びSK14を切るかたちで検出した。東端部はSD07の埋土に紛れて検出できなかったが、調査区外へ直線的に延長していくと考えられる。掘方の規模は現状で、長さ15.4m、幅0.9mで、深さは最も深いところで0.6mを測る。横断面形は、基本的には逆台形を呈し、底面のレベルは西側が高く、東に行くほど低くなる傾向が認められた。埋土は黒褐色系で、上層から遺物を検出した。

出土遺物 1は2方透かしの須恵器高坏で、2・3は糸切りの土師器である。4～7は肥前系陶磁器である。4は胎土目唐津皿で16末～17世紀初頭、5は16世紀末～17世紀前半の陶器皿、6は17世紀末～18世紀前半の磁器皿で、蛇の目釉剥ぎを施す。7は内野山窯の17世紀後半の陶器皿で銅緑釉を蛇の目に剥ぎ取る。8は羽口である。



第46図 SD04・05、SD05出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)



第47図 SD06・07実測図(1) (1:120、土層図は1:60)

溝は、出土遺物から18世紀前半には埋没したと考えられる。

SD06・07 (第47・48図)

調査区東側を南東―北西方向に貫く2条の溝で、北端部は壁にかかり、南端部は近世の遺構によって攪乱されている。両者は南側で交差するが、攪乱坑と近世の遺構によってその前後関係を平面的には確認できなかった。

SD06 直線的に延びる溝で、規模は現状で長さ40m、幅1.8m、深さ0.3mである。掘削面は本来もう少し高かったと推測される。溝の横断面形は隅丸逆台形である。底面のレベルは、各地点で変化はあまりない。埋土は黒褐色系で、遺物として須恵器と土師器の小片が出土しているが、実測するに足りないものである。前述したSD01と平行な位置関係にある。検出レベルは同じであるが、幅がSD01に比して狭く、底面も浅い。関連性が認められる遺物も出土していないこと等から、両者が関連するとは考えにくい。溝の時期は、後述するSD08に切られていたことから、15世紀代を下限とする。

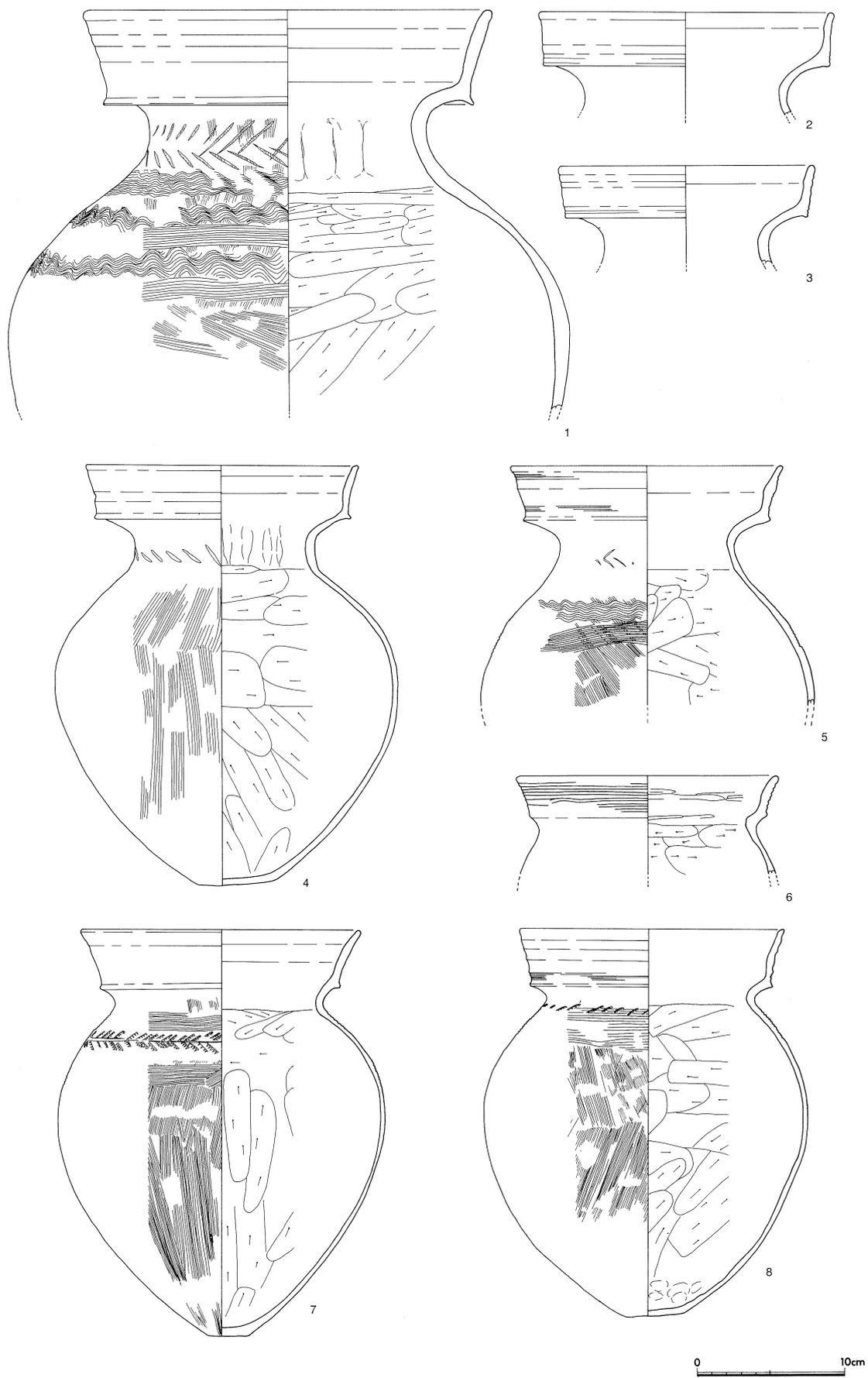
SD07 わずかに蛇行する弥生時代の溝で、現状で長さ39mである。遺構は、地山が砂礫層のため崩壊しやすく、必ずしも掘削時のものではない。幅及び深さは計測地点でかなり異なるが、幅は上端で1.5～3.0m、深さ0.4～0.8mである。横断面は隅丸逆台形で、底面に至るまでに湧水が認められた。底面のレベルは北が高く、南側が低くなっていく傾向があり、南端と北端底面のレベル差は30cm以上である。溝の南端付近は先述の通り近世遺構の攪乱により掘方の検出面が相対的に低くなっていた。

堆積状況 3箇所横断ベルトを設けて観察したが、うち最も南側のもの(SD06A-aラインの延長部分)は崩壊によって図示することができない。

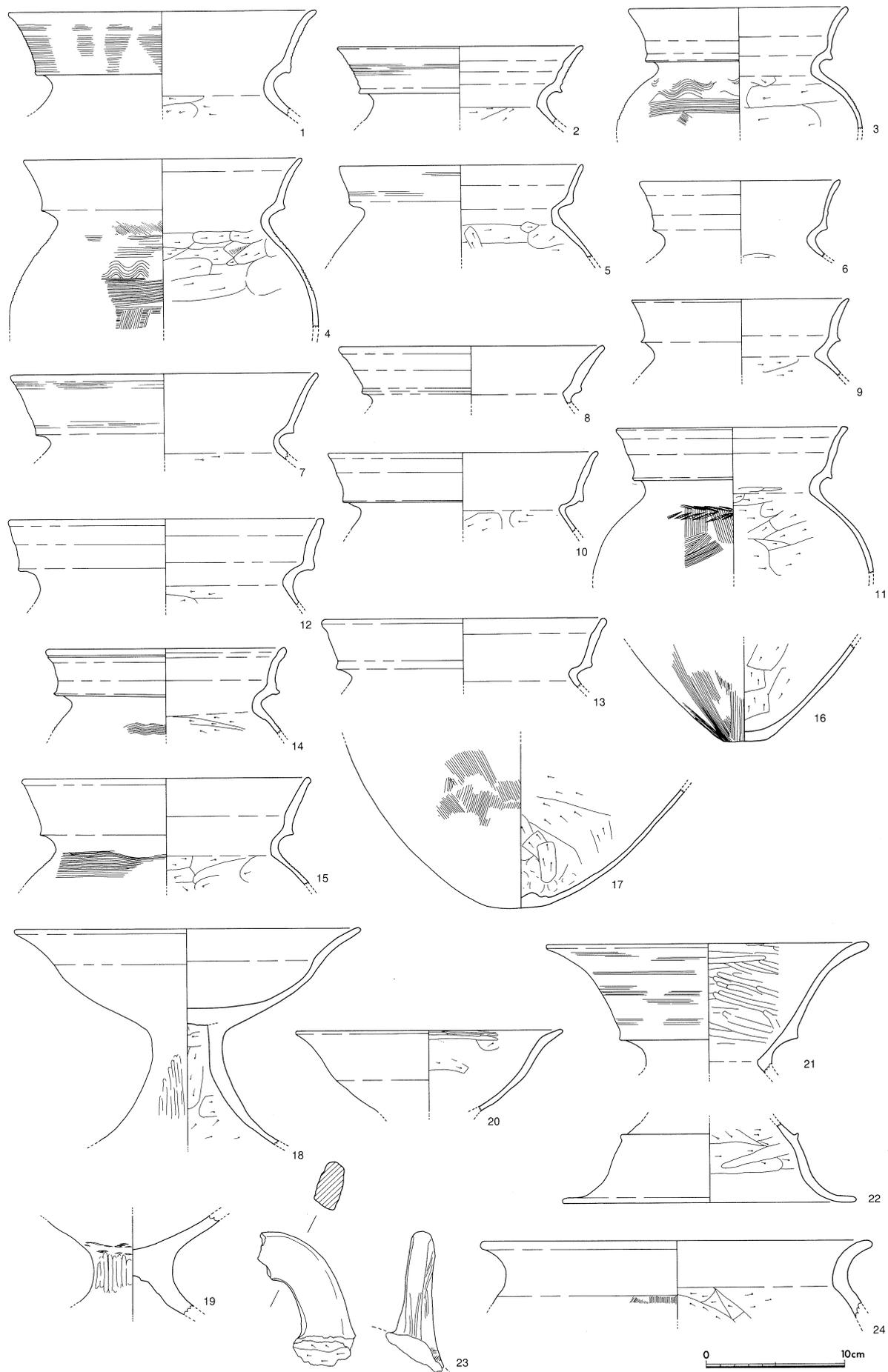
第47図の南端の横断面で、良好に堆積状況を観察できる。埋土は黒褐色土が最上面に堆積するが、基本的には灰褐色系の砂質土が堆積し、掘り返しの痕跡も見受けられる。7b・8層は早い時期の堆積層で、8層は粘(質)土である。溝が掘削された当初は水が滞留した状態であったと推測される。5層はこれらを切る砂層で、下面が掘り返し面と考えられ、これも水成堆積の痕跡をとどめる。その後3・4層と1b・2層の堆積を促す2回の掘削があったと想定されるが、この段階では水成堆積が認められず、ほとんど「壕」の状態であったと考えられる。1a層下面は最終的な掘り返しとも見られるが、積極的な根拠を欠くため、1b層に連続的に堆積したものと認識した。

出土状況 遺物は、小片も含めると上述の1a・b層が中心で、これより下層からの出土量は相対的に少なかった。同一個体となる破片は、概して近い位置関係を保っていたことから、流水の影響は受けなかったと考えられる。平面分布は、大局的には溝全域に見られるが、複数の個体がまとまって出土する場所と、希薄な場所が見られる点で、古志本郷遺跡A区SD01、C区SD16・17⁽¹⁰⁾で指摘された状況と同様である。ただし、特定器種の偏在性は認められない。これは、遺物のうち、甕以外の土器が少ないという器種構成上の問題と考えられる。

出土遺物 (第49・50図) 遺物は弥生土器がほとんどで、明らかに混入と見られる中・近世の遺物は図示していない。1～5は壺である。1は大形で、頸部に刷毛状原体による無軸羽状文を、頸部付け根から肩にかけて平行線文2段、波長の短い波状文3段を施す。口縁部はやや外傾し、端部を丸くおさめる。2・3は直立する口縁部の資料で、拡張部に浅い擬凹線文が部分的に認められる。



第49图 SD07出土遺物実測図(1)(1:4)



第50図 SD07出土遺物実測図(2)(1:4)

下端突出部は垂下気味である。4はほぼ完形で、頸部に板状原体小口による浅い列点文が一周する。口縁は直立気味で、端部は丸味を持ちながら外傾する。5は肩部に波長の短い波状文と平行線文を施し、頸部に爪先状の羽状文が見られる。口縁はやや外傾し、拡張部に貝殻か刷毛状原体による擬凹線文のなで残しが見られる。草田5期でも古い特徴を残すものも見られ、4期まで遡る可能性もある。

6～8は甕である。7は肩に刷毛状原体による有軸羽状文、その上下段に平行線文を施す。口縁は薄く引き延ばす。平底だが自立はしない。8は肩に刷毛状原体の平行線文のち貝殻復縁による施文が見られる。口縁は薄く引き延ばし、接合部に擬凹線文の痕跡が残る。第50図の1～17も甕である。1・2は薄く引き延ばした口縁にわずかに擬凹線文が残るもので、3～7は擬凹線文が認められない。8～10は口縁がやや厚く先細りになるもの、11は端部にアクセントが付くものである。12～15は口縁が厚手で、端部の鋭さに欠けるものである。

16・17は底部資料である。16は明瞭な面を持つもので、底面から放射状に刷毛目を施し、内面はへら削りである。17は刷毛目が底部まで達していないもので、内面に指頭圧痕が顕著である。丸底を指向しつつも不明瞭な平底が残る。

18は高坏、21・22は鼓形器台である。22は脚部が胴膨れし、あまり見ない例である。20はこれに類似するもので、削りの後磨きを施す。器台の受け部ないしは高坏であろうか。19は台付の壺か鉢であろう。23は注口土器の把手である。24は古墳時代後期の土師器甕で、混入品である。

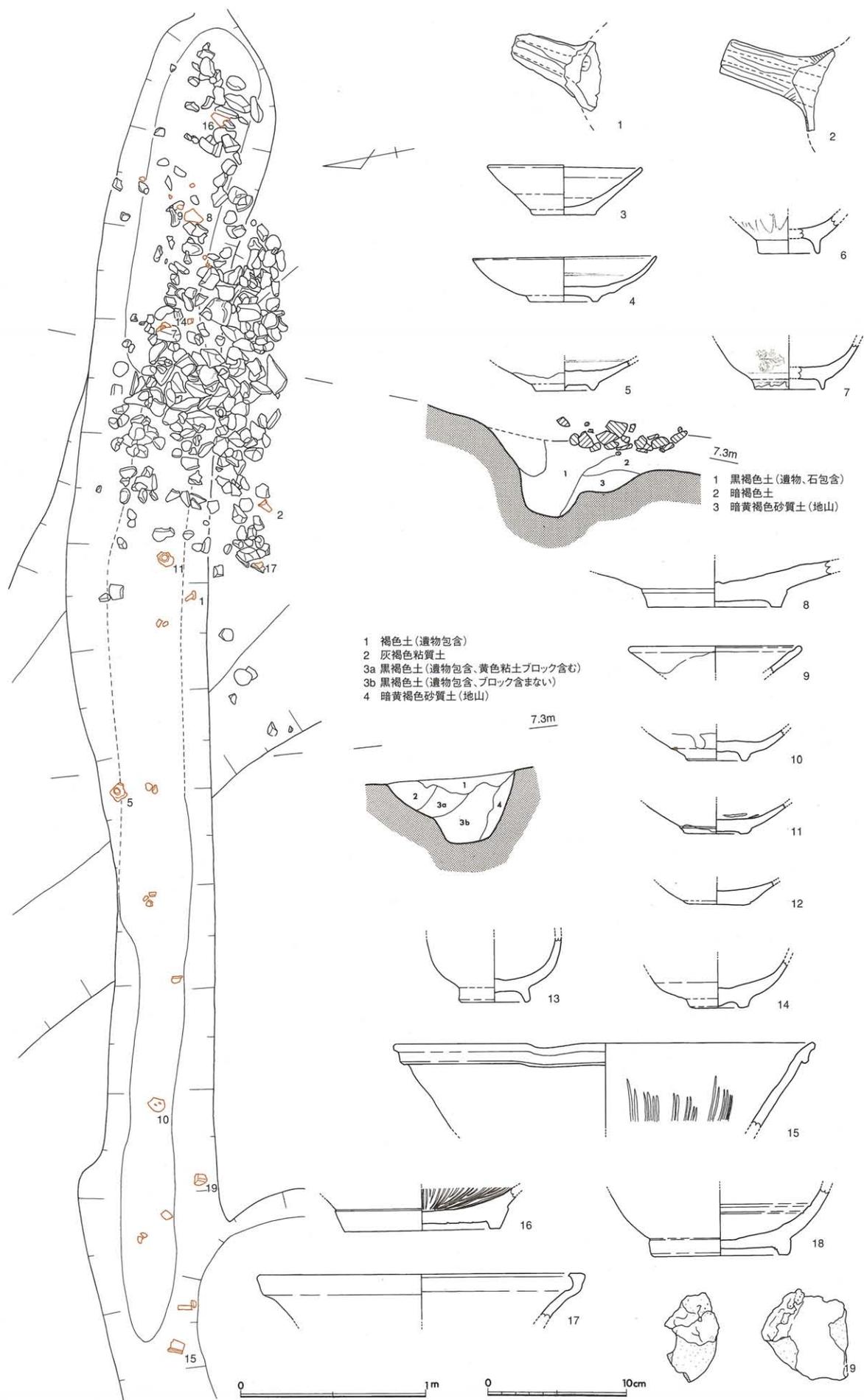
以上、出土遺物について見てきたが、これらは概ね草田4～5期の資料といえ、図示したものでは49-6が2～3期まで遡るもので、小片ではあるがほかにも後期前葉まで遡る遺物も出土している。ただし、これらについては出土量や出土位置、個体残存率から遺構に直接伴う可能性は少ないと考えられる。

以上のことから、SD07は弥生時代終末期に埋没したものと考えられる。掘削時期は明らかでないが、先述の古い土器も出土していることから後期～終末期のある段階と推測される。

SD08 (第51図)

SD07の中程で交差する溝で、SD06・07を切る。現状で長さ8m、幅0.8m、深さ0.3～0.45mである。横断面は逆台形だが、部分的に2段掘状になり、掘り返しの痕跡を残す。底面のレベルは西側が高く、東が低い傾向がある。溝の埋土は黒褐色系である。溝の東側で3～20cm大の礫の集石を検出した。集石が認められるのは検出面に留まり、溝の埋土には含まれていないことから、溝が完全に埋まった状態で形成されたと考えられる。遺物は集石の埋土に含まれた状態で出土している。後述するが、集石のすぐ北側には土師器を38個体納めた鉄鍋(第63図SX01)が検出されており、地鎮等の祭祀が行われていたことも想定されることから、このような局所的な分布を示す集石も溝に直接関わるものでなく、SX01の祭祀に伴う可能性が高い。

出土遺物 1～3以外は集石検出レベルで出土したものである。1・2は注口土器で、3は糸切り底の土師器である。4～7は肥前系の磁器である。4・5は17世紀後半の染付皿で見込みに蛇の目釉剥ぎ、豊付には目砂が付着する。6は網目文の染付碗で、1650～1660年代に生産されたものである。7は桐のコンニャク印判が見られる18世紀代の碗である。8～18は陶器である。8は肥前系の皿で、17世紀前半のものか。9は溝縁皿、11は砂目の残る皿で、いずれも1600～1630



第51図 SD08遺物出土状況、出土遺物実測図 (1:30、遺物1:4)

年代の古唐津である。10は1590～1610年代の胎土目唐津皿、12は17～18世紀代の灯明皿か。13は京焼風の碗で19世紀後半、14は17世紀前半の肥前系碗である。15・16は在地系、17は17世紀前半の肥前系のすり鉢である。18は在地系の壺の類であろう。19は羽口である。

遺物の時期はまちまちだが、15世紀代と考えられる3以外はすべて集石以降のものと考えられる。集石下面から出土した遺物はほかに弥生土器・土師器・須恵器等の小片だけで、溝は遅くとも15世紀代には埋没したものと考えられる。

SD09 (第52図)

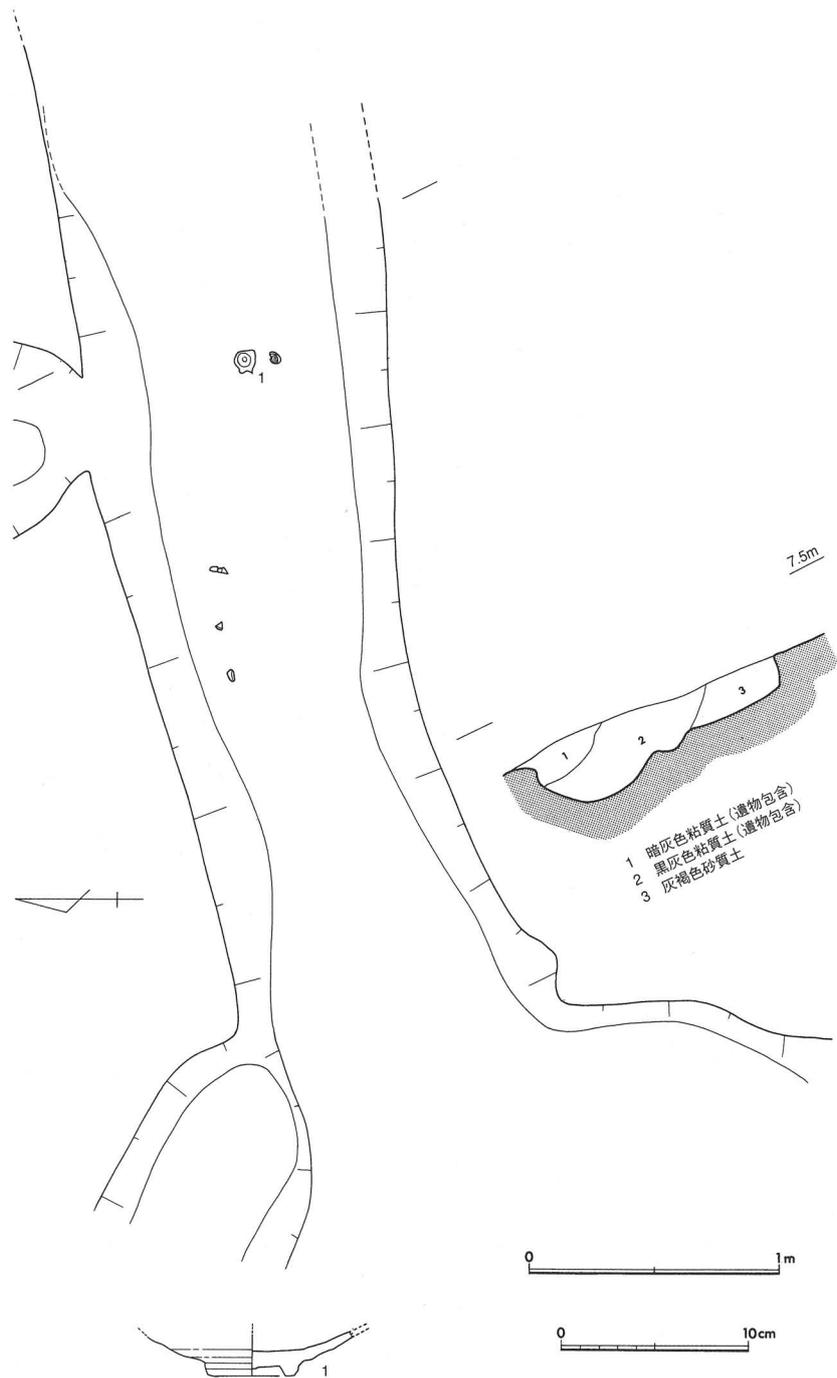
SD08の東に隣接する溝で、SD08とは掘方の方向と深さが異なるため、別の溝と判断した。SD08との前後関係は不明である。

東西端部がSD07・15と切り合い明確ではないが、掘方の規模は、現状で長さ4.3m、幅1～1.3m深さ0.13mである。横断面は逆台形で、明瞭な底面を有す。埋土は、基本的には黒灰色土が自然堆積してるが、断面図2層下面に見られるような掘り込みの痕跡が確認された。掘り込みは面的に連続するものではなく、後世の攪乱と考えられる。

遺物として、内野山窯の17世紀後半の陶器皿が出土しているほか、図示できなかったが糸切り土師器の小片が出土している。

SD10・11・14(第53図)

調査区東壁中央部及びSE03の南側に位置する3条の溝で、SD10・14はSD11に連続するとも



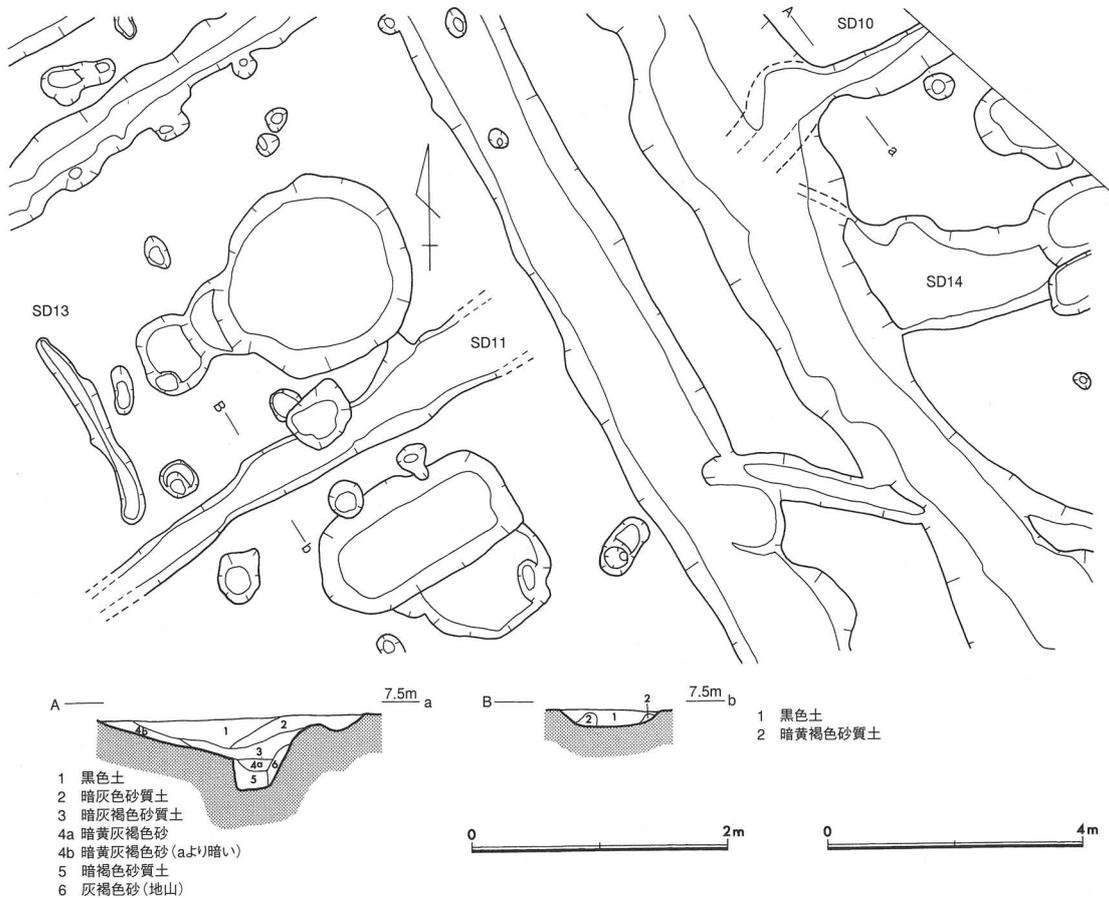
第52図 SD09、出土遺物実測図 (1:30、遺物1:4)

考えられるが、現状ではその根拠を欠く。

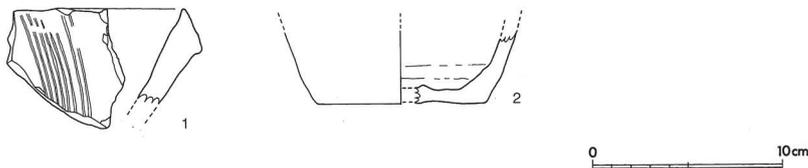
SD10 SD07を切る溝で、西側は検出できなかった。規模は長さ3.7m、幅0.7m、深さ0.4mで、SD07と交差する部分でわずかに蛇行する。1～4層は溝に伴う堆積土で、5・6層は先行する柱穴に伴う。遺物（第54図）は1の備前IV期のすり鉢と陶器の壺がある。15世紀を遡ることはないと考えられる。

SD11 SD10に連続するように南西－北東方向に掘られた溝で、規模は長さ7m、幅0.6～1.2m、深さ0.15mである。黒色土が堆積し、近世以降の陶磁器小片が出土している。

SD14 規模は、長さ3.2m、幅1.5mを測る。出土遺物はなく、また、SD07との切り合い関係も判然としなかったことから、時期は不明である。



第53図 SD10・11・13・14実測図（1：120、土層図は1：60）



第54図 SD10出土遺物実測図（1：4）

SD15 (第55図)

調査区南東隅に位置する弥生時代の溝で、南端部は後世の遺構によって攪乱され、掘方は不明瞭になるが、現状で長さ18mである。幅、深さは計測地点によって異なり、上端で幅2.2~3.1m、深さ0.6~0.85mである。横断面形は凸レンズ状を呈し明瞭な底面をつくらない。底部付近では湧水が著しい。概して底部のレベルは北側が高い傾向にあるが、ほとんど変化は認められなかった。

堆積状況 南側での検出面がかなり低かったことと、掘方が不明瞭であったため、土層観察は遺存状態の良好な北側で行った(B-bライン)。溝の最上面には黒色土が認められるが、それ以下は基本的には灰褐色系の砂質土が堆積する。13層は近世以降の遺物包含層で、SD09の埋土である。

6~10層は早い時期の堆積層と考えられるが、9層・8b層に切られた痕跡が認められたことから、6・7層の堆積の直前に一度掘り返しがされた可能性が考えられる。6層は土混じりの砂礫層で、粒度の細かい7層の次に堆積していることから、ある程度の流量に伴う水成堆積と見ることもできよう。5層下面、4層下面でもそれぞれ掘り返しが行われたと想定されるが、この段階ではラミネーションは見られず、「塚」の状態であったと考えられる。次いで3層下面において最終と考えられる掘削が行われたと考えられる。3層の堆積後に1層または2層の下面での掘り返しも想定されるが、有機質の腐食物が見られるなど土質に類似点も認められたことから1~3層までは連続的な堆積と考える。1・2層は特に有機物の腐食によると見られる黒色化が顕著で、長期間にわたって手の加わらない状態であったと考えられる。なお、小片も含めると遺物のほとんどは1層からの出土であった。

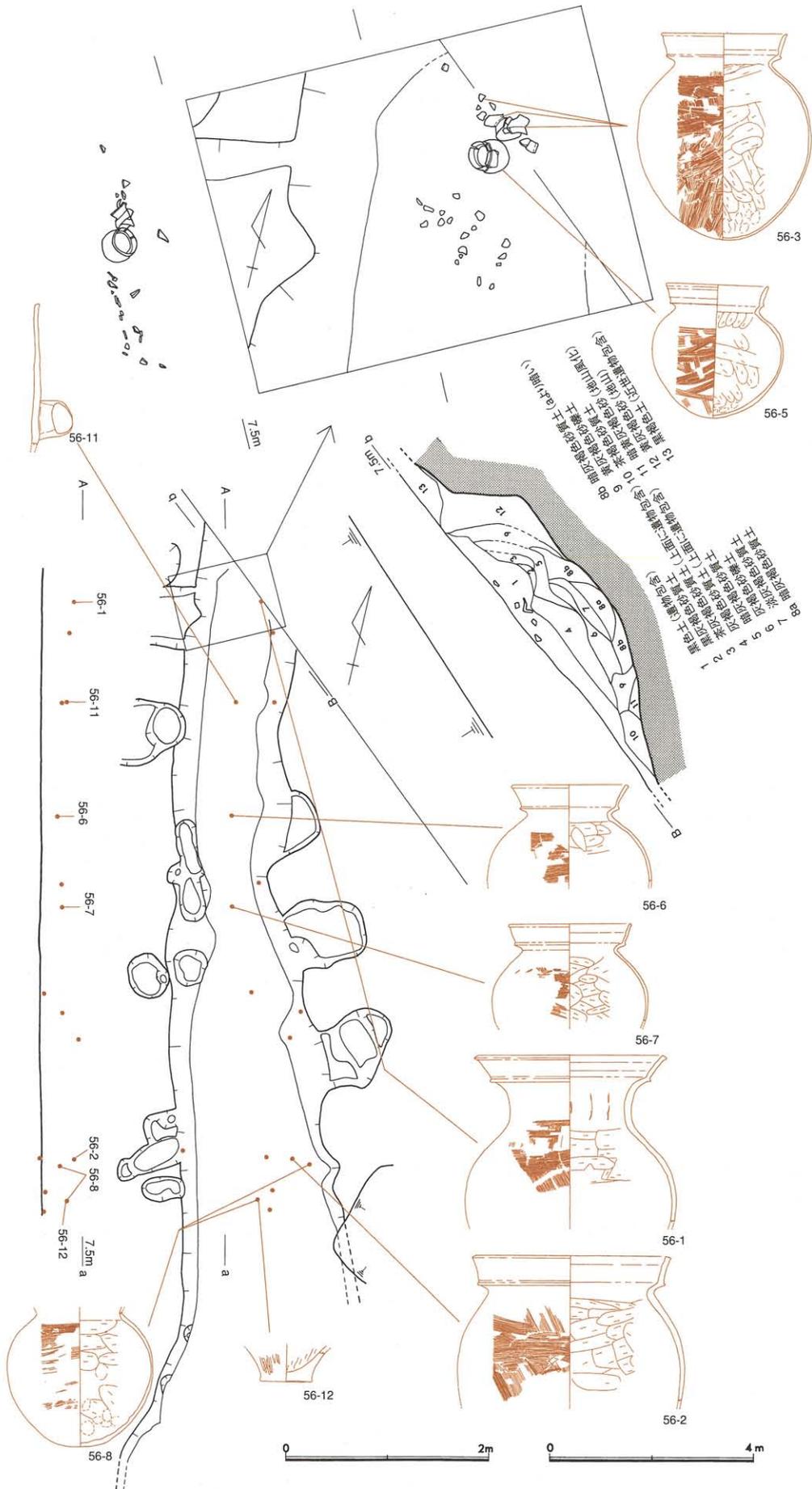
出土状況 調査範囲も短いせいも、遺物の出土量、個体数はSD07に比して相対的に少ない。小片も含めると上述の1層からの出土が中心で、これより下層からの出土量は少なかった。南側では低いレベルからの出土も多く確認されたが、これは近世以降の攪乱によるものと考えられる。

平面分布については、小片になりながらも、各々の個体はまとまった位置で出土する傾向が強く、同一個体の破片があちこちに散在する現象は認められなかった。これは流水などによって遺物の位置が大きく動かなかったことに起因すると考えられるので、複数の個体が大量にまとまりを持って出土したSD07等とはやや異なった状況といえる。

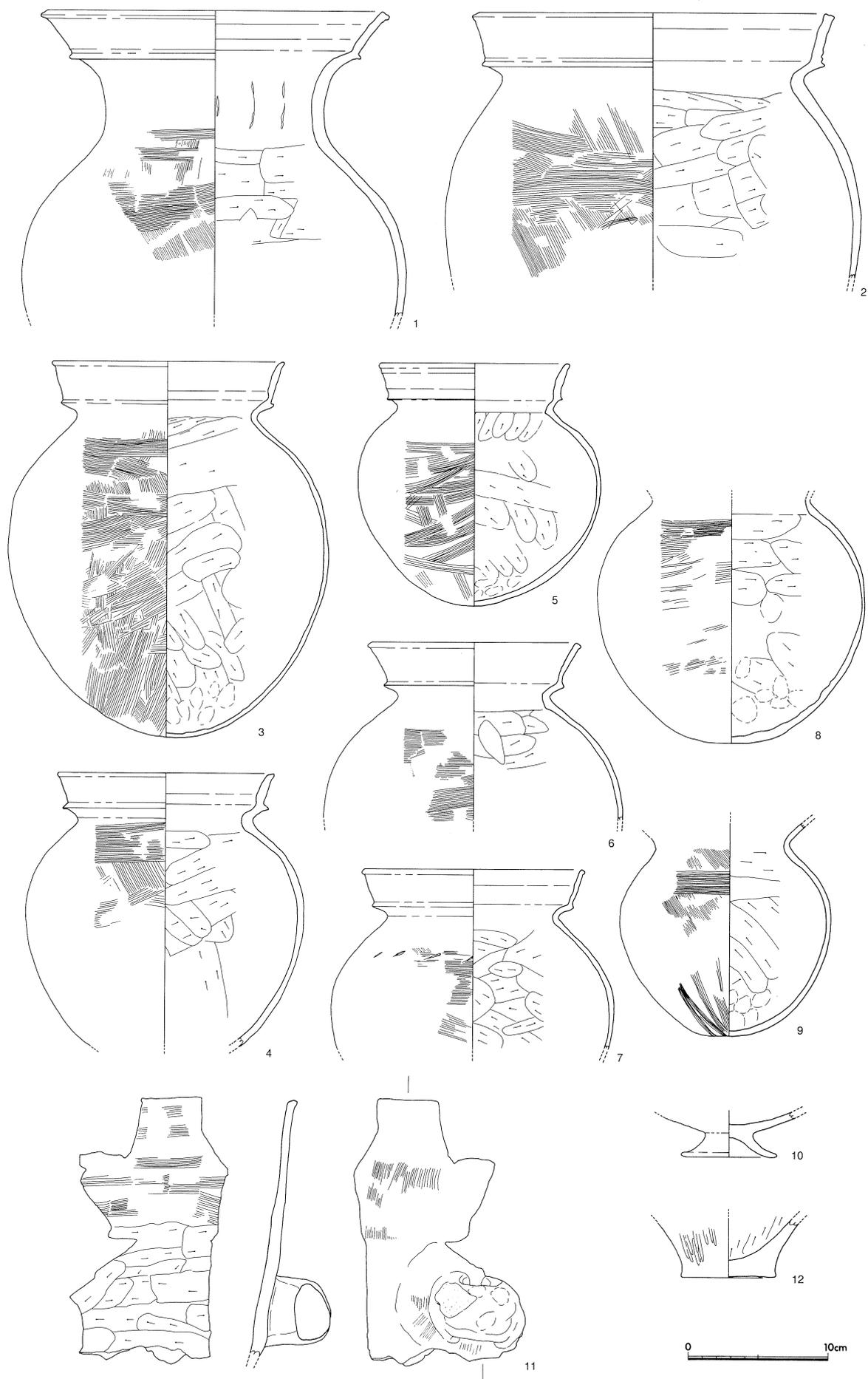
出土遺物のうち、甕以外の土器が少ないという器種構成の特徴については、SD07の状況と同様である。

出土遺物 (第56図) 1は壺である。頸部の付け根以下は刷毛目のち横刷毛を施す。頸部内面には絞り目を指なでした痕跡が認められる。口縁部は大きく外傾し、端部は外側に肥厚し沈線状の窪みを持つ。頸部の径は大きいタイプである。

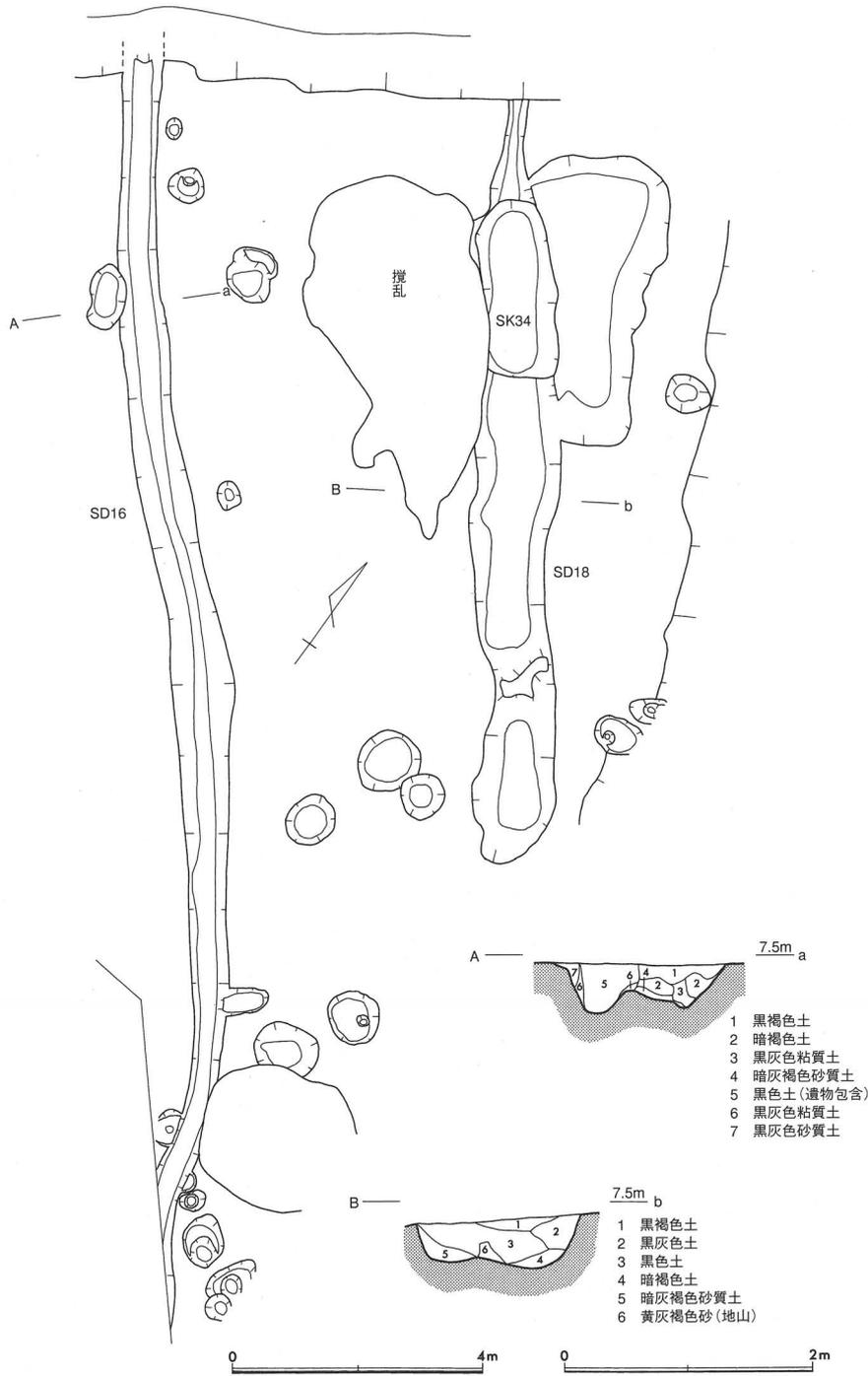
2~9は甕である。2は大形の甕で、口縁端部がわずかに肥厚し沈線状の窪みを持つ。3は丸底で内面に指頭圧痕が顕著である。口縁端部の内側には外傾面をつくり、外側にアクセントを付ける。4の口縁部も同様の特徴を持つが、立ち上がりが短くやや厚手である。5は丸底で、口縁部は短く立ち上がり、端部外側に変化を持たせて丸くおさめるものである。6・7は口縁部が強く外傾し、端部は外側に肥厚して丸味を持つ。7は肩部に板状工具の小口による列点文が施される。8・9は平底の痕跡を残すもので、口縁部を欠く資料である。体部は球形化して底部内面には指頭圧痕が著しい。9は単純口縁と見られる。



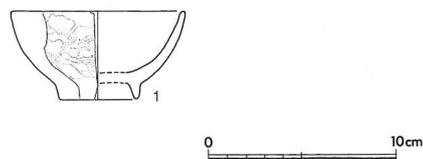
第55图 SD15实测图 (1:120、土层图は1:60、拡大图は1:30)



第56図 SD15出土遺物実測図 (1 : 4)



第57図 SD16・18実測図 (1:120、土層図は1:60)



第58図 SD16出土遺物実測図 (1:4)

10は低脚坏、11は甑形土器、12は弥生時代中期後半の甕か壺であろう。

出土遺物のうち、甕の口縁形態には典型的な小谷式は見られないが、底部には丸底を指向する傾向が認められる。以上の特徴からこれらは概ね草田6期に併行するものと考えられ、溝が最終的に埋没するのは弥生時代最終末～古墳時代初頭頃と考えられる。

SD16・18 (第57図)

調査区南西部に位置する2条の溝である。いずれも南東-北西の向きをとり並行する。

SD16 規模は現状で、長さ20m、幅0.8~0.95m、深さ0.4mを測る。横断面は逆台形で、埋土は黒褐色系の土砂が堆積する。

出土遺物は近代以降の磁器碗が出土している(第58図)。瀬戸産と考えられ、花の図柄の印刷が見られる。

SD18 規模は、現状で長さ12.6m、幅0.36~1.32m、深さ0.30m前後を測る。横断面隅丸逆台形で、溝

内には黒褐色系の土砂が堆積していた。

遺物は出土していないがS K 3 4に切られていることから、15世紀以前の溝と考えられる。

SD17・19 (第59図) 調査区の北西壁に沿うように検出した2条の大溝である。溝は互いに途切れて、幅6m程の陸橋をつくり、そこを意図したようにSD01が貫くかたちとなっている。

2条の溝は直線的に調査区外へ続いていくと推定され、その軸はN-58°-Eにある。また、後述するが規模・形態・出土遺物ともに類似することから、溝は陸橋を有す一対のものと考えた方が自然であろう。

SD17の規模は、長さ14.7m、上端幅4.2m、下端幅2.25~2.55m、深さ0.9mである。横断面形は概して逆台形で、明瞭な底面をつくり、底面のレベルは6.4mでほとんど変化は認められない。

SD18の規模は、長さ17.3m、上端幅3.45~3.9m、下端幅1.8~2.6m、深さ0.7m前後である。横断面逆台形で、底面のレベルは6.5mと、SD17とほぼ同規格であることが分かる。

堆積状況 (第60図) SD19で2カ所(A-a、B-B)、17で1カ所(C-c)に横断ベルトを設けて土層の観察を行った。

なお、調査の過程で、溝を半分以上掘り下げたところ湧水が激しくなり、完掘時には、溝の下端から相当量の砂が寄ってくる状況であったことから、当時もかなりの湧水があったと考えられる。

A-aの5~11層は砂層と砂質土が互層状に堆積している部分である。先述の通り、溝の底面は傾斜が認められないことや、溝が途切れている状況を考えると調査区外で底面レベルに変化がない限り、現状では流水があったとは考えにくいことから、これらは流れ込みや湧水作用に起因すると考えられる。3・4層は遺物を多く包含する層で、これらが堆積する際にはほとんど湧水はなかったものと考えられる。

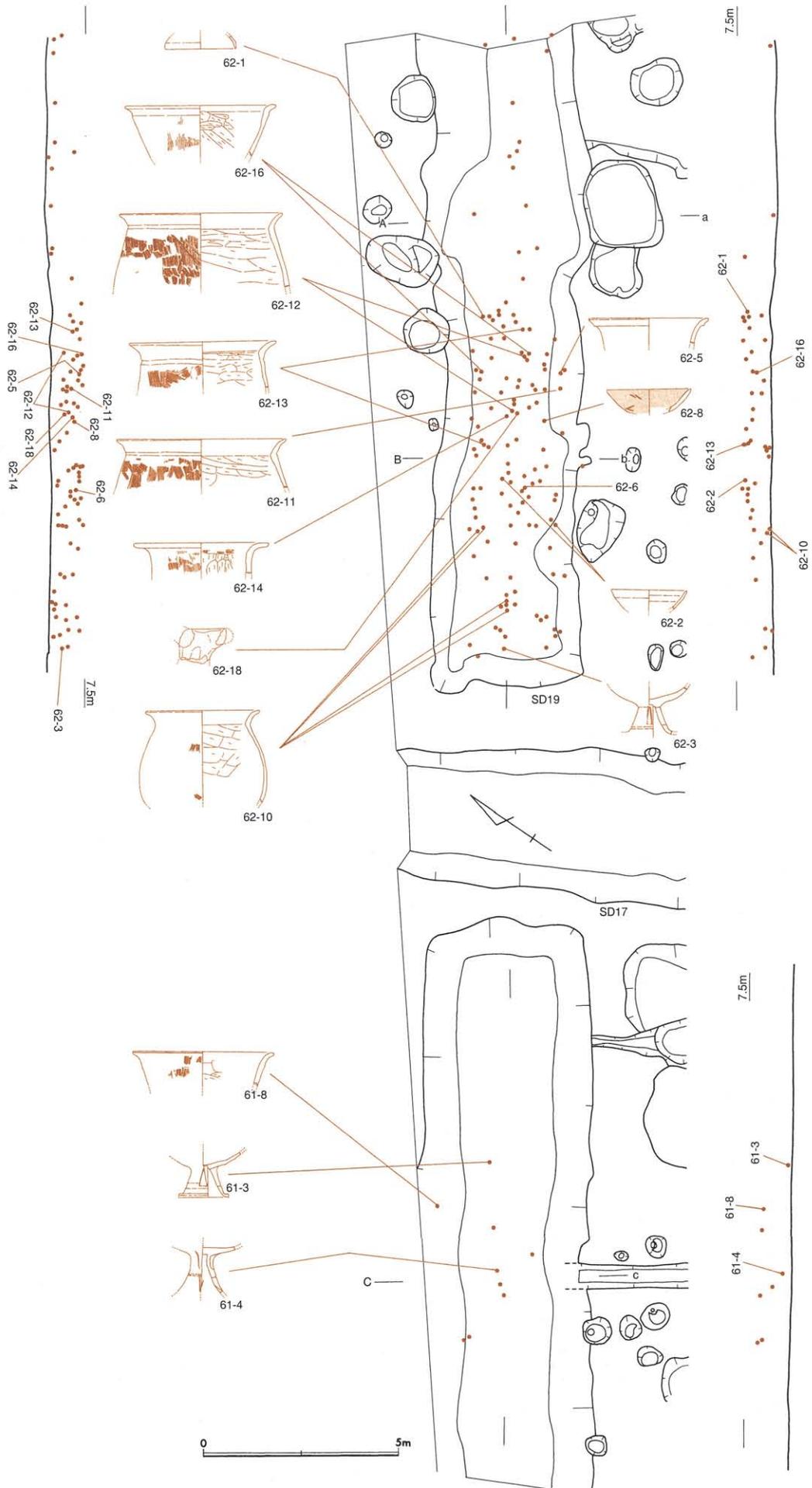
B-bの3~7層は砂質土と砂層の互層状堆積である。1a層はA-aの1・2層に対応するもので掘り返しが想定されるが、その他については変化に乏しく単純なレンズ状の堆積である。

C-cでは砂層は底面の両端部にだけ認められ、互層状の堆積は見られなかった。5・7層下面は6層を切っていることから掘り返し面と考えられる。

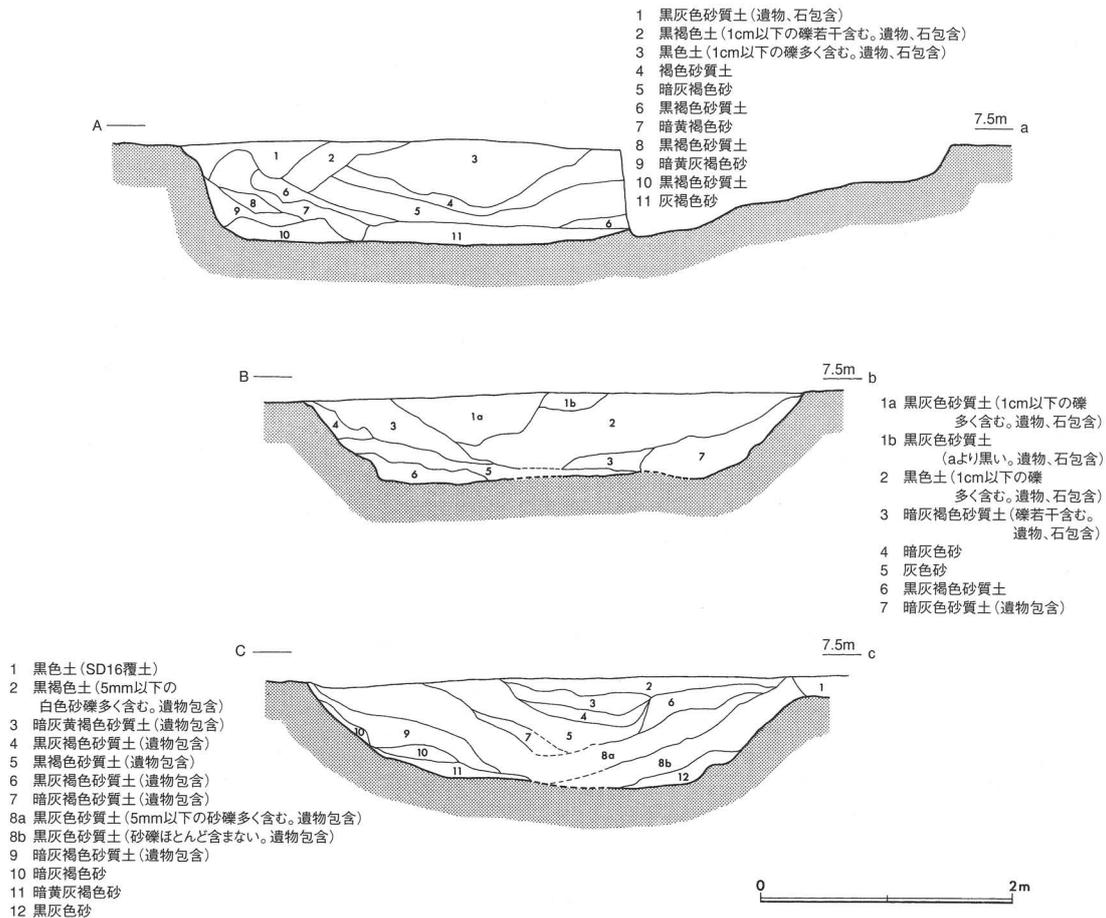
以上を整理すると、SD17・19双方に掘り返しの痕跡はあるものの、頻繁に行われたとは考えにくいと言える。また、堆積土は基本的に黒褐色系の土砂がレンズ状に堆積するが、下層では部分的に湧水に起因する砂の堆積が認められた。ただし、粘(質)土の堆積が認められないことから、常時水を湛えて滞留していたわけではなかったと推定される。

遺物出土状況 出土状況に示したドットからは、SD17からの出土はほとんど無いように見えるが、これはある程度の大きさを残すものに限られる。また、湧水のため原位置を記録できずに取り上げたものも相当量ある。ただ、出土量を比較した場合、SD17の方が相対的に少なく、遺物の残存度も悪かった。SD17では遺物は検出面から底面直上まで認められた。このうち、底面近く(8a層)から須恵器高坏が2個体出土している。

SD19では、遺物の残存度も比較的良好なものが多く認められた。遺物は西側半分域に集中して分布する傾向が見られ、このうち甕や甑、土製支脚など煮炊き具が多く出土しているのが特徴である。図に示した遺物の垂直分布における高低差は、土層がレンズ状に堆積している状況を反映し



第59図 SD17・19遺物出土状況 (1:150)



第60図 SD17・19土層断面図 (1:60)

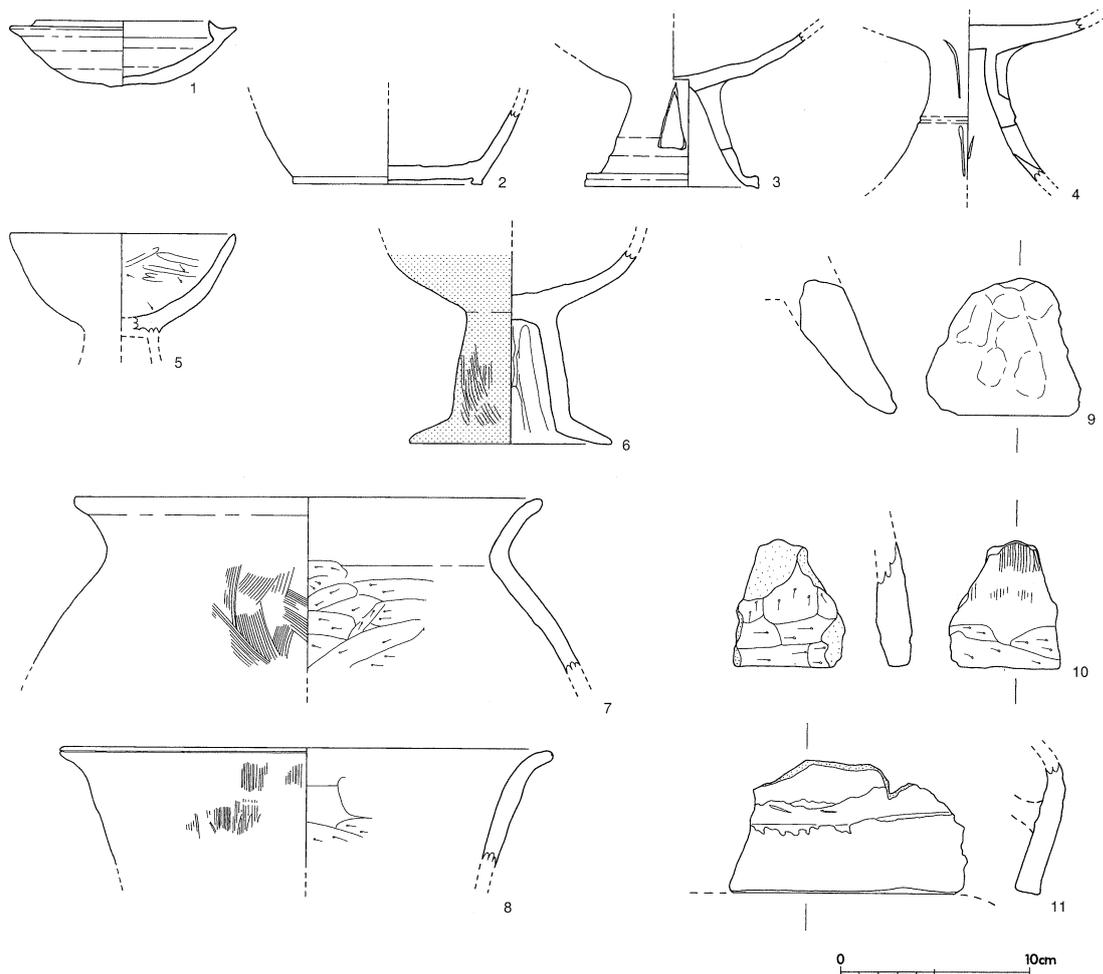
ており、検出面から底面直上まで認められた。

出土遺物の内、SD17-19間で接合する資料は今回確認できず、各溝内での接合に留まっている。

SD17出土遺物 (第61図) 1~4は須恵器である。1は坏身で口径9cm、受部径12cmと小形のもので、底部は回転へら起こし後などを施す。2は高台が底部最外周に付く坏で、底部はなで不明瞭だが回転糸切りか。8世紀末~9世紀代のものであろう。3は低脚高坏で2方向に三角形透かしを設けるA5型。4は2段2方向の切れ目状透かしを持つ長脚のB6型で、地山直上で検出したものである。5~8は土師器である。6は赤彩の高坏で古墳時代後期まで下るものであろう。7は甕、8は甑、9は土製支脚である。10・11は移動式竈の脚部と、焚き口部の資料で軒庇は剥離している。坏蓋、高坏の形態から出雲6期に相当する。

SD19出土遺物 (第62図) 1~5は須恵器である。1は坏蓋の小片で、口縁の特徴からA7型に相当する。2~4は高坏である。3は2方透かしの低脚無蓋のものでA5型、4は長脚無蓋で、2段3方透かしを持つA2型である。6~17は土師器である。7・8は赤彩の坏か高坏であろう。10~14は甕である。10は最大径が胴部下半にあるもので7世紀代のものであろう。15~17は甑である。17は須恵器のような硬質のものである。18~20は土製支脚である。須恵器は、4が後期後半である以外は概ね出雲5期の範疇で捉えられるものである。土師器の年代観は確立されていないが、これらは出雲5期にあっても矛盾するものではない。

出土遺物を見る限りでは2条の溝に大きな時期差はないと考えられる。61-2の8世紀末~9世



第61図 SD17出土遺物実測図 (1:4)

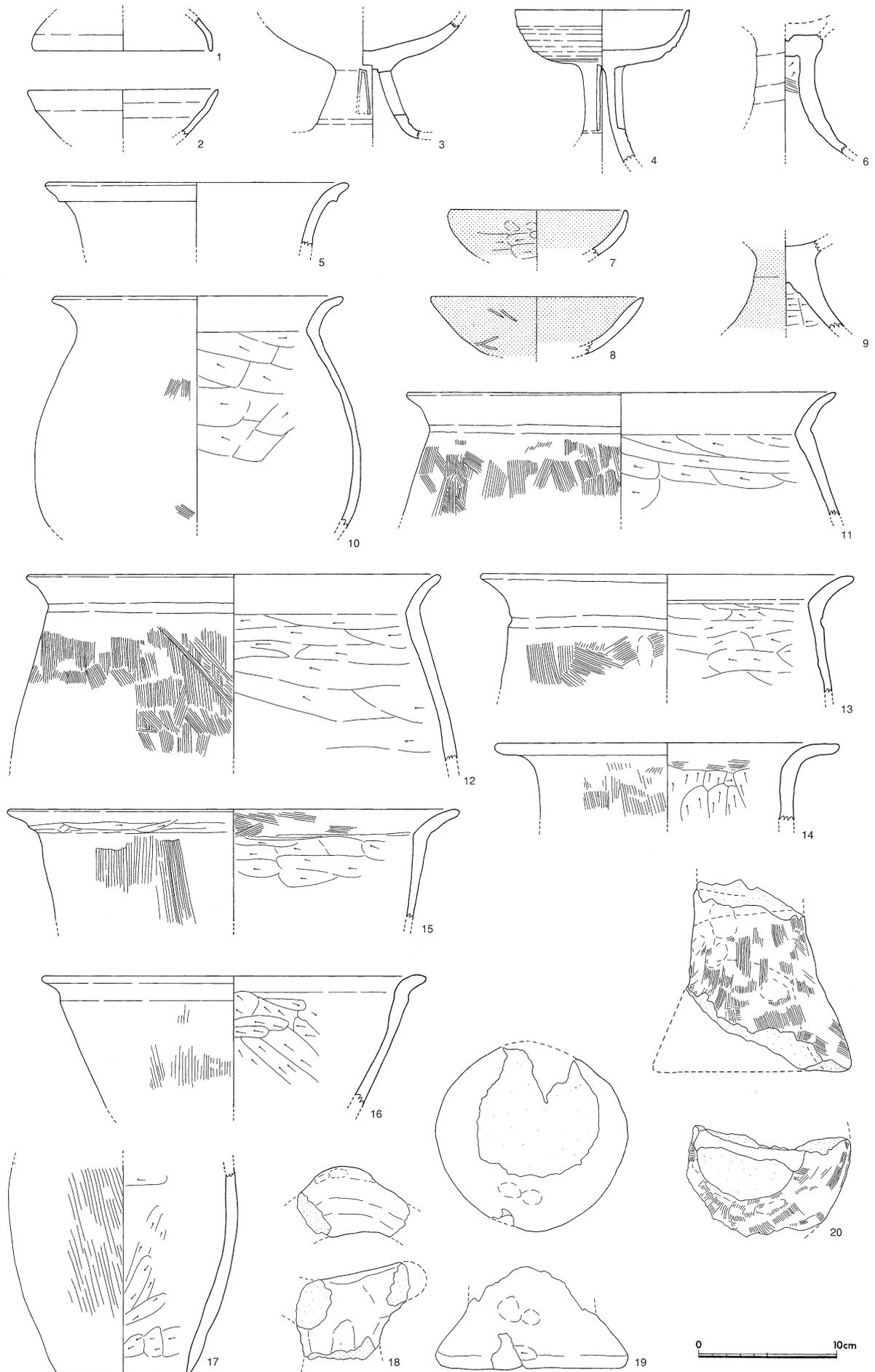
紀まで掘り返していた状況も読み取れないことから、溝として機能していたのは出雲5～6期、即ち7世紀前半代で、8世紀までには完全に埋まったものと推測される。

6. SX01 (第63図)

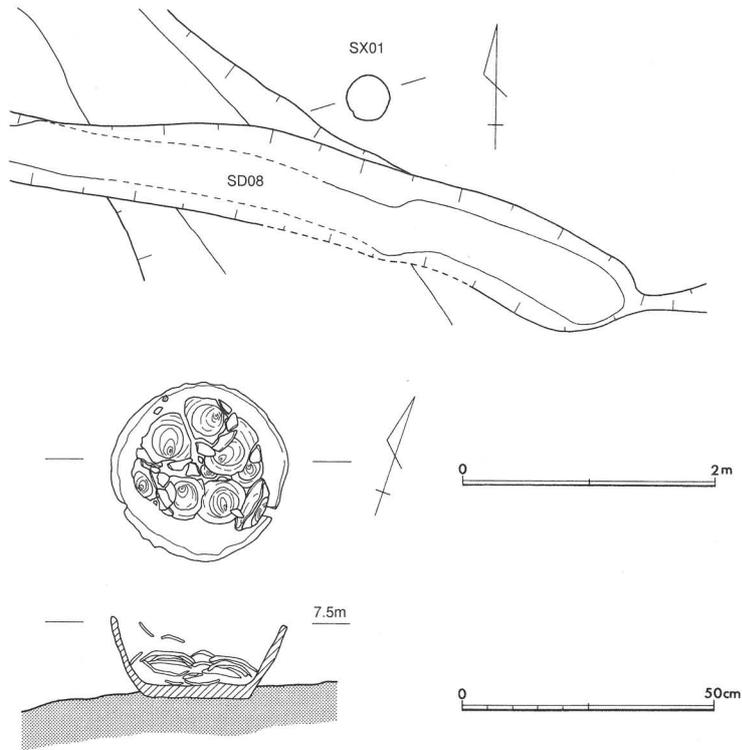
前述したSD08 (第51図) の北側に位置する。溝よりわずかに高い位置に浅い窪みを設け、そこに鉄鍋を据え置いたものである。鍋の口縁を検出した時点で掘方を探したが、周囲の堆積土が黒褐色であったためこれを確認することはできなかった。鍋内の土砂を除去すると、糸切り底の土師器38個体が全て伏せた状態で検出された。鍋底には土砂はほとんど無かったことから、本来は木蓋をしていたと推測される。

SD08上面では、鉄鍋の周辺だけに集石が検出されているが、集石を覆う土砂から出土した遺物は図示したように時期はまちまちで、新しいものは19世紀のものまで認められる。集石がなされた時期を遺物が示す近世後半以降とするか、鉄鍋との関連で考えるのか見方が別れるところだが、遺物に一括性が認められない点と、地鎮祭祀的な特殊な性格を持つ鉄鍋⁽¹¹⁾⁽¹²⁾と隣接する状況から、これらは関連付けて捉える方が自然と思われる。

出土した土師器は (第64図)、口径の大小で皿と小皿に2大別でき、双方とも底部が厚いのが特徴である。このタイプの土師器皿は類例が少なく年代観も定まっていないが、出雲市壺丁田遺跡SK06⁽¹³⁾で16世紀後半の青花碗と相伴していることから、鉄鍋から検出された土器群は古くとも

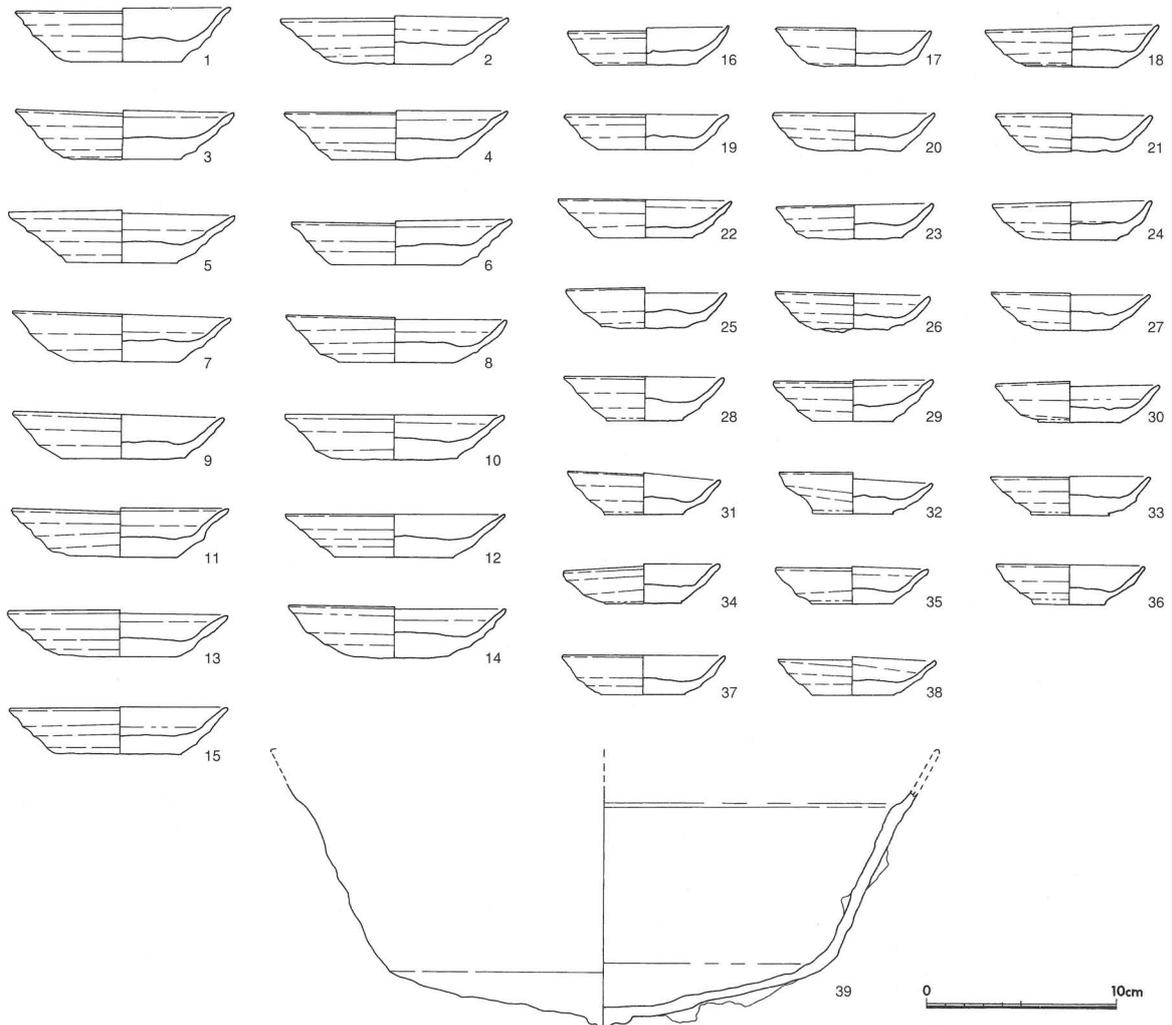


第62図 SD19出土遺物実測図 (1 : 4)

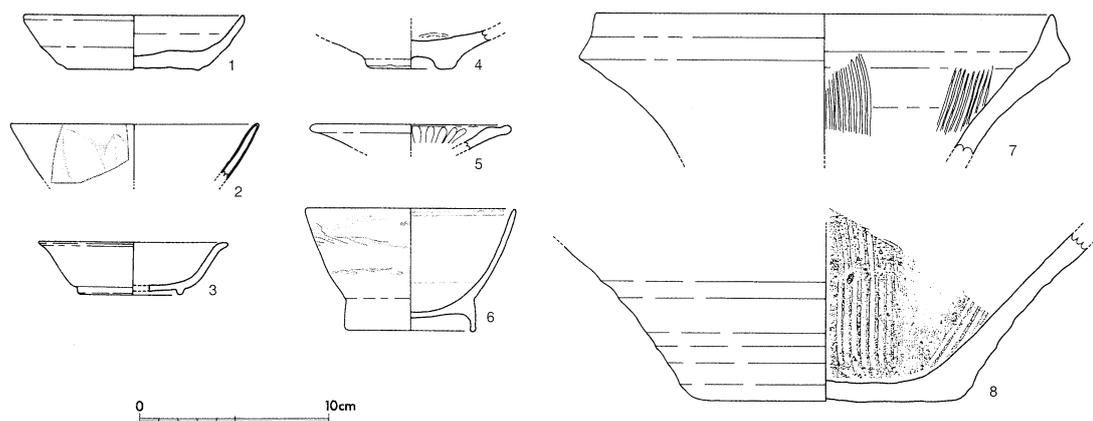


第63図 SX01遺物出土状況実測図 (1:60、出土状況は1:15)

16世紀後半以降のものと考えられる。鉄鍋は鑄造品で、口縁下部にわずかに段が見られることから、口縁に蓋受けの屈曲が付く五十川分類の鍋A⁽¹⁴⁾または口縁の内側に耳の付く鍋Cに該当する。現状で耳の痕跡は認められないが、口縁部の大半は欠損しているため断定できない。いずれにしても12世紀後半から16世紀まで見られるタイプで、富田川河床遺跡でも古唐津と共伴している⁽¹⁵⁾。



第64図 SX01出土遺物実測図 (1:4)



第65図 SX02出土遺物実測図 (1:4)

SX02 (第5図)

調査区中央南西寄りに位置する平面不定形の落ち込みである。周囲は柱穴や土坑が集中する区域でもあるので、土坑が複雑に切り合ってきた落ち込みと考えられる。

出土遺物は第65図に示した。1は糸切り底の土師器。2は龍泉窯系青磁碗、3は16世紀後半の輸入白磁皿である。4は砂目の唐津皿で17世紀前葉、5は瀬戸・美濃系陶器で、大窯期の折縁菊皿である。6は肥前系の広東碗で18世紀末～19世紀前半のものである。7・8は備前焼で、7はⅣ期に相当する。

第2節 HⅡ区の調査

遺構の配置と概要 (第66図) 調査区は、平成10年度HⅠ区と11年度HⅢ区を合併してHⅡ区としたもので、調査面積は4579m²である。近年までは工場用地として利用されていた。調査区の北西に隣接するG区からは神門郡家の郡庁に比定される大形建物等が検出されており、HⅡ区からも関連遺構が検出される期待が持たれた。調査の結果、弥生時代前期～近世に至る多くの遺構を検出した。主な遺構は、弥生時代前期の溝、弥生時代終末～古墳時代初頭に埋没した溝、弥生時代終末の竪穴建物、古代～近世の井戸、古代～近世の掘立柱建物、中・近世の溝等である。

遺構は調査区全域から検出されたが、遺構の種別や時期によってまとまって分布する傾向が認められた。弥生時代終末～古墳時代初頭の溝は調査区西端に、中・近世の溝は中央部に重複してつくられている。これらの溝は神戸川に沿う方向であるのに対し、弥生前期の溝SD29は異なる方向を指向している。古代と考えられる建物跡は調査区北半に多く分布し、中・近世のそれは南半に集中するのが顕著である。ただし、南半において古代の建物が検出されなかったのは、建物柱穴が複雑に切り合った状況で、単に認識することができなかつただけの可能性もある。井戸は調査区南端の、中・近世の建物柱穴密集域にまとまって認められた。

包含層 遺跡の層序については第3章で述べたとおりであるが、調査区の北半部は近世以降に形成された3層は認められなかった。基本的には4層中程まで重機掘削を行い、グリッドを設定して人力掘削を行った。グリッドはHⅠ区と併せて設定したが、平成11年度にHⅢ区を追加調査したため、東西方向については西からX, Y, Z, A, B, C・・・とした(第67図)。

包含層出土遺物 (第68図) 1は低脚坏の脚部資料である。2は低脚高坏の坏部で、内外面に丁寧な磨きを施し、接合部には刷毛状工具でなでた痕跡が見られる。3は小形の甕で、4は複合口縁の痕跡を残す土師器甕である。6～9は高坏で、6は内外面共に不定方向の刷毛調整後、放射状の暗文を施す。7・8は脚部が長いもので、9は短小のものである。10はるつぼで、胎土はガス質で気泡が多く認められ、内面にはガラス質の付着物が見られる。

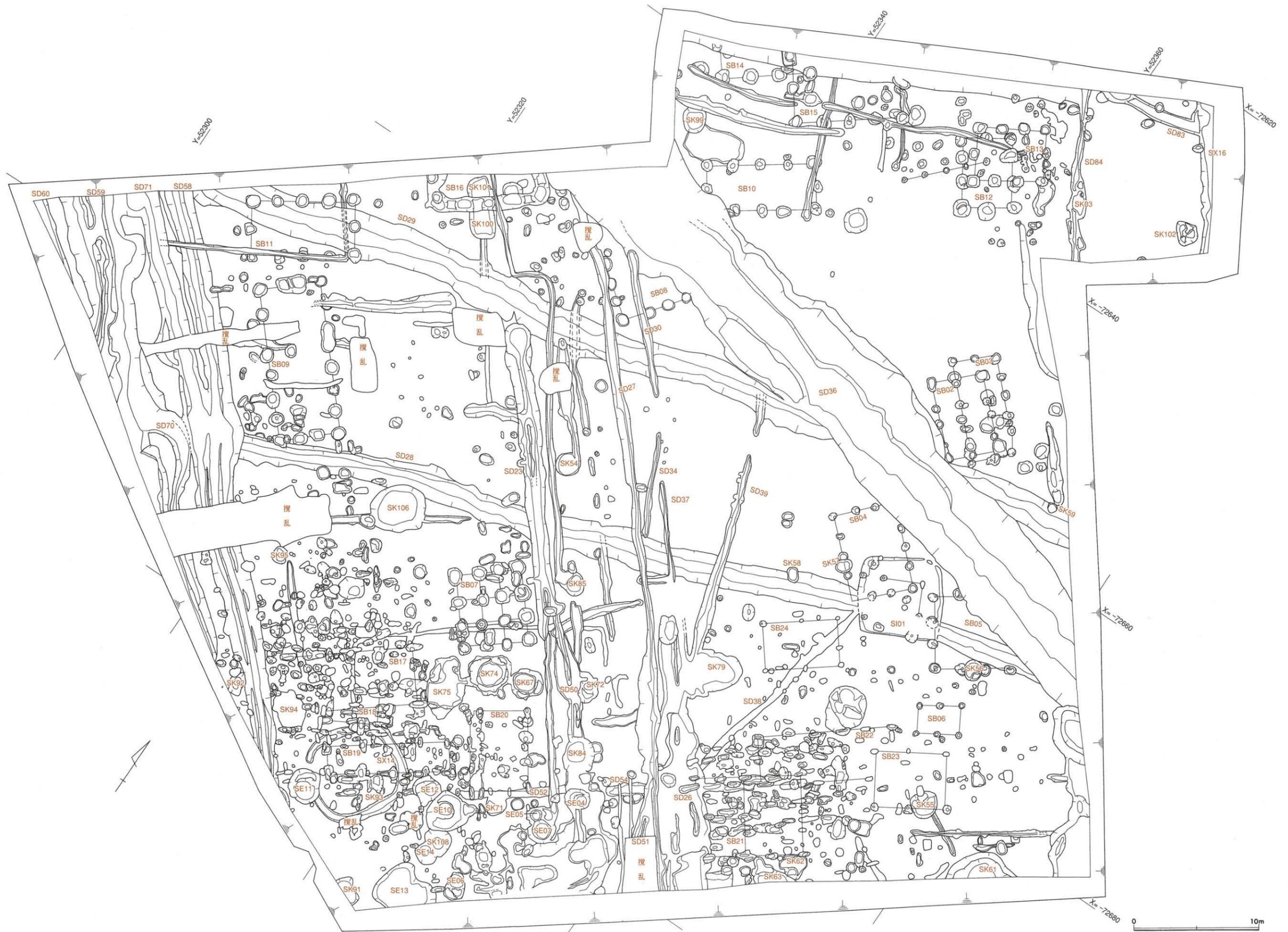
11～17は須恵器である。11は坏身で復元口径が10cmと小形のもので、出雲6期に相当する。12・13は底部を欠損するが、糸切り底の坏身であろう。口縁は内弯気味に立ち上がり、端部にアクセントを持つもので、8世紀後半のものである。14は皿で、底部の切り離しは風化のため定かではない。15～17は高坏である。15は方形透かしを2段2方向に持つもので、長脚のものであろう。16は低脚で、三角形2方透かしを持つ。17は脚端部が下方に突出する特徴的なもので、坏部の形態は不明だが出雲1～2期の所産である。

18～22は糸切り底の土師器である。18は柱状高台皿で13世紀後半、19は坏で13世紀代の所産であろうか。20は坏で15世紀代のもと考えられる。21・22は皿で18世紀代以降の年代が与えられよう。22は灯明皿と見られ、内面に脂様の付着物が認められる。

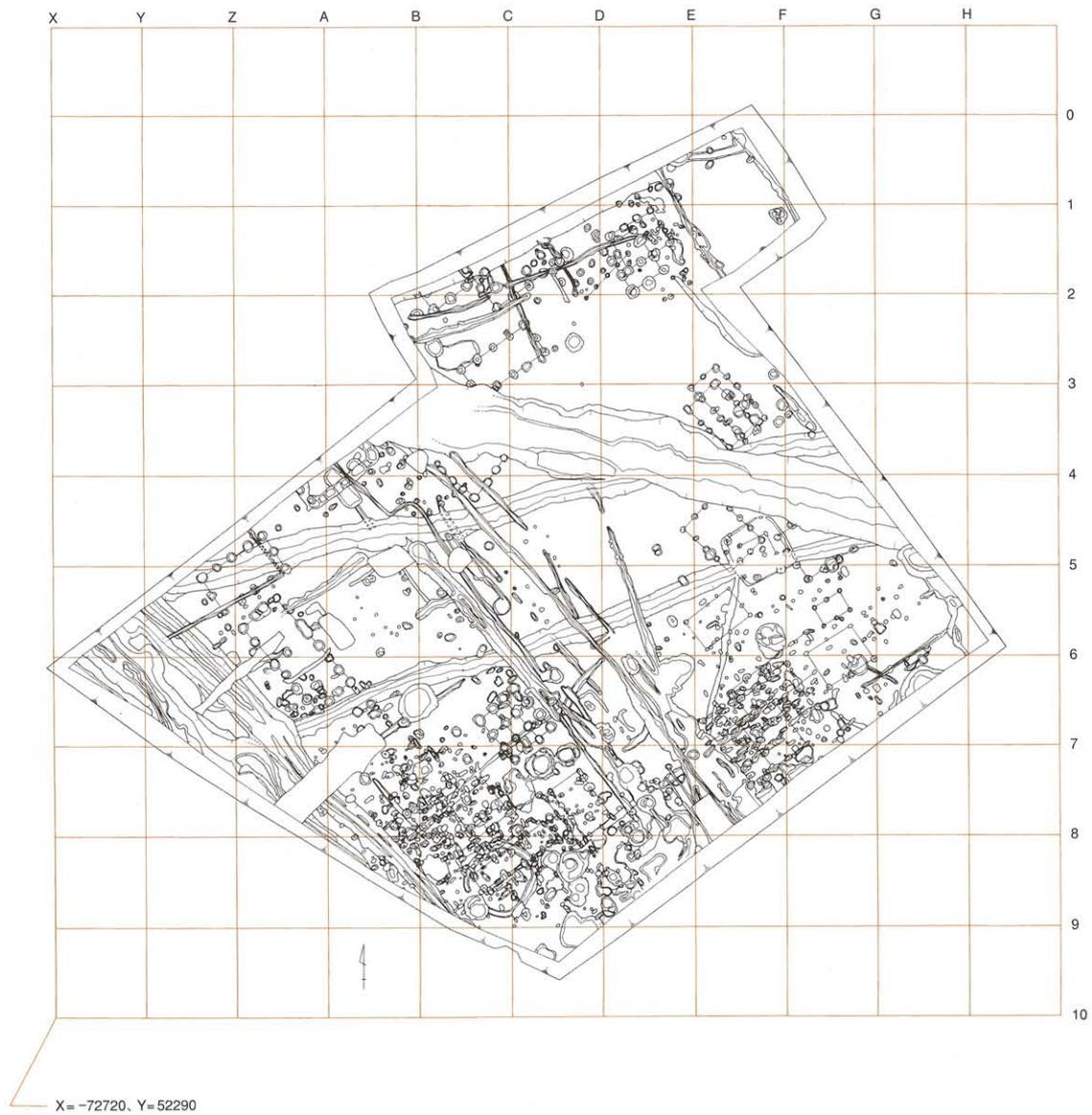
23・24は五徳と考えられる素焼きの土器で、底抜けで内面には器物受けが取り付く。25は焙烙である。26は瓦質の鉢で、内面には雑な条痕が認められる。すり鉢であろうか。

27～29は輸入陶磁器である。27・28は雑な線刻蓮弁文の青磁碗で、27は13世紀以降、28は見込みに印花文のスタンプがされるもので、14～15世紀前半代のものである。29は李朝の碗で、見込みと畳付に目跡が残る。16世紀代のもと考えられる。

30～33は肥前系陶磁器である。30は16世紀末～17世紀初頭の鉄絵の唐津皿で完形品である。31



第66图 H II区遺構配置図 (1:300)



第67図 HII区グリッド設定図 (1 : 800)

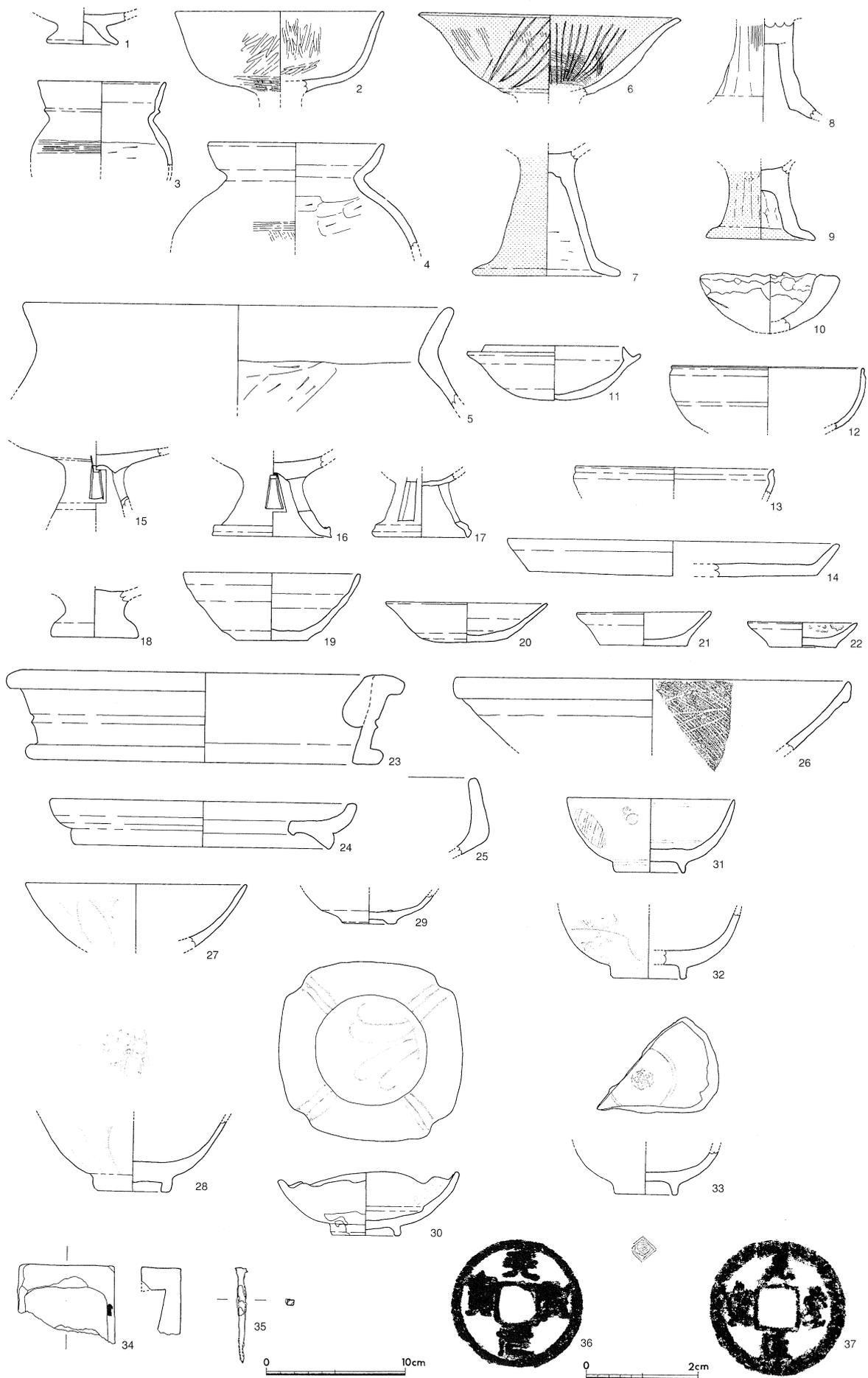
～33は染付碗である。31は18世紀後半、32は18世紀中頃～後半の所産である。33は青磁染付で、外面は緑灰色を呈す。見込みに五弁花のコンニャク印判、高台内には禍福が見られる。

34は幅約7cm、高さ2.8cmの珪化木製の硯で、一部に墨痕が認められる。35は鉄製の角釘である。36・37の銭貨のほか、図示できなかったが寛永通宝(古)も1点出土している(表3-3)。

第3表 HII区包含層出土銭貨計測表

No.	銭名	初鑄年	銭径(A)／銭径(B)		内径(C)／内径(D)		銭厚	量目
68-36	天聖元宝	1023	23.55	23.90	19.55	19.75	1.15	2.31
68-37	元豊通宝	1078	25.15	24.95	19.40	19.35	1.20	2.24
	寛永通宝	1636	25.00	25.10	19.75	19.30	1.20	3.53

(単位：mm・g)



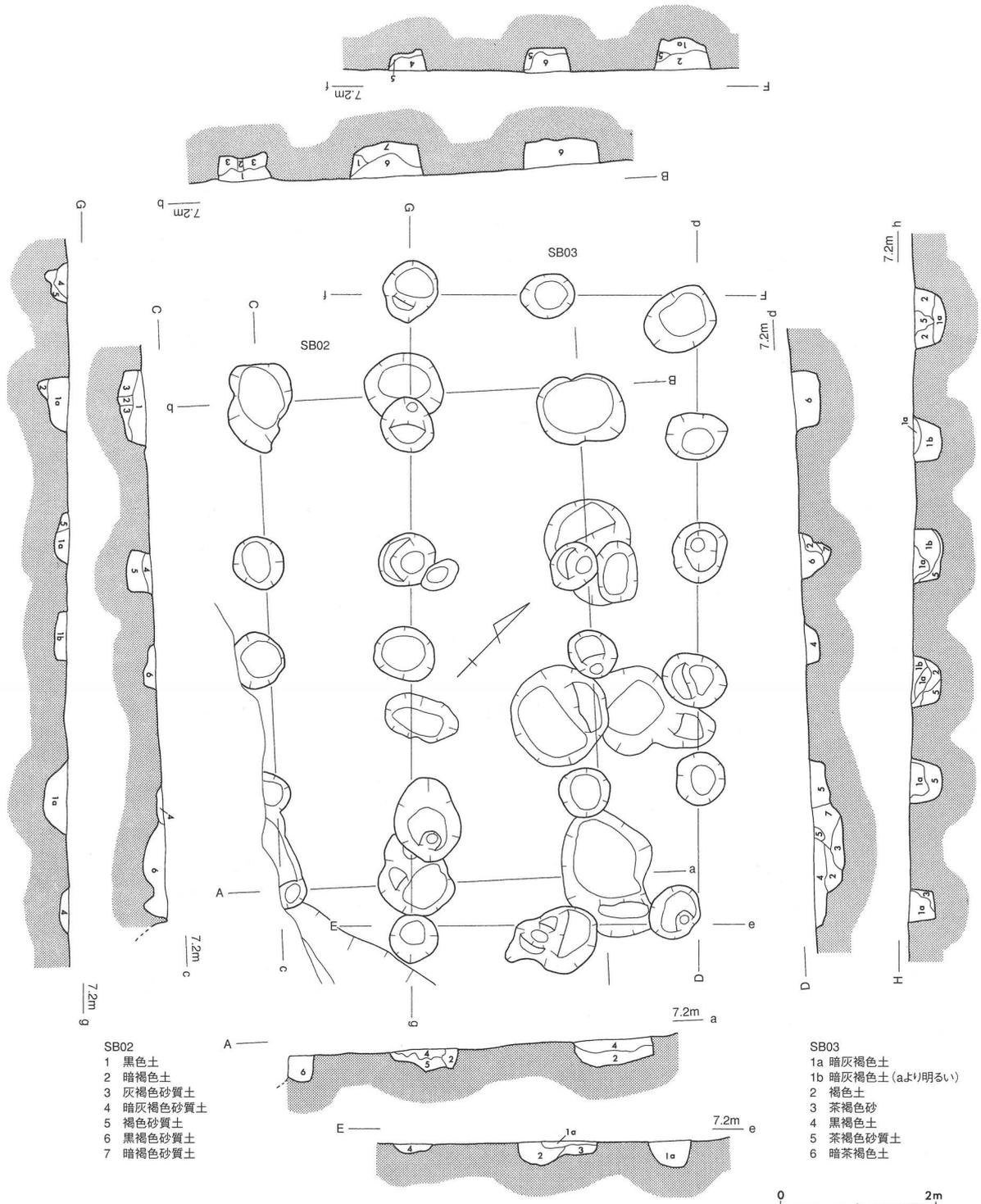
第68图 H II区包含層出土遺物実測図 (1:4、36・37は1:1)

1. 掘立柱建物 (第69~89図)

SB02・03 (第69図)

調査区東壁付近に位置するもので、重複して検出した2棟の建物である。柱穴の切り合いから、建物の前後関係はSB02→SB03で、建て替えの可能性が高い。出土遺物はなく、明確な時期は不明だが、後述するように柱間がは不規則な状況で、G区の建物ほど整然としたものではない。

なお、以下に示す柱穴の規模は、上端が崩れて検出時よりも大きくなった完掘状況のものである。



第69図 SB02・03実測図 (1:80)

S B 0 2 2×4間の側柱建物である。規模は梁行約4m、桁行6.4m、床面積25.6㎡で、棟方向はN-47°-Wである。柱間は梁行・桁行ともに不規則である。柱穴掘方は平面円形で、上端で径65cm前後のものが多いが、A-a列、B-b列にあるように不整形で1m内外のものもいくつか認められる。明確な痕跡は見られなかったが、抜き取りが行われた可能性もある。

柱穴の埋土は、黒褐色系の土砂である。西隅の柱穴で柱痕を確認し、その径は現状で12cm程である。

S B 0 3 2×5間の側柱建物である。規模は梁行3.6m、桁行8m、床面積28.8㎡で、棟方向はN-45°-Wである。S B 0 2と同様に柱間は不規則である。柱穴は平面円形で、上端径は80cm前後である。

柱穴内には、暗褐色系の土砂が堆積し、北隅の柱穴からは柱痕を検出した。

S B 0 4 (第70図)

S B 0 2・0 3の南側に位置する3×4間の側柱建物である。建物の北側隅は近世の大溝(S D 3 6)に切られていた。規模は梁行5.1m、桁行7m、床面積35.7㎡で、棟方向はN-45°-Wである。柱間は梁行で1.6m前後、桁行で1.6~2mとある程度等間隔である。柱穴掘方は平面円形で、上端の径は65cm前後を測るものが多い。柱穴内には基本的に黒色土が堆積し、柱痕や抜き取り痕を示す状況は認められなかった。

柱穴出土遺物は、1の鼓形器台と、2の糸切り底の土師器がある。2は検出面で出土したもので、15世紀代の小皿と考えられる。

建物の時期は定かでないが、溝との切り合いと埋土から17世紀後半までは下らない。建物の主軸が先述の2棟と同じことから、土師器の年代を考慮に入れると、これらは中世まで下る可能性もある。

S B 0 5 (第71図)

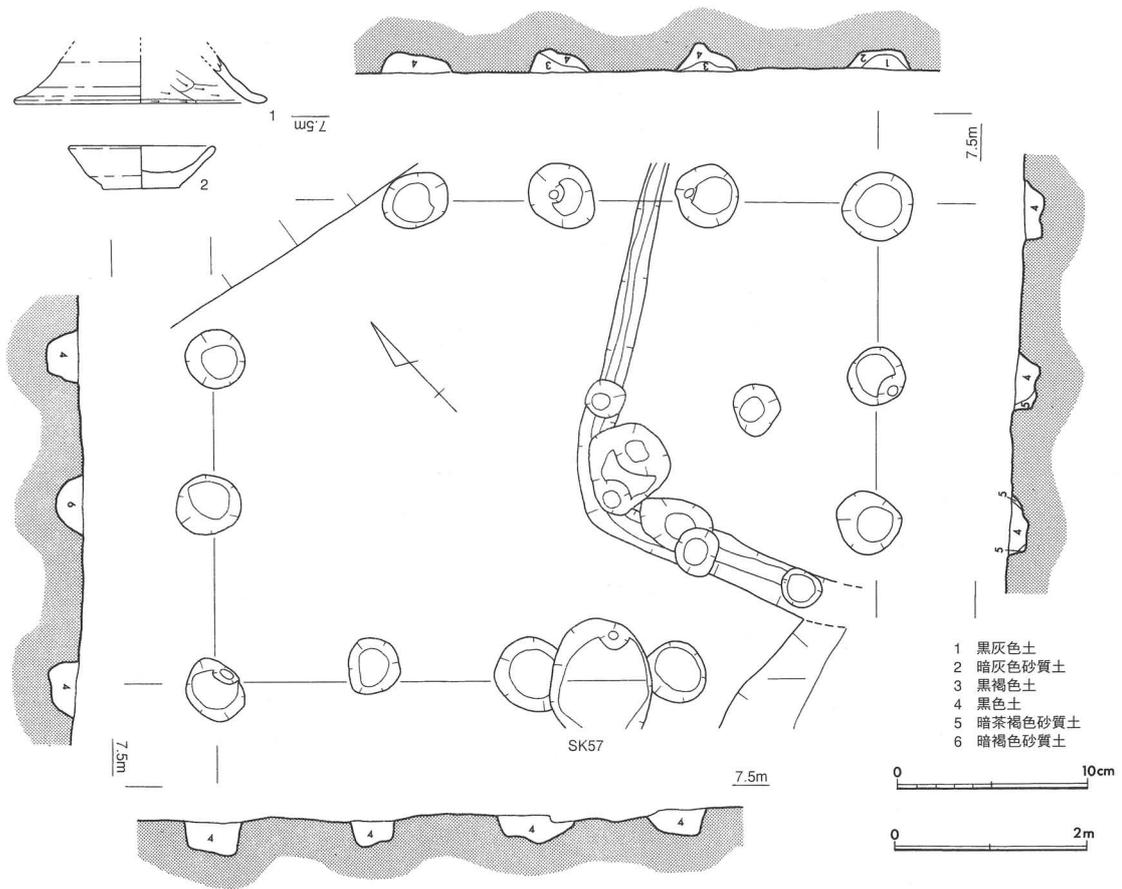
S B 0 4の東側に隣接する3×3間以上の側柱建物である。弥生時代終末の竪穴建物(S I 0 1)を切り込み、東半分はS B 0 4と同様に近世の大溝に切られていた。建物規模は梁行5.8m、桁行5.85m以上、床面積33.93㎡以上と考えられ、棟方向はN-58°-Eと、これまでの建物とは軸が異なる。柱穴内には、掘方の片側に寄せた状態で柱痕が認められ、柱穴は梁行・桁行ともに2.0m間隔で規則的に配列されている状況が確認された。柱穴掘方は平面円形で、上端の径は80~96cmである。

柱痕及び埋土は黒褐色系の土砂で、柱痕の周りには互層状の裏込めがなされていた。柱痕の径は現状で25cm前後である。

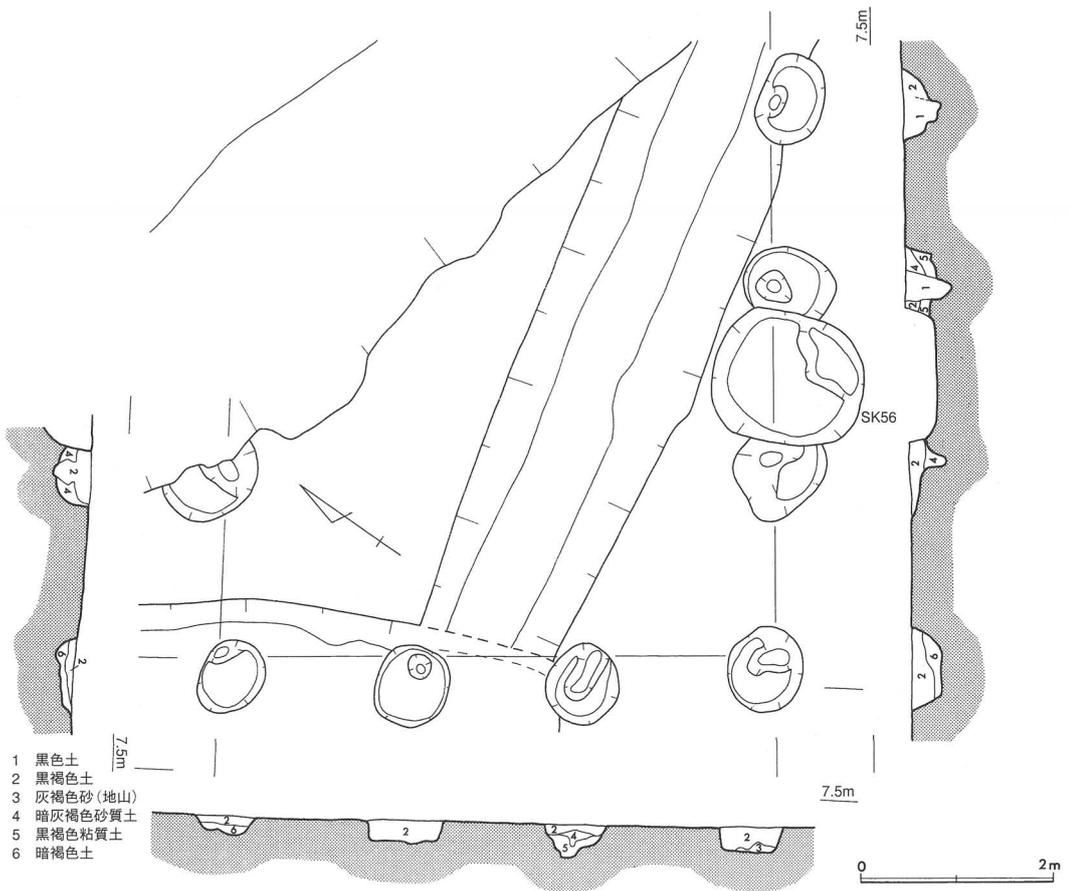
遺物は古式土師器の小片が出土しているが、時期決定に足るものではない。切り合いからは、古墳時代~17世紀後半までで捉えられるが、埋土を考慮すると中世以前と考えられる。なお、S K 5 6にも切られているが、土坑の時期は不明である。

S B 0 6 (第72図)

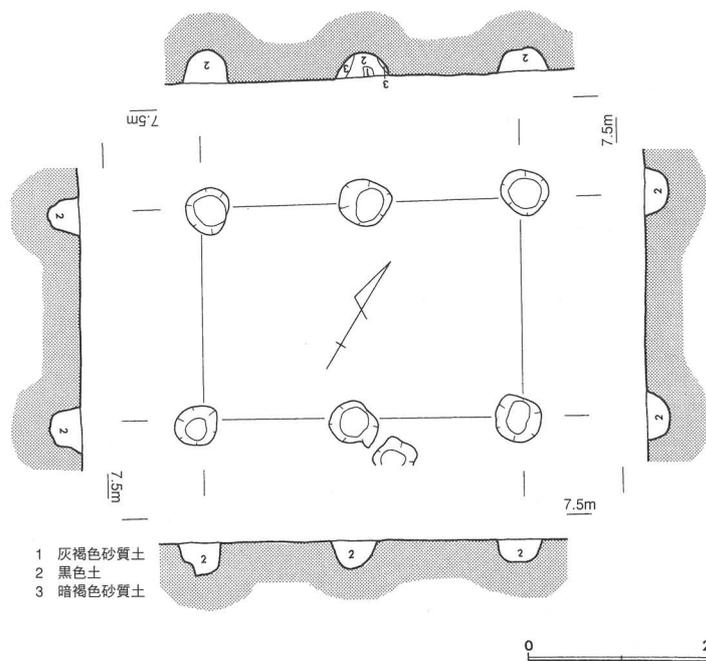
S B 0 5の南側に位置する建物で、1×2間と小形のものである。規模は、梁行2.3m、桁行3.35



第70図 SB04、出土遺物実測図 (1 : 80、遺物 1 : 4)



第71図 SB05実測図 (1 : 80)



第72図 SB06実測図 (1:80)

3×3間の総柱建物で、倉庫と考えられる。規模は、梁行5.4m、桁行5.7m、床面積30.78㎡で、棟方向はN-40°-Wである。柱間は、梁行・桁行ともに1.84m（6尺）である。柱穴掘方は平面円形で、規模は上端径で96~144cm、下端径72~104cm、深さ90cm内外で、非常に大きな掘方を有す。

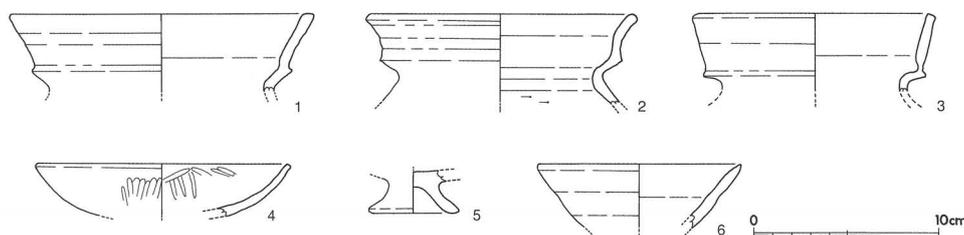
柱穴内の堆積状況は、柱穴によって異なるが、総じて言えることは柱痕や拔取り痕を示す立ち上がりが見られないことで、単純な水平堆積や互層状の堆積が観察された。これは断面が柱の位置からずれているためと考えられる。

遺物は第73図に示したもので、1~3は甕、4・5は低脚坏である。6は底部を欠損するが糸切り底の土師器である。1~5は弥生時代終末期~古墳時代前期、6は概ね13世紀後半代と考えられる。

出土遺物を見る限りでは、中世の6が最も新しいが、建物柱穴が中・近世の土坑や柱穴に攪乱されている状況と、柱間6尺の大形柱穴を持つ倉庫であることから、G区の郡家に比定される建物群と関連して位置付ける方が妥当と思われる。

SB08 (第75図)

調査区北側に位置する側柱建物で、SD30・36に切られるかたちで検出した。建物は溝に切



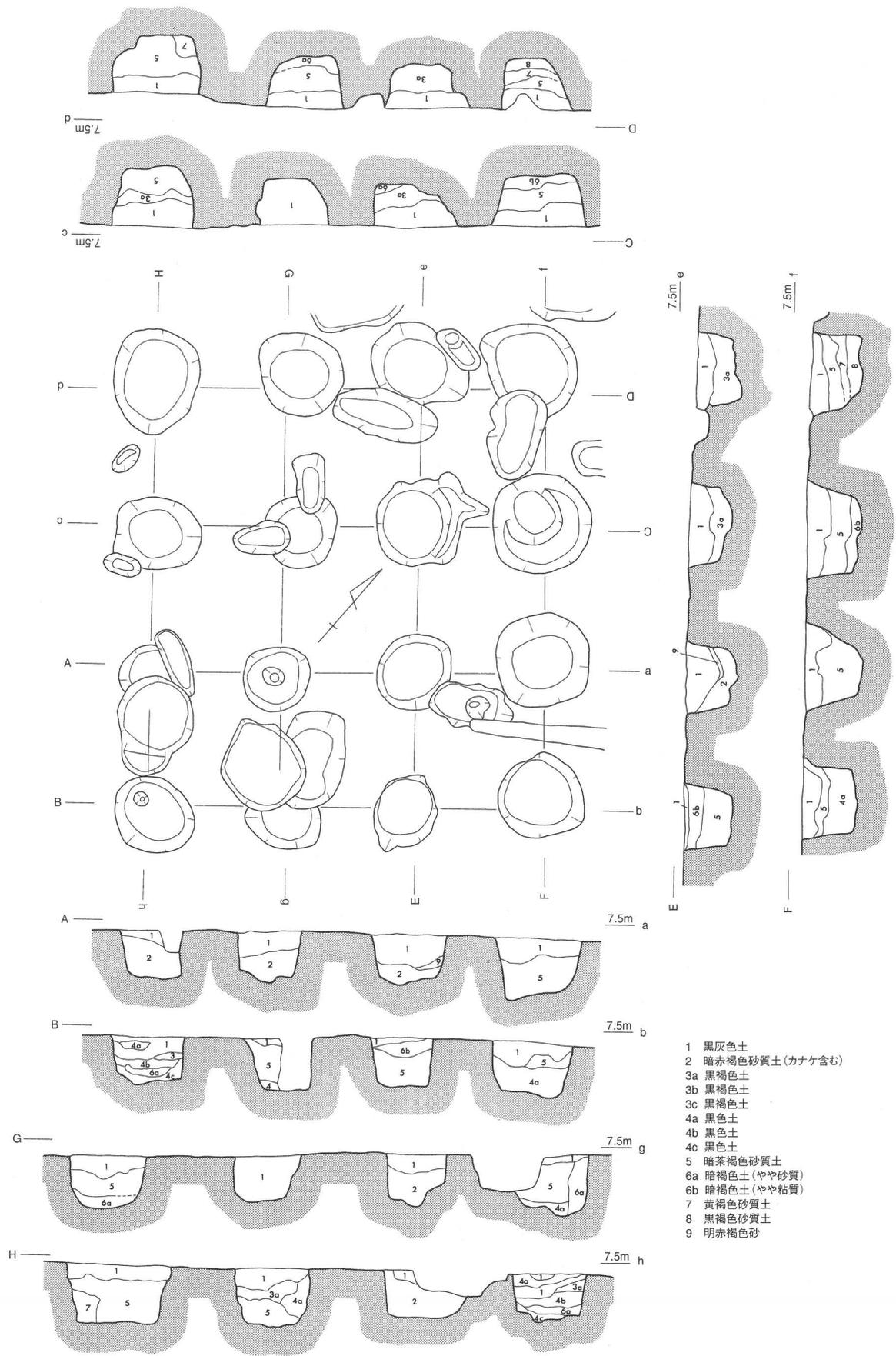
m（柱間1.68m）、床面積7.71㎡である。棟方向はN-58°-Eで、SB05と平行な位置関係にある。柱穴掘方は平面円形で、上端の径は40~55cmと建物規模に対して大きなものである。柱穴内には黒色土が堆積し、柱痕は確認できなかった。

出土遺物がなく時期は不明だが、棟方向とSB05との位置関係から、これとの関連性が注意される。

SB07 (第74図)

調査区中央南寄りに位置する

第73図 SB07出土遺物実測図 (1:4)



第74図 SB07実測図 (1 : 80)

られているため全容及び棟方向は分からないが、梁行・桁行ともに3間以上の構造と考えられる。規模は、現状でA-aが5.8m（柱間1.9m）、B-bが4.8m（柱間1.6m）、床面積26.95㎡で、棟方向はN-40°-Eである。柱穴掘方は平面円形で、規模は上端で径72~120cm、床面積は26.95㎡である。

柱穴内には黒褐色系の土砂が堆積していた。柱痕が断面で確認できたのは最も西側の柱穴だけである。

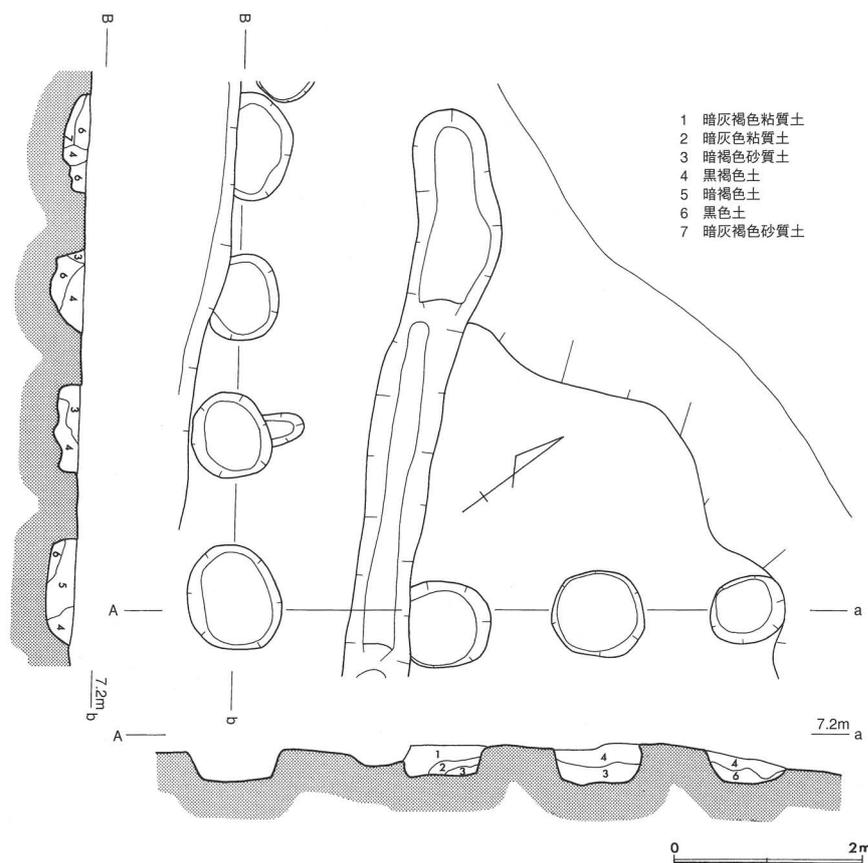
埋土から中世以前と推定されるが、出土遺物が無く時期は不明である。

SB09 (第76図)

調査区の西側に位置する3×7間の側柱建物である。建物規模は梁行4.95m、桁行12.25m、床面積60.64㎡と大形で、棟方向はN-41°-Wである。柱穴掘方は基本的には平面円形だが、断面でも分かるようにP2・3、P6・7の掘方は連結している。掘方規模は、上端で径88~136cm、深さ60cm前後と大形である。柱間は、梁行1.65m（5.5尺）、桁行1.74m（5.8尺）である。掘方内の堆積状況は一様でないが、多くの柱穴の断面で柱痕が検出された。柱痕は検出面まで達しておらず、P11・12・15等のように抜き取られた状況や、柱の周囲には互層状の裏込めも観察される。P2・3及びP6・7の掘方が連結した要因は、前者は抜取りによるとも見られるが、後者に関しては構築時からの可能性も否定できない。

出土遺物は図示できなかったが、古式土師器と須恵器の小片が出土しているにすぎず、建物の

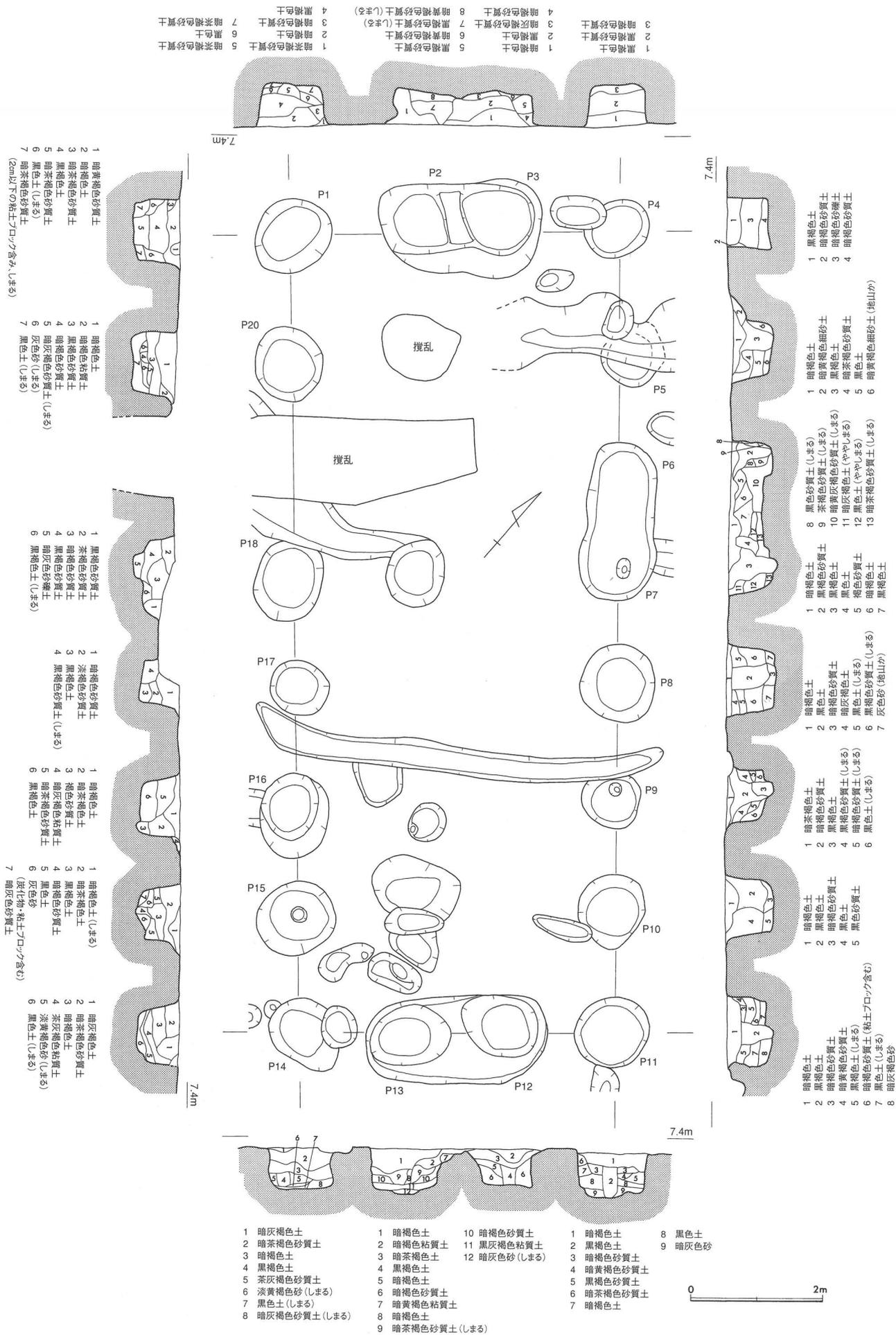
時期は不明確である。ただし、棟方向・柱穴規模等は総柱建物（SB07）と共通する要素であることから、SB07と共存していた可能性が高い。



第75図 SB08実測図 (1:80)

SB10 (第77図)

SB08の北側に位置する2×4間の側柱建物である。建物の南隅は近世の大溝SD36に切られていた。規模は梁行き3.65m、桁行き8.65m、床面積31.57㎡で、棟方向はN-55°-Eである。柱



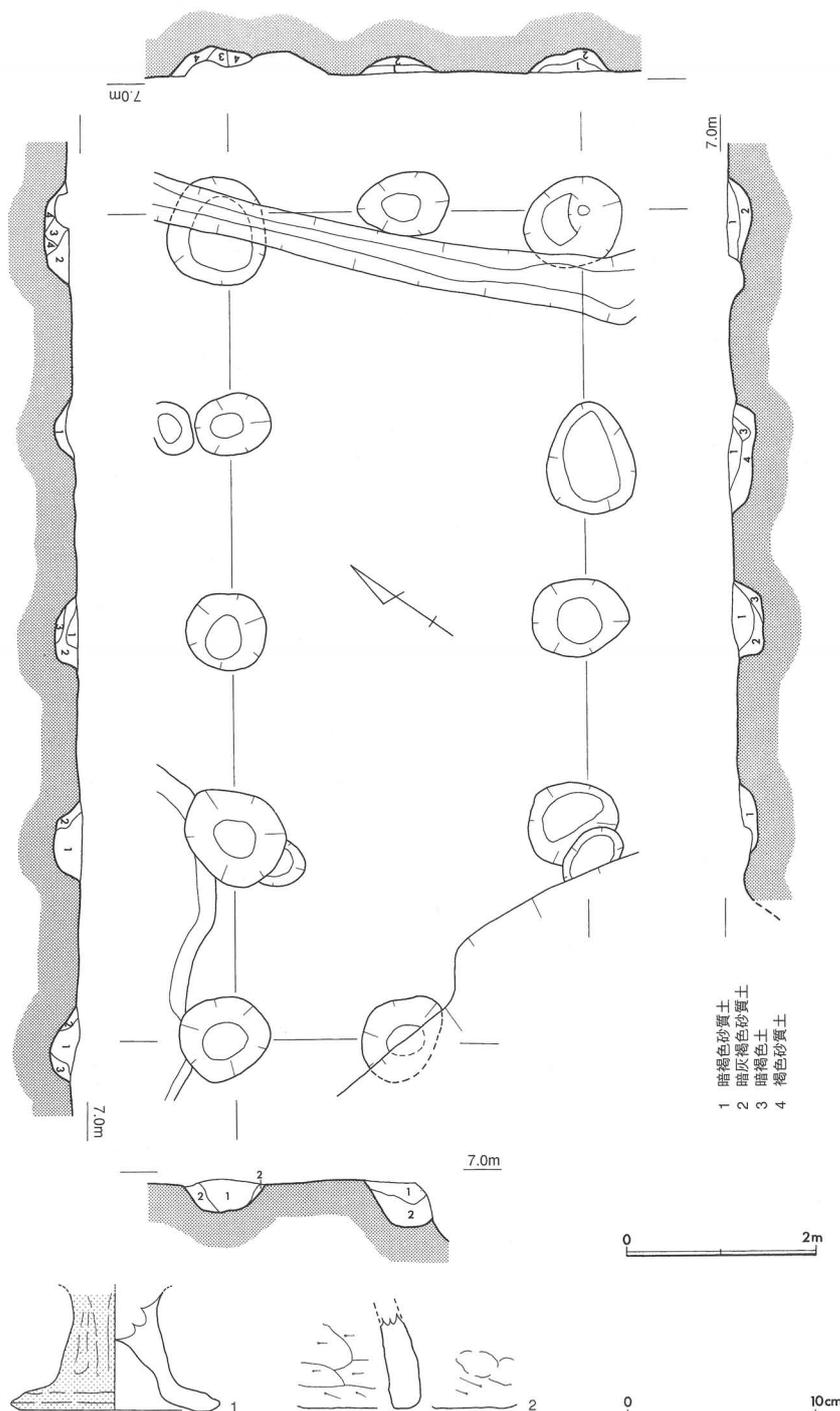
第76図 SB09実測図 (1:80)

間は梁行で188cm (6.2尺)、桁行で222cm (7.4尺) である。柱穴は平面円形で、規模は検出時の状況より大きくなっているが、上端径64~120cmである。

柱穴内には暗褐色系の土砂がレンズ状に堆積し、北隅及び西隅の柱穴では抜取り痕又は柱痕が断面で確認されたが、平面的にこれを検出することはできなかった。

出土遺物の1は赤彩土師器高坏である。裾部が強く屈曲し、内面天井部から坏部までが分厚いタイプで、古墳時代後期以降のものと考えられる。2は移動式竈の脚部資料である。このほか、古式土師器小片が少量であるが出土している。

建物の時期は、出土遺物から古墳時代後期以降で、下限は切り合いから17世紀後半までとなる。



第77図 SB10、出土遺物実測図 (1:80、遺物1:4)

SB11 (第78図)

SB09の北側に隣接する2×4間の側柱建物である。弥生時代前期の溝(SD29)を切るが、一方で、中~近世の小溝に柱穴の上部は切られていた。

建物の規模は梁行4.4m、桁行8.2m、床面積36.08㎡である。棟方向はN-55°-Eで、先述のSB10と同様である。

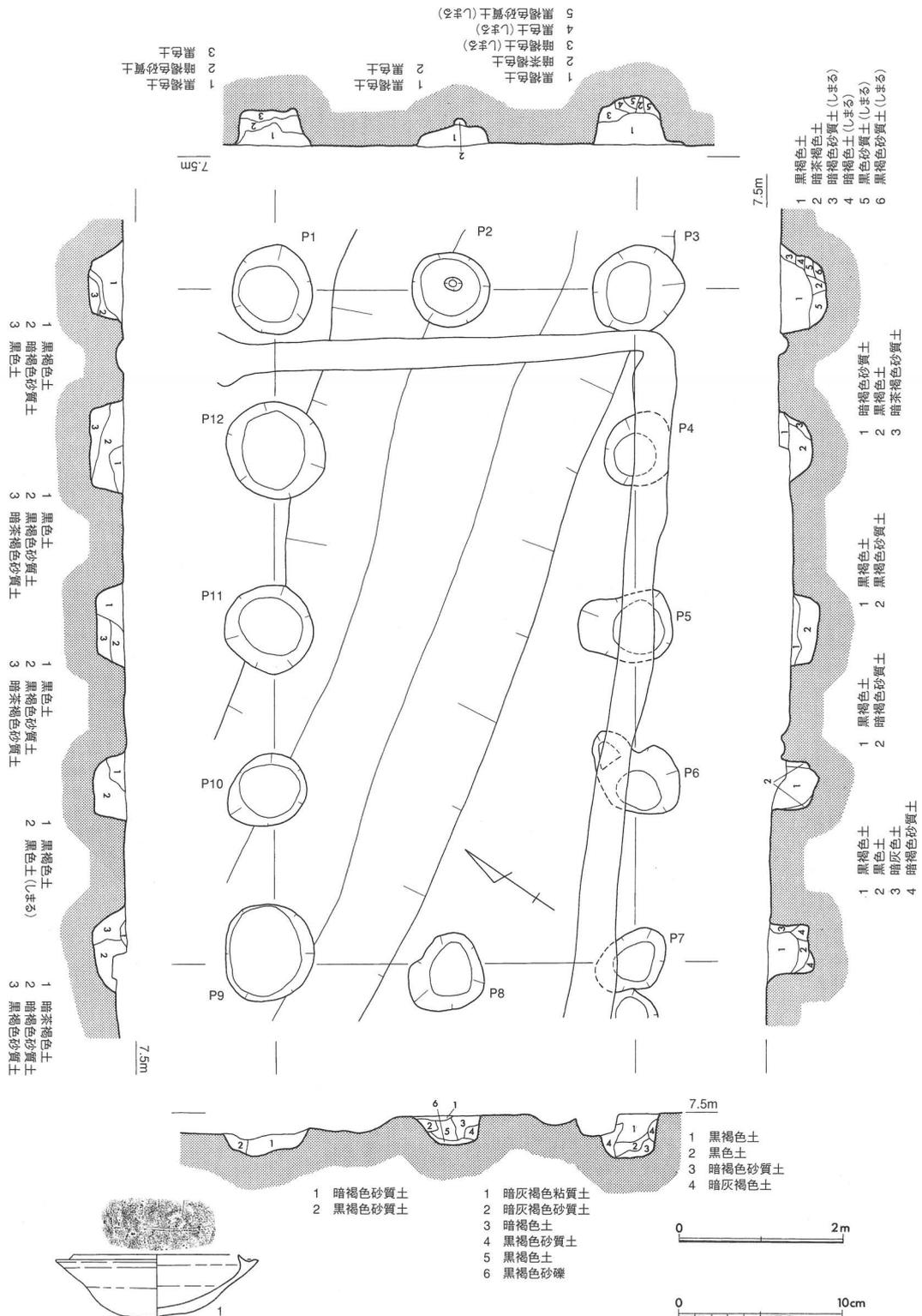
柱間は梁行で220cm (7.3尺)、桁行で205cm (6.8尺) である。柱穴は平面円形で、規模は上端径64~120cmである。

柱穴内の堆積状況は様々だが、P2・3では明瞭な柱痕が確認された。また、これらの他にP6・7・11等でも柱痕と見られる立ち上がりを検出している。P

2・3は1層下面が抜き取りの掘削面と考えられる。

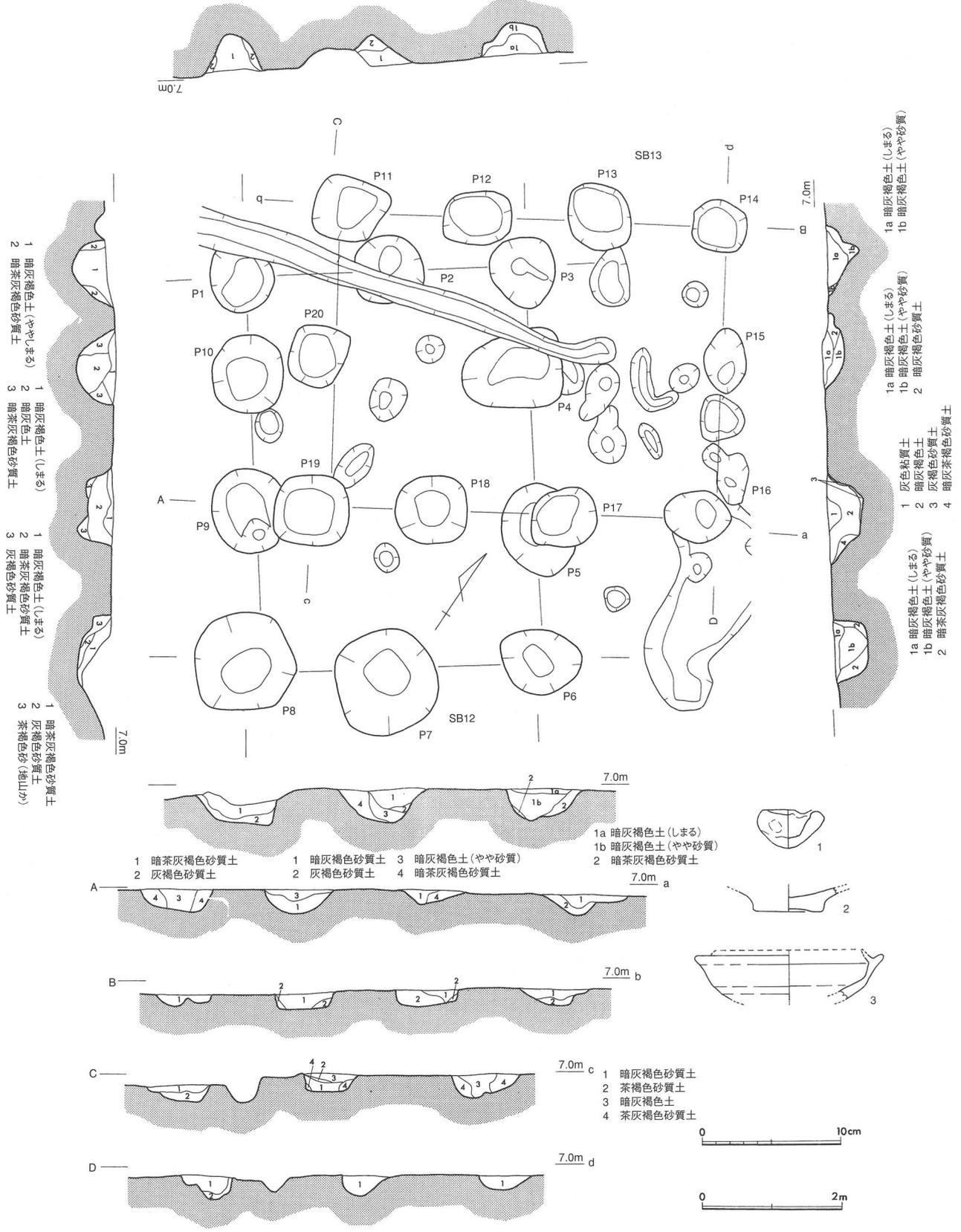
出土遺物の1は須恵器の坏身で、P3の1層から出土したもので比較的残りも良いものである。口径10cm、最大径12.5cmと小形化したもので、内面に「一」状のヘラ記号が見られる。底部は回転へら切り後未調整のものである。その他、須恵器の坏蓋、大甕体部、土師器甕等の小片が出土しているが図示できるものではなかった。

抜き取り痕から出土した1は、底部調整や、これに対応する蓋の口径が11cm前後と考えられるこ



第78図 SB11、出土遺物実測図 (1 : 80、遺物 1 : 4)

1 暗灰褐色土(しまる) 2 暗茶灰褐色砂質土
 1 暗灰褐色土(やや砂質) 2 暗茶灰褐色砂質土
 1 暗灰褐色土(しまる) 2 暗茶灰褐色砂質土



第79図 SB12・13、出土遺物実測図 (1:80、遺物1:4)

とから、出雲5～6期に該当すると考えられる。建物の上限は、7世紀の第1～第3四半期頃と考えられる。

SB12・13 (第79図)

調査区北端部に位置する側柱建物で、2棟が切り合うかたちで検出した。前後関係は、切り合いからSB12 (P1～10) → SB13 (P11～20) である。ともに2×3間の側柱建物で同規模である。建物の主軸は異なっているが、建て替えの可能性もある。

SB12 建物規模は梁行4.1m、桁行5.5m、床面積22.55㎡で、棟方向はN-35°-Wである。柱穴掘方は平面円形で、規模は上端で径88～144cmである。なお、P7・8は調査年度がまたがったためかなり崩れた状況となっている。柱間は、梁行で2.0m (6.7尺)、桁行で1.89m (6.3尺) である。

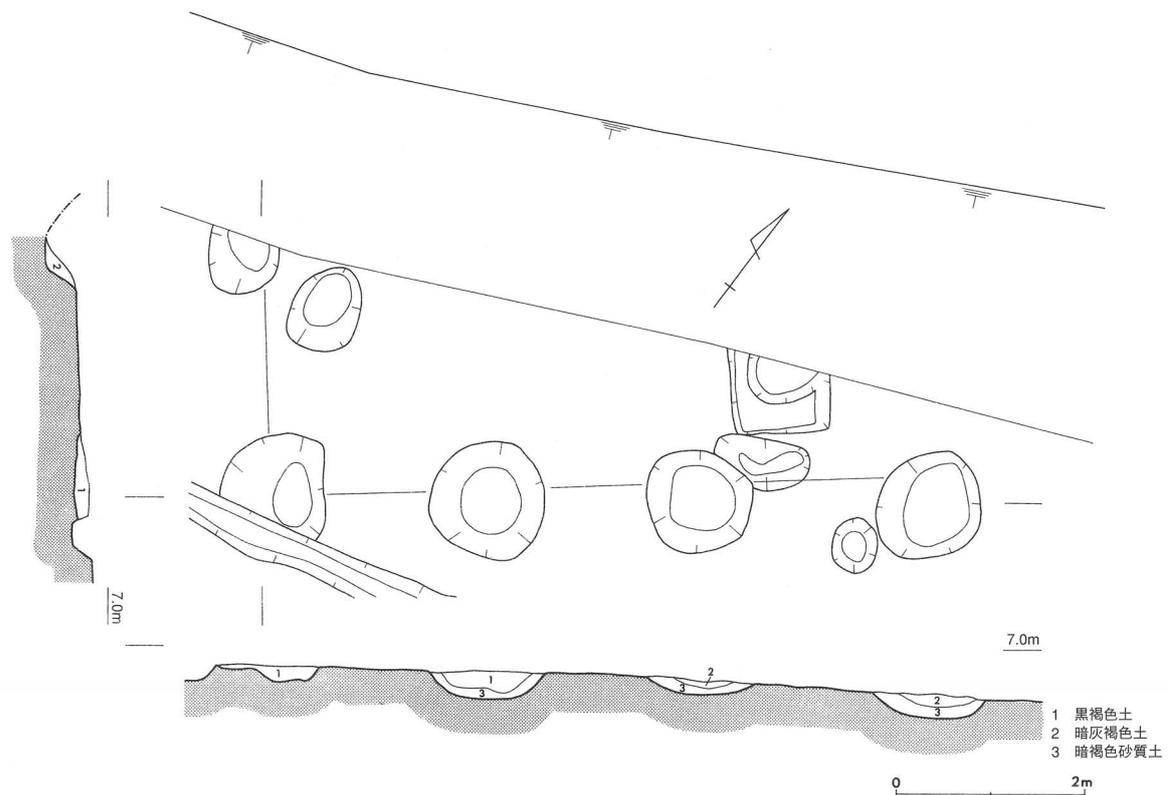
柱穴内には暗灰褐色系の土砂が認められるが、柱痕や抜取り痕は明確ではない。

出土遺物としてP6から出土した1の手捏土器があるほか、実測には至らなかったが須恵器坏蓋の小片、土師器小片などがある。蓋は回転へら削りが施される。

SB13 建物規模は梁行4.3m、桁行5.6m、床面積24.08㎡で、棟方向はN-58°-Eである。柱穴掘方は平面不整隅丸方形で、規模は上端で長軸長80～104cm、短軸長72～96cmである。柱間は梁行で2.12m (7尺)、桁行で1.86 (6.3尺) mである。

埋土は、SB12よりもやや砂質で、微妙に異なる。

遺物はP17から2の弥生時代前期の壺、3の須恵器坏身が検出されたほか、土師器小片が出土している。2は底部外面に「×」の線刻が認められる。3の底部調整は不明である。

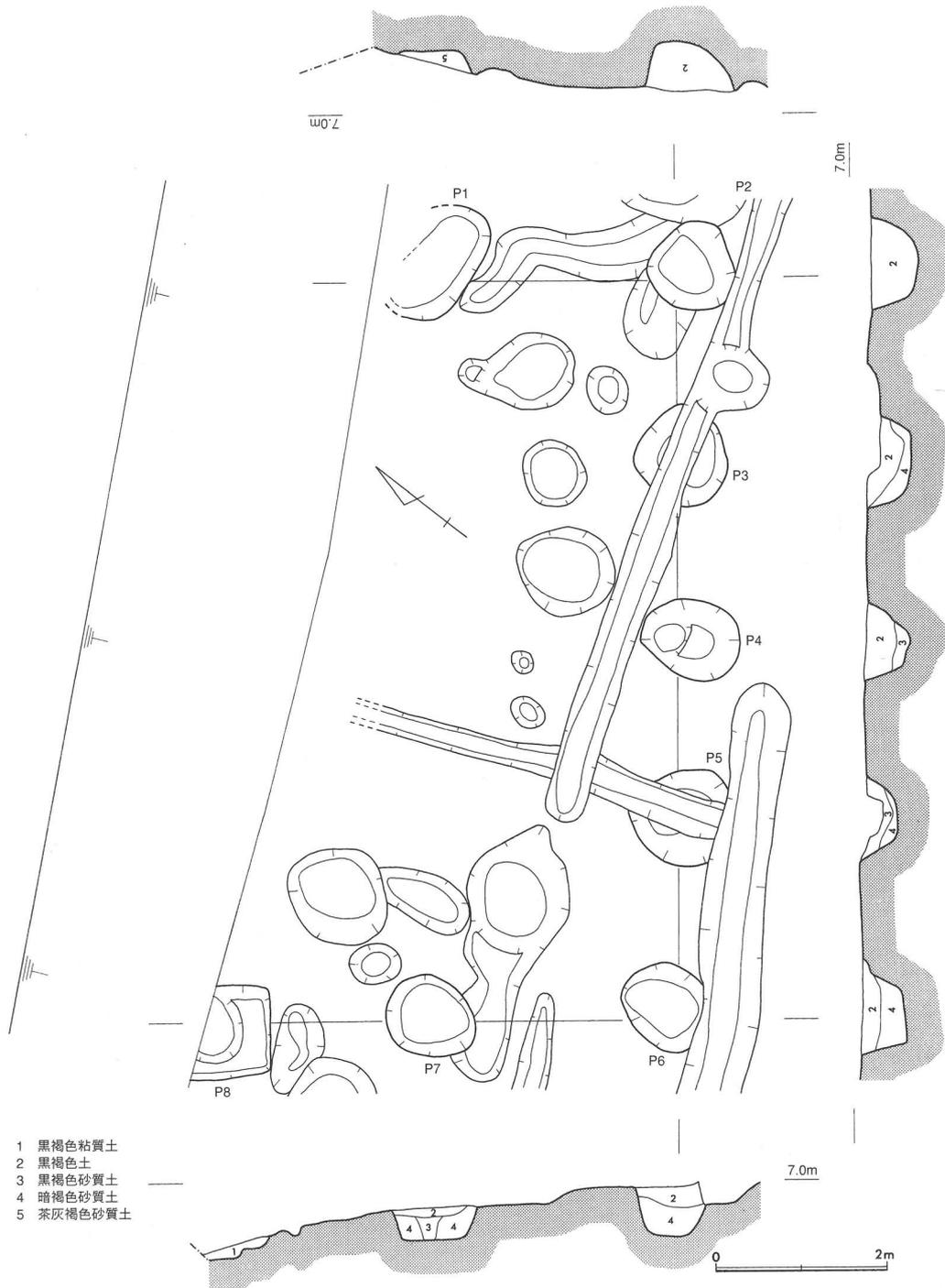


第80図 SB14実測図 (1:80)

SB14・15 (第80・81図)

SB10の北側に位置する2棟の側柱建物で、部分的に重複する。いずれの建物も半分は調査区の壁にかかるため全容は不明である。また、調査区壁際は近世の溝状落込みによって攪乱され、建物の柱穴も上部が削平されている状況であった。建物の棟方向は不明だが、便宜上、現状の長軸方向を桁行とする。

SB14 1間以上×3間以上の構造で、建物の現状の長軸はN-53°-Eである。規模は梁行2.7m以上、桁行7.2m以上で、床面積は19.44㎡以上となる。柱間は、桁行で2.4m(8尺)である。柱穴掘方は平面円形で、上端で80~120cmである。柱穴の残りは悪いが、土師器小片が多



第81図 SB15実測図 (1:80)

数出土している。

SB15 2間以上×4間で、建物の長軸はN-52°-Eである。規模は梁行5.4m以上、桁行8.5mで、床面積は46.17㎡である。柱間は、梁行で2.8m(9.3尺)、桁行で2.16m(7.2尺)である。柱穴掘方は基本的には平面円形だが、P1やP8等のように長円形・方形も見られる。柱穴規模は上端で径96~152cmで、P7では柱痕も確認されたが、その他では単純な堆積しか認められなかった。

出土遺物は、図示できなかったが、焼成不良の須恵器大甕の破片、土師器小片がある。

SB16 (第82図)

SB10・11の中間地点に位置する布掘建物である。建物は、隣り合うG区でもその延長部分が検出された(図版11)。本来はまとめて報告すべきだが、調査区がまたがるため今回はH区部分の状況のみ記載し、遺構全体の検討・評価はG区の報告で併せて行う。

建物は、梁行・桁行ともに溝の中に柱穴を配置したもので、柱穴の方が深い構造である。図版からも分かるように建物の長軸方向は北西-南東で、棟方向はN-50°-Eである。梁行は4間(8.5m)で、柱間は梁行で2.13m(7.1尺)、桁行で2.0m(6.6尺)である。柱穴の掘方は溝に規制され、隅丸長方形または長円形を呈し、規模は上端で短軸長110~128cm、長軸長104~200cm、検出面からの深さ72~96cmを測る。

検出時は溝と認識していたため、溝との切り合いを示す柱穴の上半の土層が欠けるが、P2では柱穴が溝に切られていないことから、溝を浅く掘り込んだ後に柱穴を割り付けていったものと考えられる。地中梁構造を有していた可能性もある⁽¹⁶⁾。

出土遺物は、1の赤彩土師器の坏のほか、古式土師器の小片が出土している。

建物は後述するSK100・101を切っていることから、出雲4期以降と考えられる。

SB17・18 (第83図)

調査区南側の柱穴が密集する区域に位置する、2棟の建物で、切り合いはないが重複する。建物の西側はSD58のため不明である。柱穴はいずれも平面隅丸長方形または長円形で、棟方向に並行するように配置され、梁間が広いのが特徴である。柱穴内には、粘土ブロックを多く含む暗灰色粘質土が認められた。周囲に同様の柱穴が多く、2棟の建物に関わる柱穴が他にも存在する可能性も十分考えられる。

SB17 1×4間以上の側柱建物と考えられる。規模は梁行4.5m、桁行10m以上(柱間256cm)、床面積45㎡以上で、棟方向はN-51°-Eである。柱穴の掘方規模は、上端で長軸長64~144cm、短軸長52~72cm、深さ48~72cmである。

出土遺物は(第85図)、1が糸切り底の土師器で15世紀代の所産と考えられる。2は明代の輸入青磁で、見込みにへら彫りによる草花文が施される。

土師器・青磁ともに時期的に共伴するものであるから、建物は概ね15世紀後半~16世紀前半頃と考えられる。

SB18 1×3間以上の側柱建物と考えられる。規模は梁行2.6m、桁行5.8m以上(柱間193cm)、床面積15.08㎡以上で、棟方向はN-60°-Eである。柱穴の規模は、上端で長軸長136~112cm、

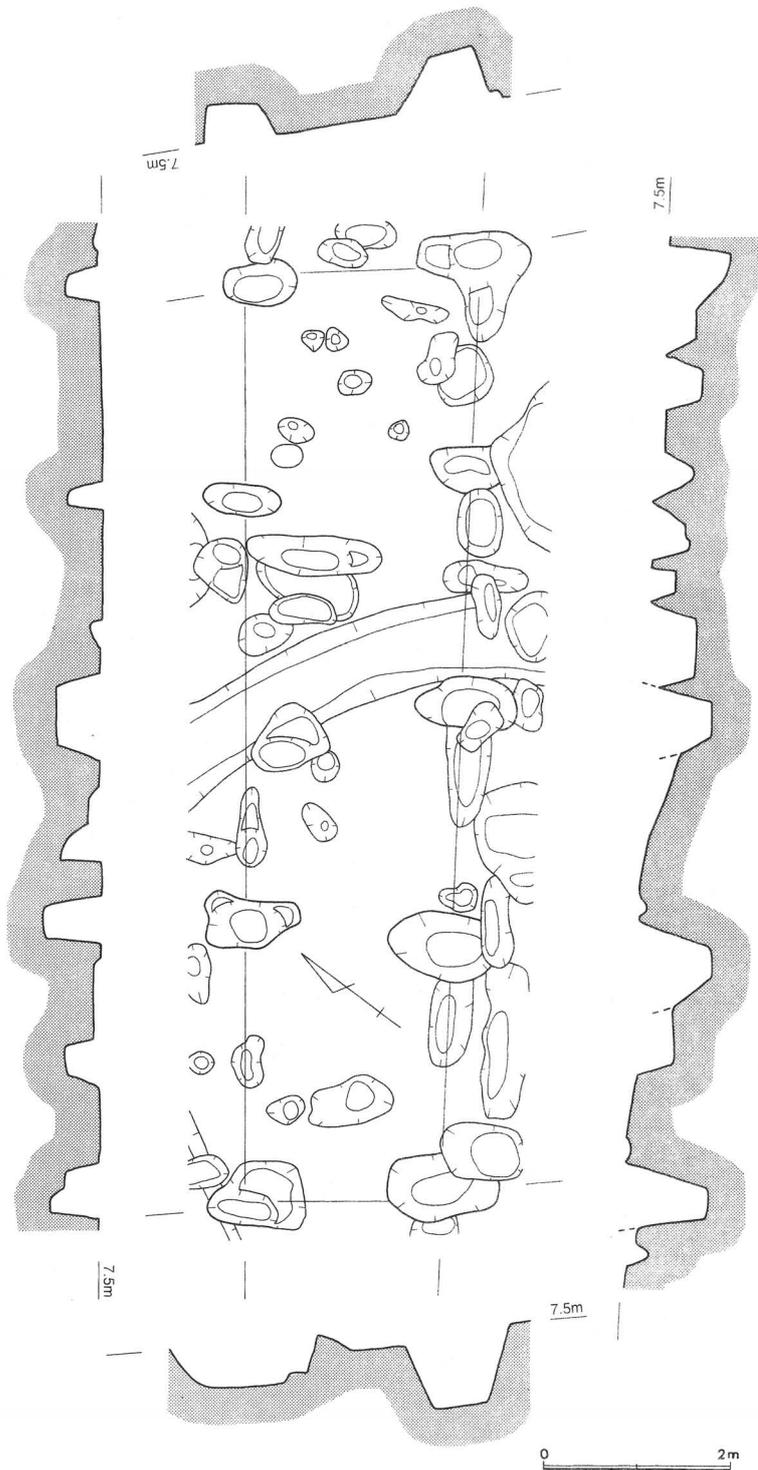


第83図 SB17・18実測図 (1:80)

短軸長40~64cm、深さ40~72cmである。

出土遺物は、時期判断に足るものは無いが、糸切り底の土師器小片が多数出土している。

柱穴掘方・建物構造等の特徴から、SB17やHI区の建物（SB28~30）と同様に中世末~近世の建物と考えられる。



第84図 SB19実測図 (1:80)

SB19 (第84図)

SB17・18の南側に隣接する1×4間の長屋風の側柱建物である。柱穴の形態や建物が細長い点ではSB18と同様だが、柱穴の長軸が建物の棟方向と直交配置となる点では異なっている。

規模は梁行2.1~2.5m、桁行9.9(柱間247cm)、床面積22.77㎡である。棟方向はN-55°-Eで、SB17とはほぼ平行する位置関係である。柱穴の掘方規模は、上端で長軸長80~120cm、短軸長32~72cm、深さ32~96cmである。

柱穴埋土は粘土ブロックを多く含む暗灰色粘質土である。

出土遺物は(第85図)、3の備前IV期のすり鉢があるほか、糸切り底の土師器小片がある。

建物は15世紀以降のものとして推定される。

SB20 (第86図)

SB19の北側に位置する建物で、棟方向はN-35°-Wである。基本的には1×3間の側柱であるが、

南西側に主軸を同じくする柱穴列が認められることから、庇付きの建物になる可能性が高い。規模は庇を含めると梁行4.7（本体3.76m）m、桁行6.6mで、床面積31.02㎡である。

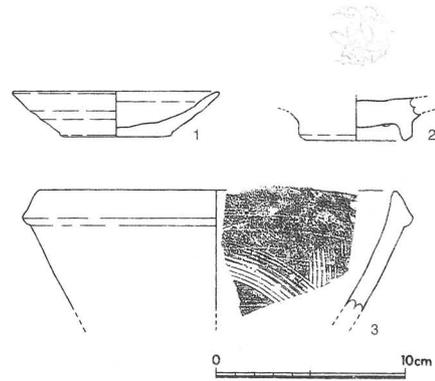
柱間は桁行で2.2mである。柱穴の形態・配置はSB18と同様である。柱穴の掘方規模は、上端で長軸長88～120cm、短軸長32～56cmである。

柱穴埋土は、粘土ブロックを多く含む暗灰色粘質土であった。

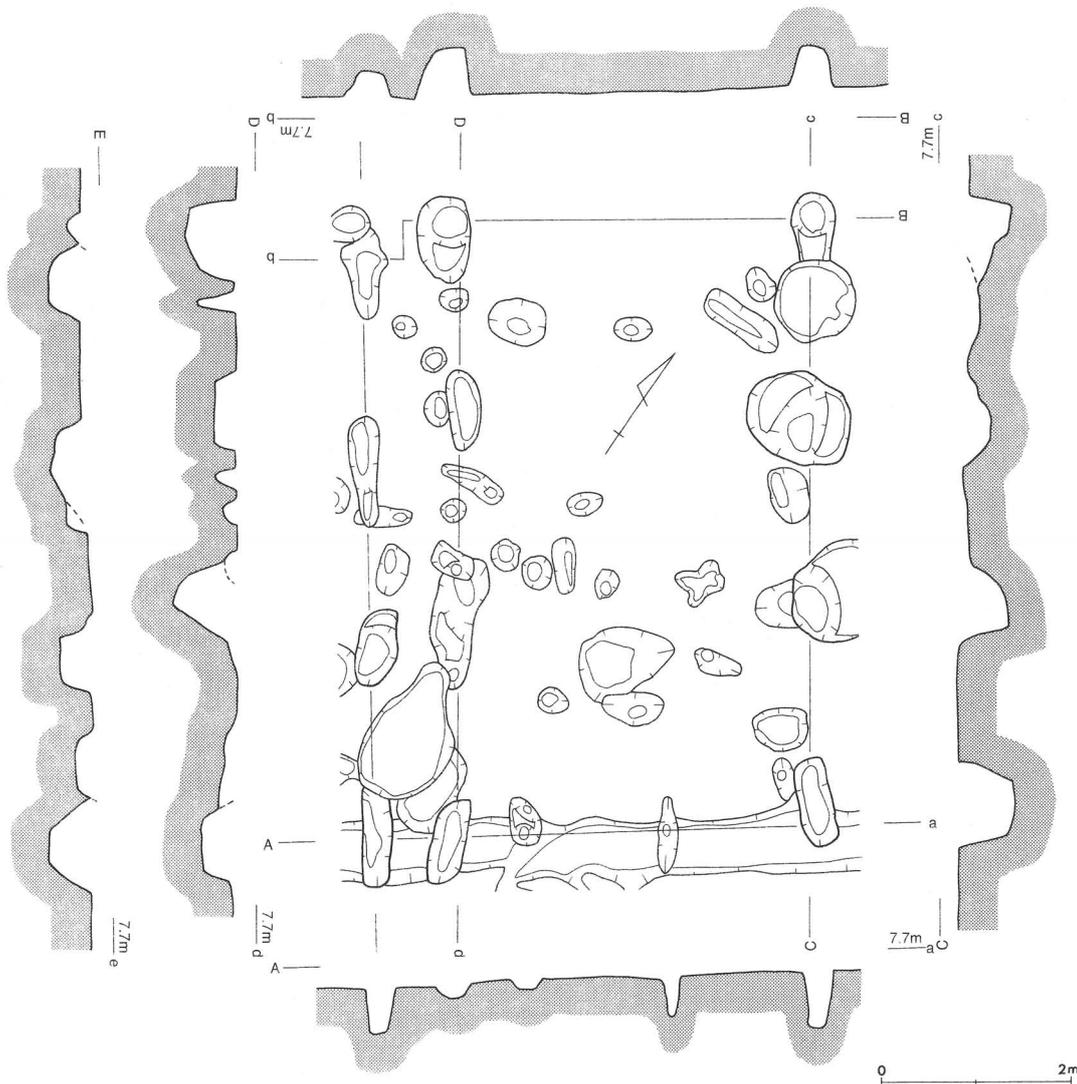
遺物は、糸切り底の土師器小片が出土している。

SB21（第87図）

調査区南東端部に位置する。棟方向はN-55°-Eで、SB17・19と同じ向きに配置される。西側はSD26と切り合うが、前後関係を平面的に確認することはできなかった。現状で2×4間以上の規模を持つ側柱建物で、棟持柱筋にP1・2が建物内部を区画するように配置されている。規模は、梁行6.4m、桁行8.5m以上で、床面積54.4



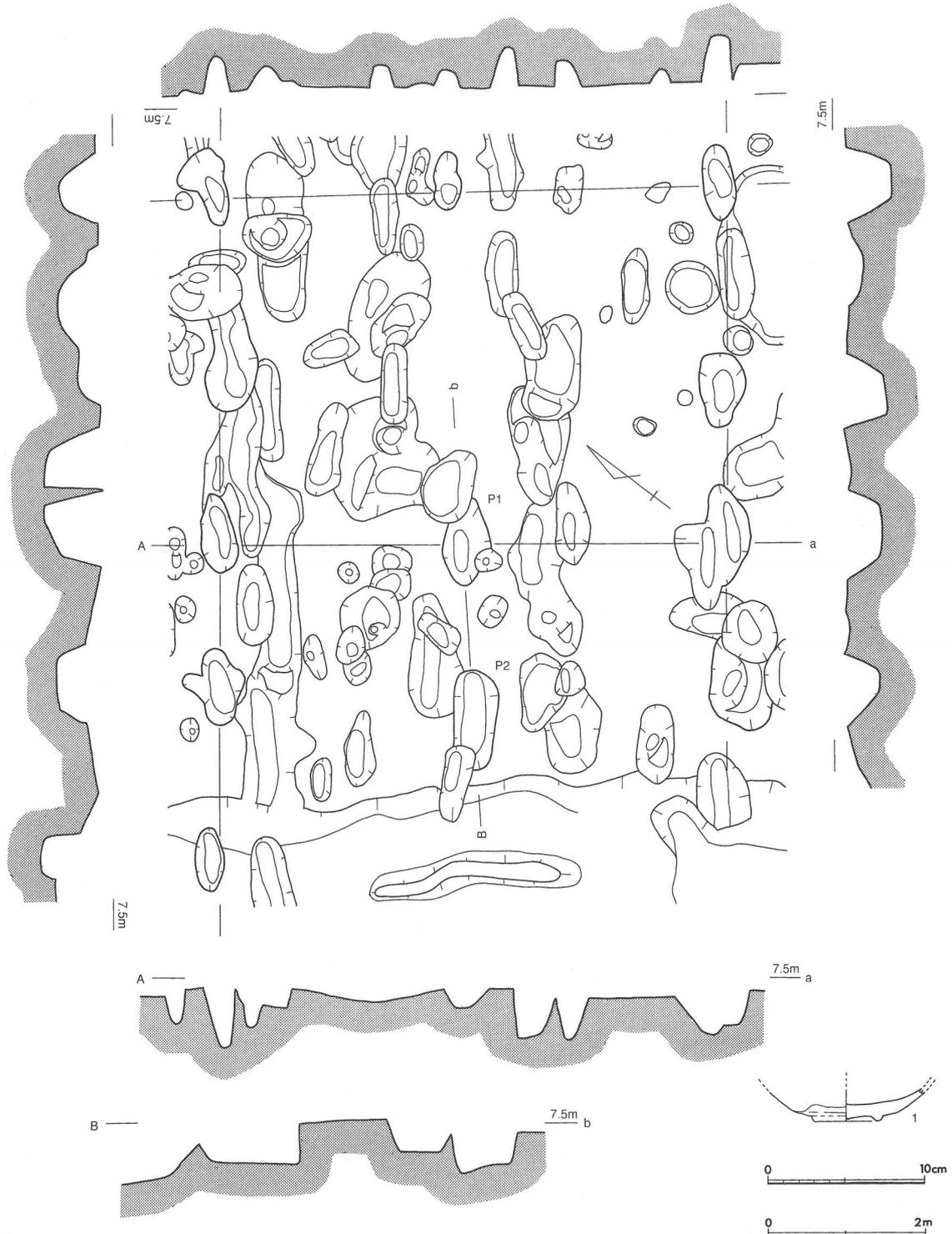
第85図 SB17・19出土遺物実測図（1：4）



第86図 SB20実測図（1：80）

m²以上と考えられる。柱間は梁行で3.2m、桁行で2.12mである。柱穴は、平面隅丸長方形または不整長円形で、建物長軸に平行するように配置される。規模は長軸長96~128cm、短軸長32~56cm、深さ40~80cmである。柱穴埋土は、粘土ブロックを多く含む暗灰色粘質土であった。

出土遺物は淡黄色灰釉の胎土目唐津皿で、16世紀末~17世紀初頭のものである。



第87図 SB21、出土遺物実測図 (1 : 80、遺物 1 : 4)

SB22 (第88図)

SB21と部分的に重複する、1×5間の長屋風の側柱建物で、棟方向はN-53°-Eである。建物規模は、梁行4m、桁行11m以上、床面積44m²である。柱間は桁行で2.2mで、柱穴形態・規模はSB17・18等と同様である。

柱穴の掘方は上端で長軸長64~128cm、短軸長32~60cm、深さ32~48cmである。

柱穴埋土は粘土ブロックを多く含む暗灰色粘質土である。

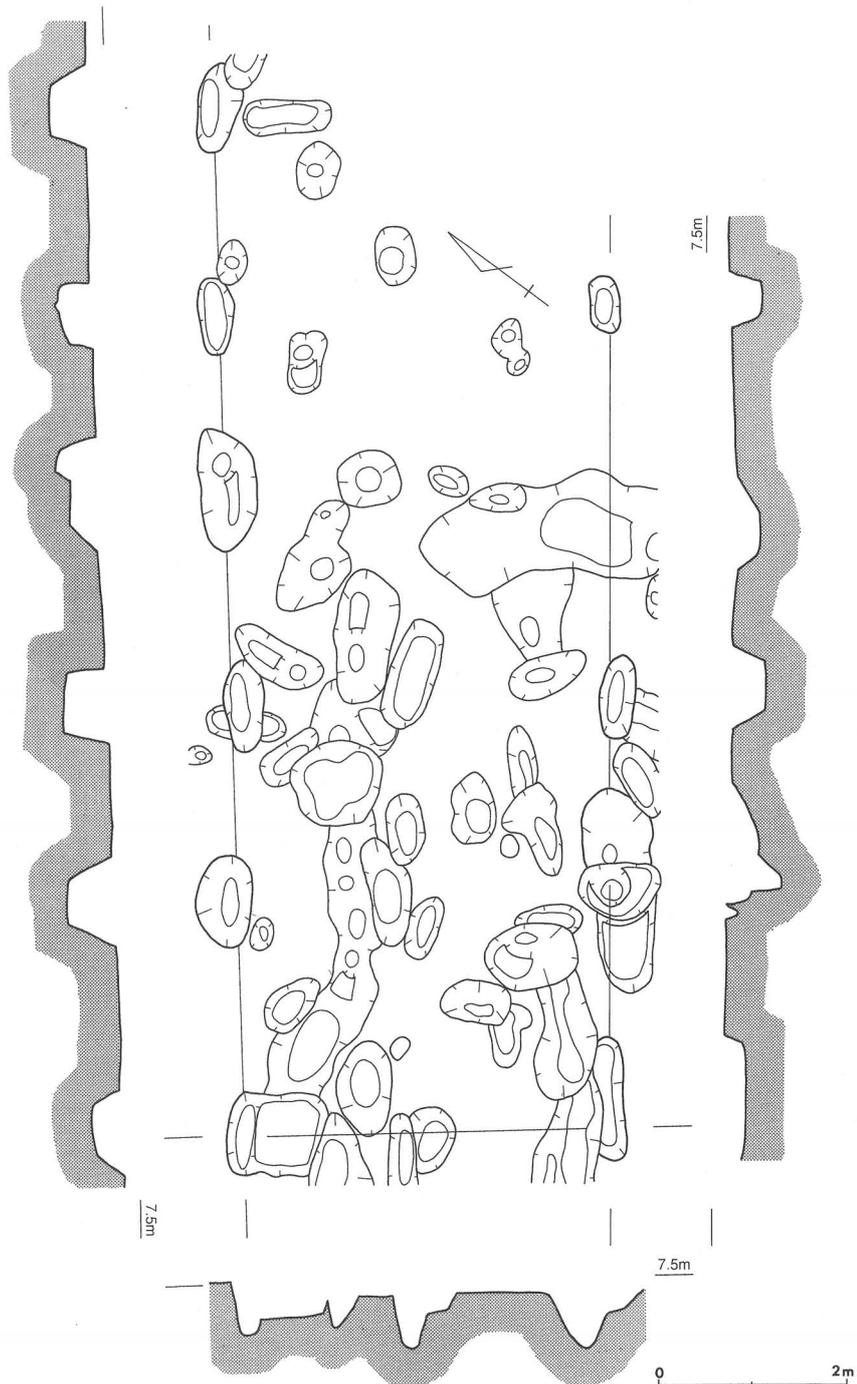
遺物は土師器小片以外無いが、建物の時期は、埋土・建物構造・柱穴形態等から近世以降と考えられる。

SB23 (第89図)

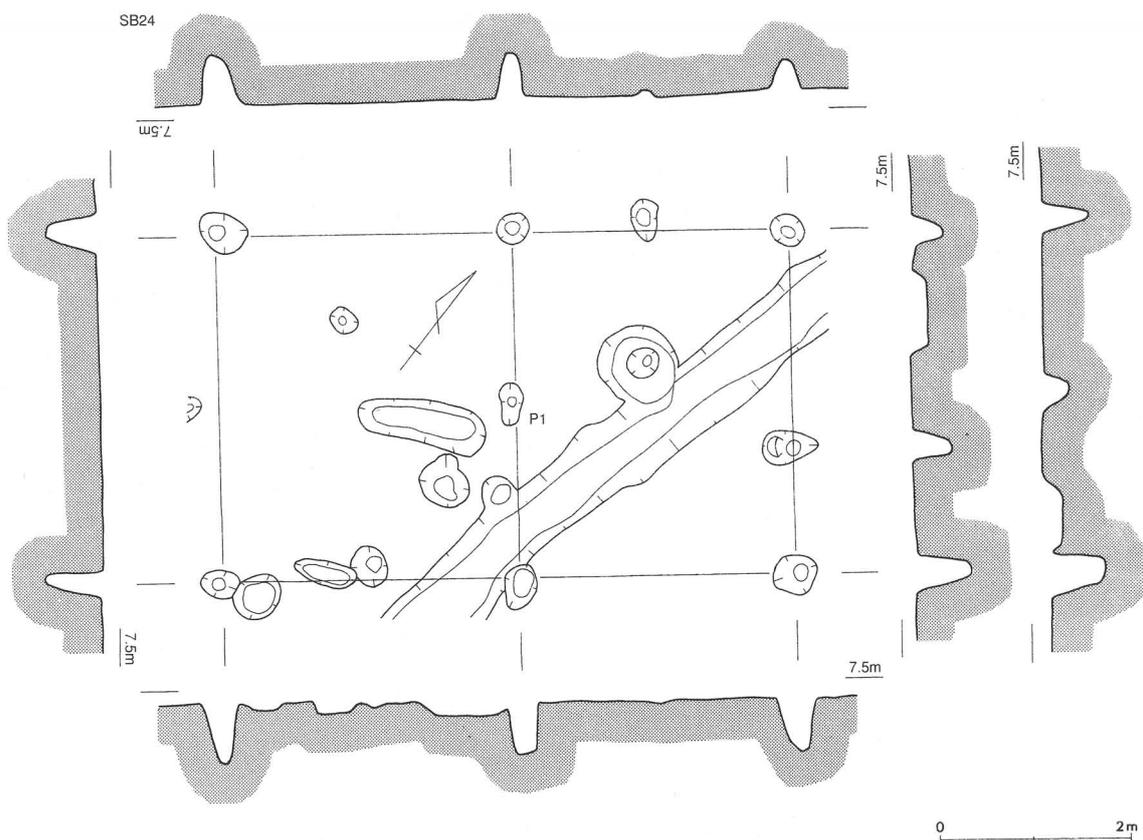
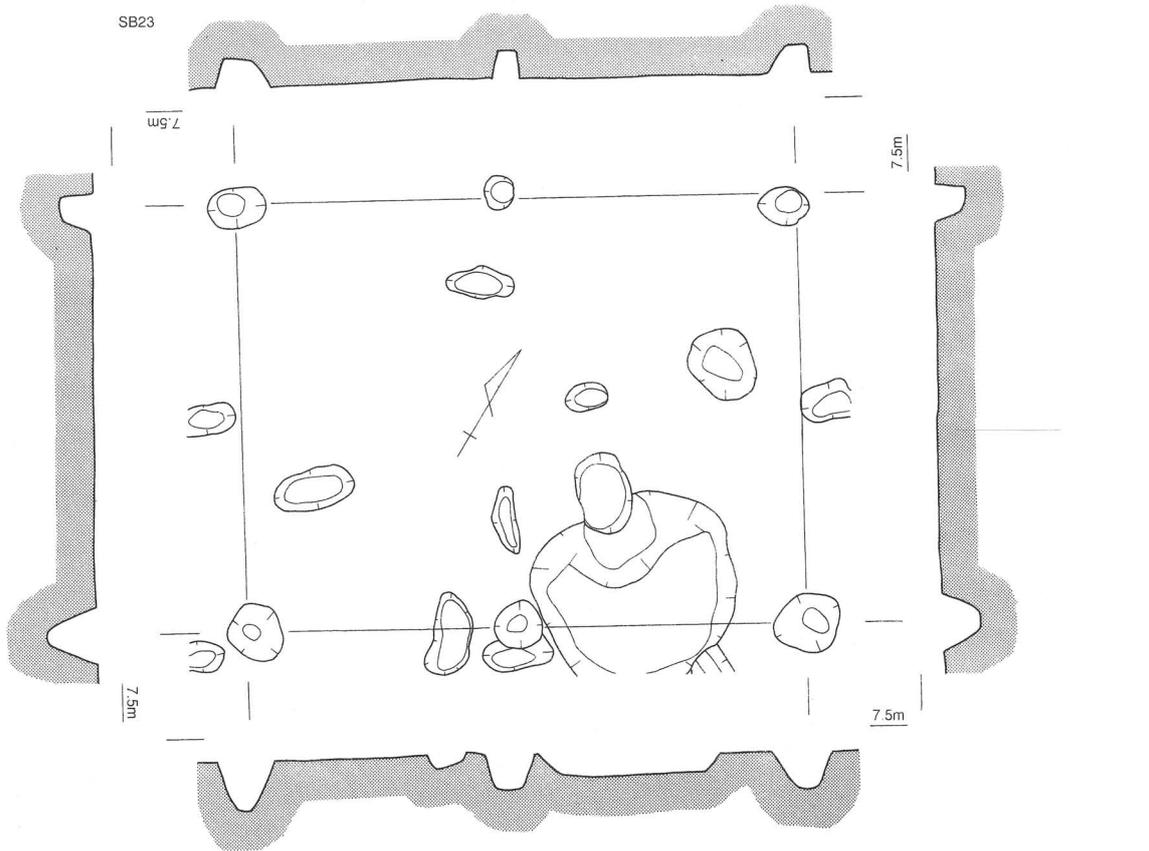
SB22と重複する1×2間の側柱建物である。規模は梁行4.5m、桁行6.0m(柱間3.0m)、床面積27m²で、棟方向はN-55°-Eである。掘方は平面不整形円形を呈し、規模は上端で32~72cmである。柱穴埋土は黒褐色系の土砂で、遺物は出土していない。

SB24 (第89図)

SB22の北側に位置する1×2間の側柱建物で、棟方向はN-51°-Eである。建物内部には他の柱穴よりやや浅いP1があり、柱筋に合うことから建物に伴うものと推定される。規模は梁行3.6m、桁行6.1m(柱間3.05m)、



第88図 SB22実測図 (1:80)



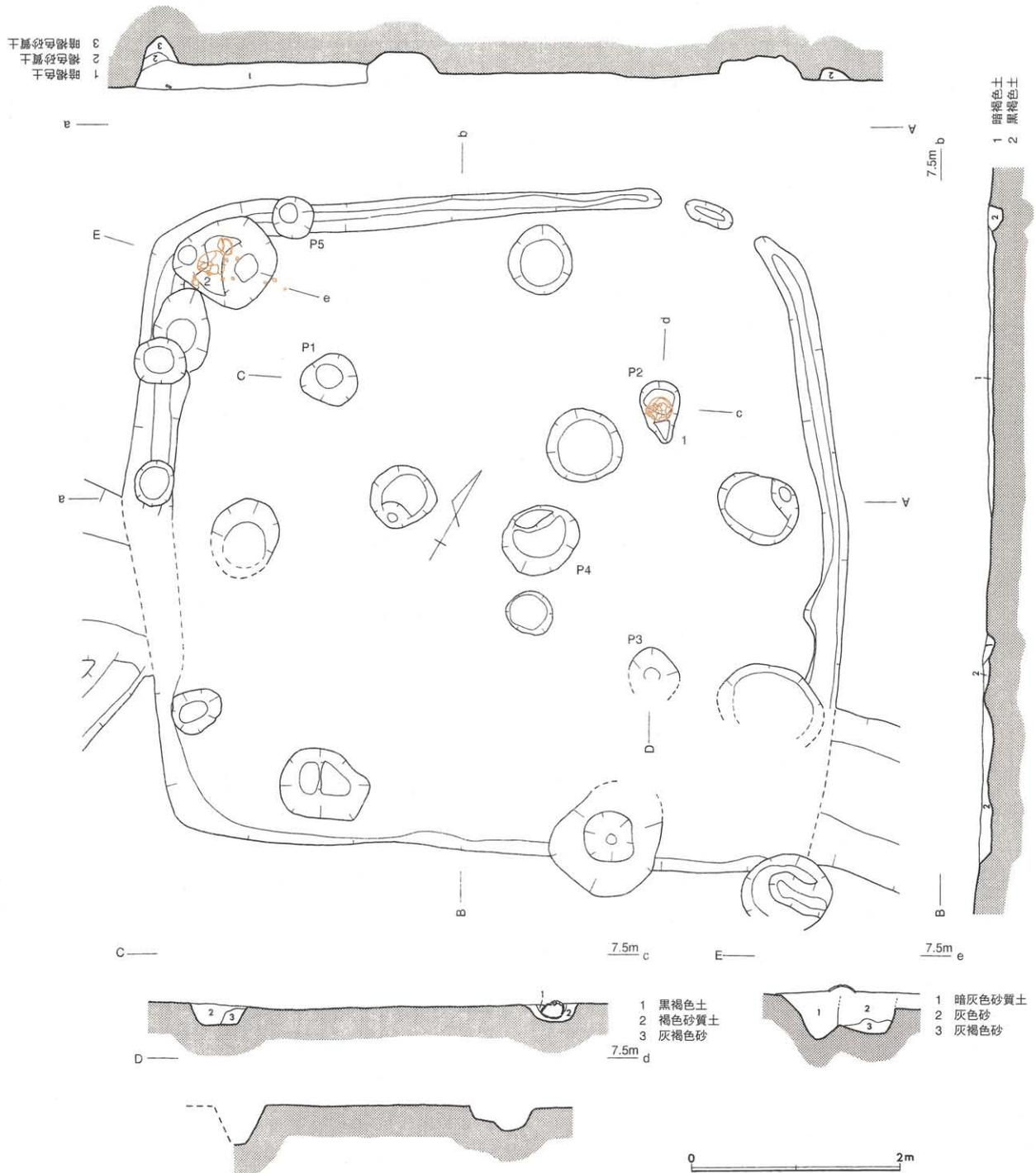
第89図 SB23・24実測図 (1 : 80)

床面積21.96m²である。柱穴は平面円形で、規模は上端で40cm前後、深さ32~64cmである。柱穴埋土は黒褐色系の土砂で、出土遺物はない。

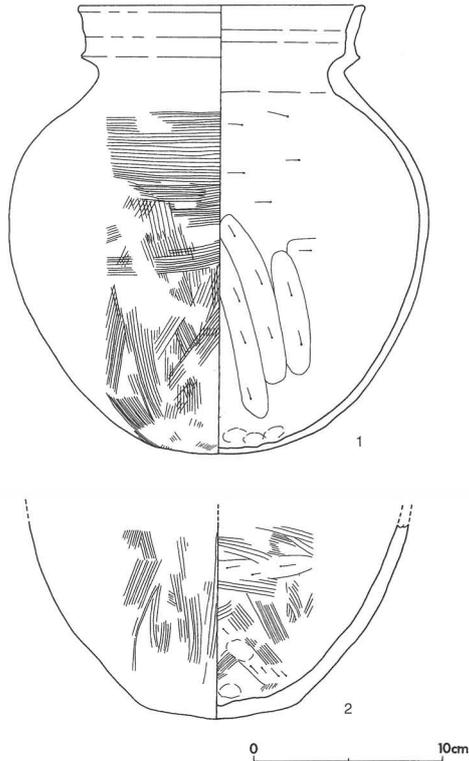
2. 竪穴建物

S101 (第90図)

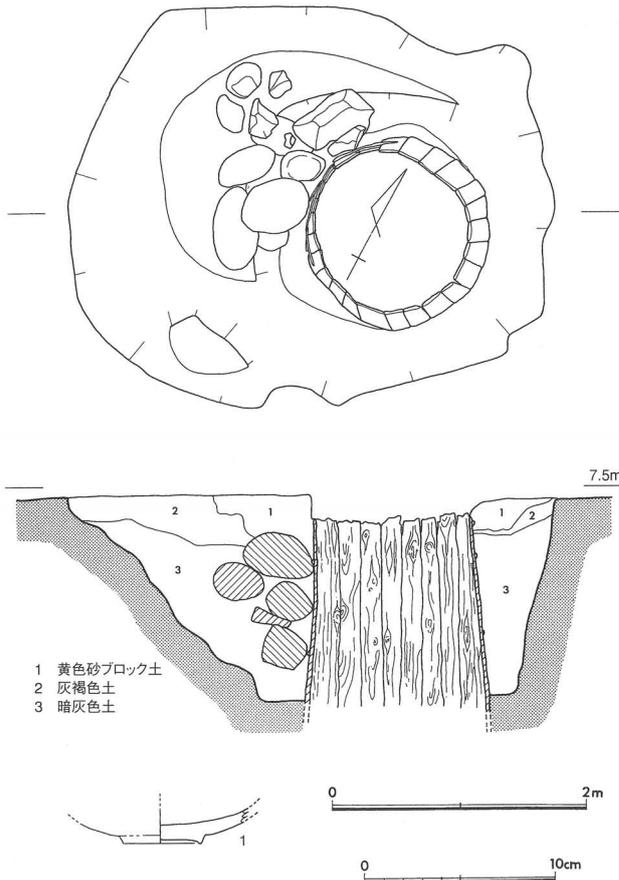
調査区東側に位置する、隅丸方形の竪穴建物である。本調査区で唯一のもので、SB04・05



第90図 S101実測図 (1:60)



第91図 SI01出土遺物実測図 (1:4)



第92図 SE04、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)

に切られるかたちで検出した。上部はかなり削平され、検出時で既にほぼ床面であった。規模は6.4×7.0mで、壁体溝が部分的に認められた。明確な中央穴は検出されなかったが、P4がその可能性もある。P1～3は支柱穴で、P3と西隅のP5から遺物を検出しており、この内P3からは柱穴内に落ち込んだ状態で出土している。4本柱と推定されるが、残る柱穴はSD28の埋土上で検出できなかった。このほか、床面直上で完形の低脚坏が1点出土したが、盗難に遭い資料として提示できない。

遺物は(第91図)、1・2ともに底部に平底の痕跡を残す弥生時代終末期の甕で、草田6期に相当する。

3. 井戸 (第92～98)

SE04 (第92図)

調査区の南端部に位置する、長径3.9m、短径3.1mの平面長円形土坑内に桶側を設けた井戸で、深さ1.65m以上を測る。掘方は西側がスロープ状につく

られ、20～50cmの角礫・円礫が据え置かれていた。石が本来の位置を保っているかどうか不明だが、堆積状況からは攪乱された痕跡は認められない。取水部の最下面は、湧水が著しく確認できなかった。

遺物は唐津の、灰緑色の陶器皿が出土しており、16世紀末の所産と考えられる。

SE05 (第93図)

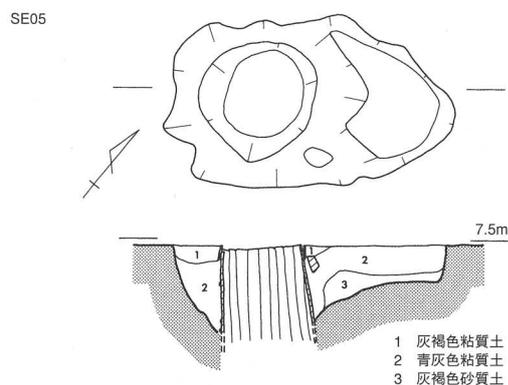
SE04の南側に位置し、SE07を切り込んでつくられていた。長軸2.28m、短軸1.32m、深さ0.72m以上の平面不整長円形の掘方内に桶側を埋設した井戸で、北東側にはテラス状の段を設ける。検出面以下の遺存状態は良好で、堆積状況からも攪乱を受けた痕跡が認められない点は、前述のSE04と同様である。このことから、テラスは構築時の足場のな作業面であった可能性が考えられる。取水部の最下面は、湧水が激しく確認できな

かった。

出土遺物は実測に値するものはないが、近世以降の陶磁器小片が出土している。

SE06 (第93図)

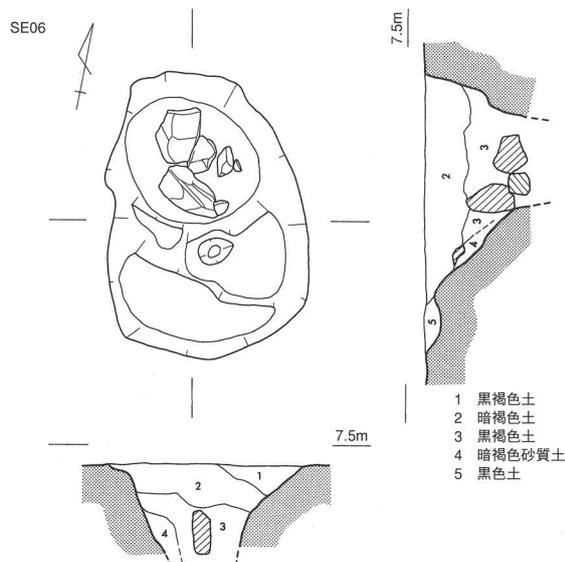
調査区南端部に位置する。長軸2.28m、短軸1.56m、深さ0.84m以上の平面不整長円形の掘方北側は深く落ち込み、そこから10~50cm大の角礫を検出した。石は整然と組んだ状態ではなく、また、堆積状況からも攪乱面(2層下面)が観察されたことから元位置を留めてはいないと考えられるが、本来は石組みの井戸であったと推測される。SE04・05に見られる作業面は認められない。取水部は湧水が著しく確認できなかった。遺物は図示できなかったが、糸切り底の土師器、須恵器、土師器の小片が出土している。



SE07 (第93図)

SE05の南側で、これに切られるかたちで検出した石組みの井戸である。平面不整形で、径2.3m、深さ1.1m以上の掘方に、五輪塔の転用材と自然石を組み上げたもので、南東部分は攪乱のためか石組みは欠如している。転用材は地・水輪が確認されたが石材は不明である。

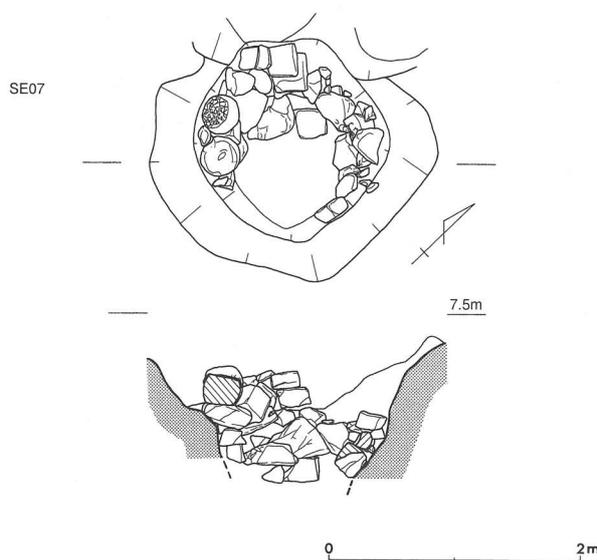
出土遺物は図示できなかったが、糸切り底の土師器、須恵器等の小片がある。



SE10・12 (第94図)

SE06の北側に位置し、SE12をSE10が切るかたちで検出した。SE12は石組みの井戸で、SE10は明確な石組みではないが、掘方構造と堆積状況から井戸とした。

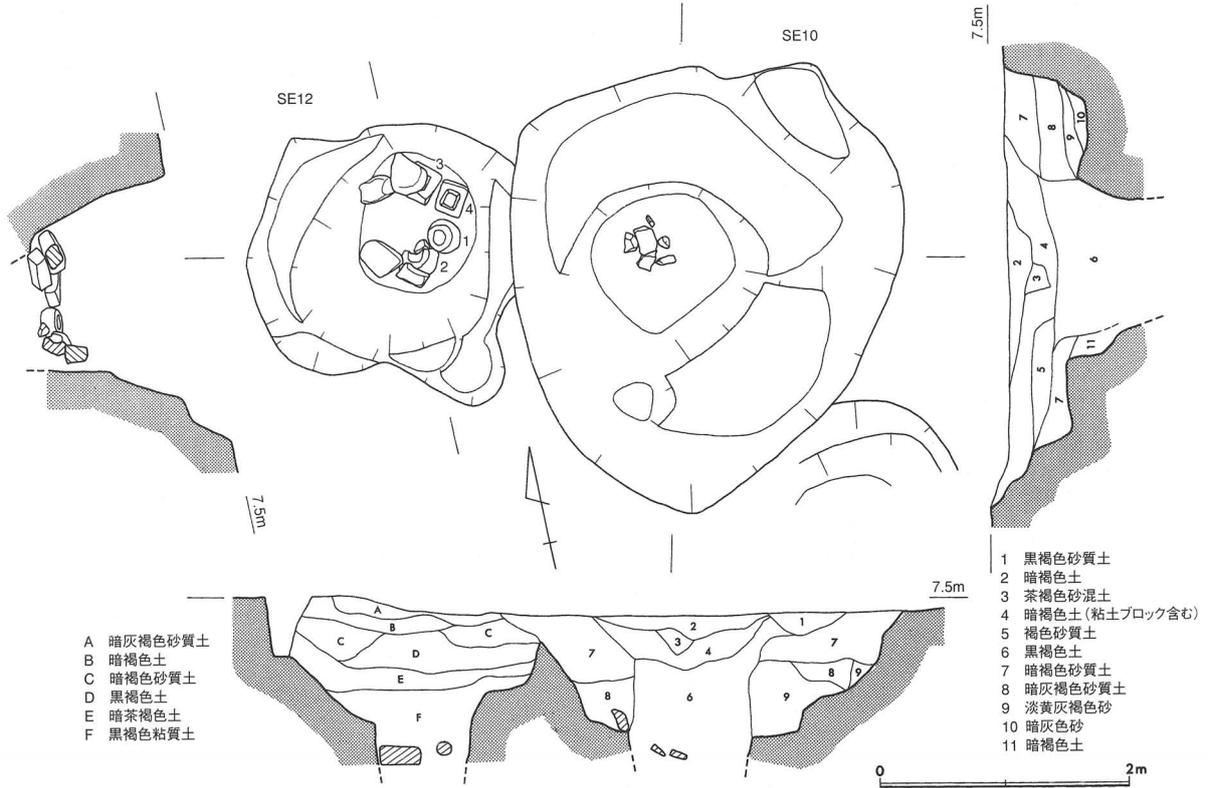
SE10 平面不整形の、長径3.6m、短径3.12m、深さ1.08mの掘方で、中央部は2段掘りとなり、周囲にはテラスが巡る。中央部下層から10~20cm大の礫片が出土しているが、これ以外に部材と考えられるものは確



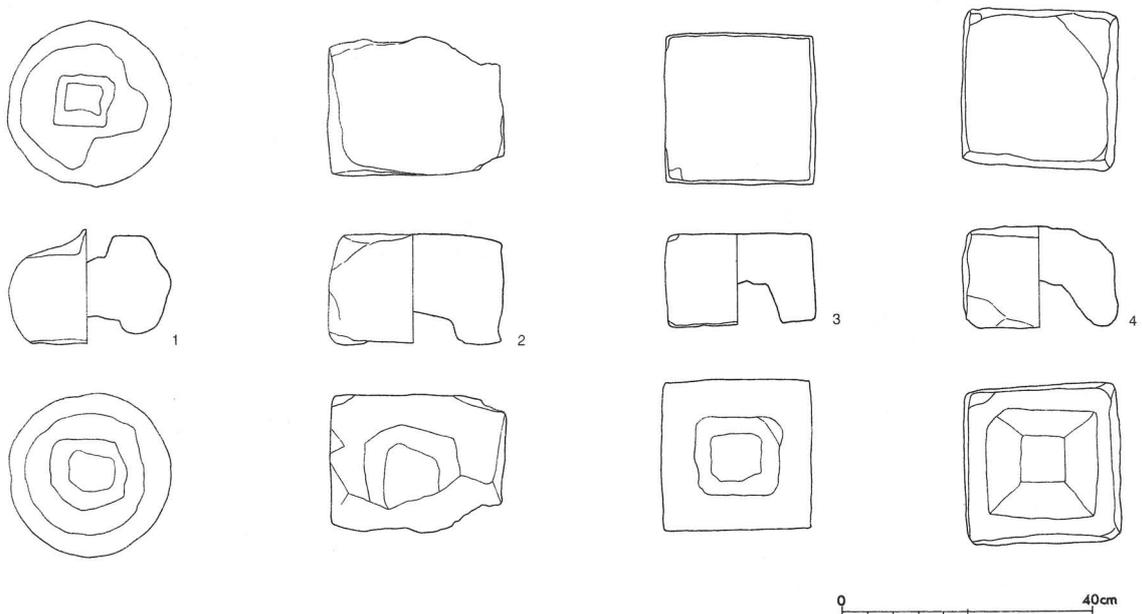
第93図 SE05~07実測図 (1:60)

認められなかった。

堆積状況では、1～5層以外に明らかな攪乱層は認められないので、礫は混入の可能性もあるが、6層は湧水のため詳細に観察できず、攪乱が6層まで達している可能性も否定できない。井側は残



第94図 SE10・12実測図 (1:60)



第95図 SE12出土五輪塔実測図 (1:12)

存しないが、7～9層はその裏込めと考えられる。取水部最下面は湧水のため確認できなかった。

糸切り底の土師器小片多数が出土しているが、図示できるものではない。

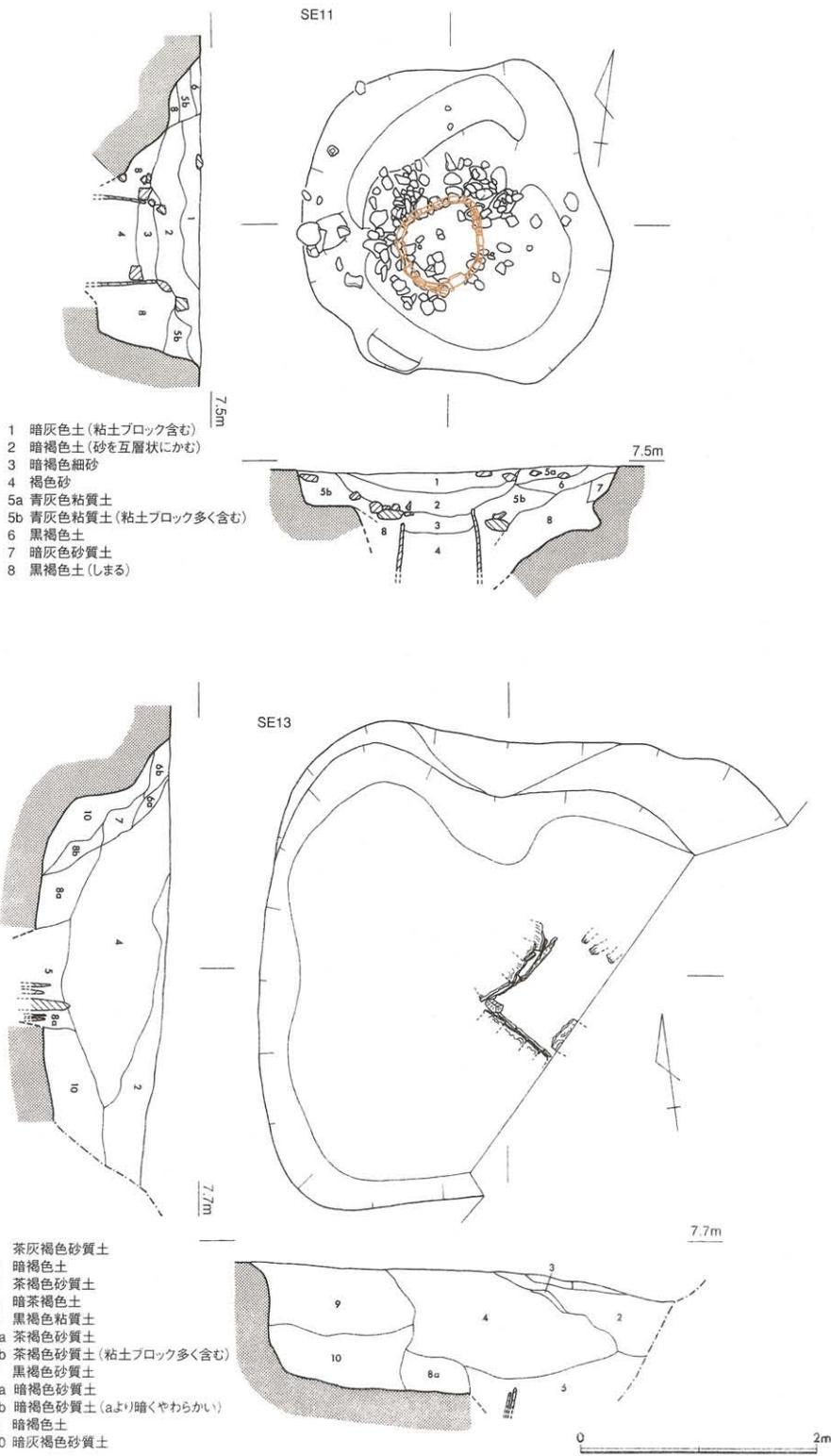
SE12 平面楕円形の、径1.8～2.3m、深さ1.32mの掘方で、その半ばで東西に狭いテラスをつくる。中央部下層から五輪塔の転用材と自然石による石組み井側の最下段が検出され、上部は廃棄時に解体されたと考えられる。西側は攪乱のためか欠如する。井側は、図示した位置より下位では

検出していないので、直下が井筒部になると推測されるが、湧水のため確認できなかった。

堆積状況については、石組みの遺存状況から攪乱面がF層まで及んでいると考えられたが、湧水のため攪乱後の堆積はE層までしか観察できなかった。

転用材は（第95図）、水輪1点、地輪3点である。石材は1が凝灰質砂岩、2が凝灰質シルト岩、3が凝灰岩、4が礫岩でいずれも異なる。

少量ながら遺物が出土している（第97図2～7）。2～5は糸切り底の土師器で、13世紀代のものであろう。6・7は赤彩の鉄鉢形土器と考えられる。その他須恵器小片も出土している。



第96図 SE11・13実測図 (1:60)

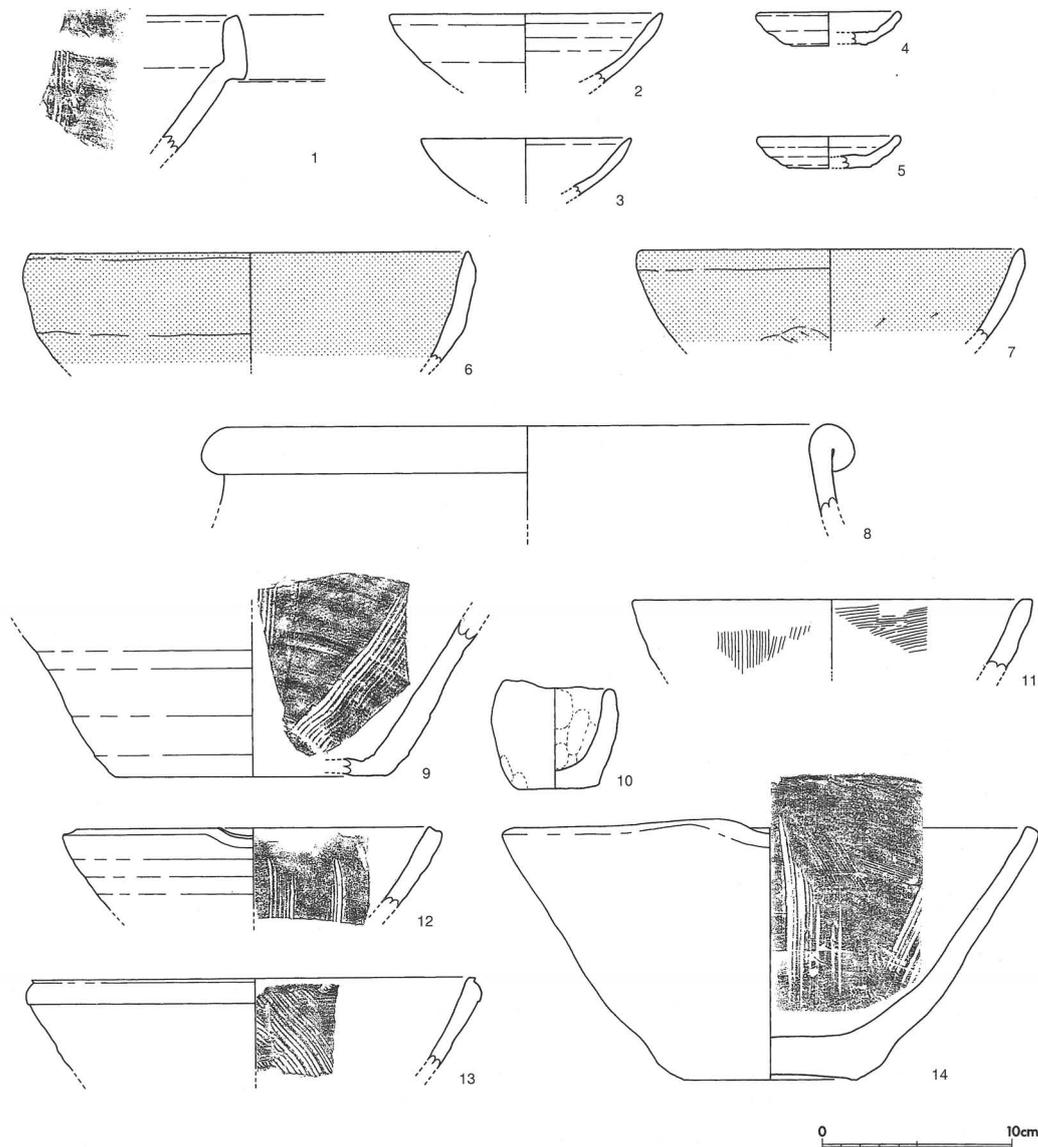
SE11 (第96図)

SE12の西側に位置する。平面不整円形で、径2.5~2.9m、深さ0.96mの掘方内に、桶側を据えて井戸としたものである。検出時から、中央部に5~20cm大の小礫が多量に認められたが、2層下面まで除去したところで、礫は桶側の周囲に元位置を保った状態で見られるようになった。堆積状況が示す攪乱面もこの状況を反映しており、桶側も2層下面以下から残存する状況であった。

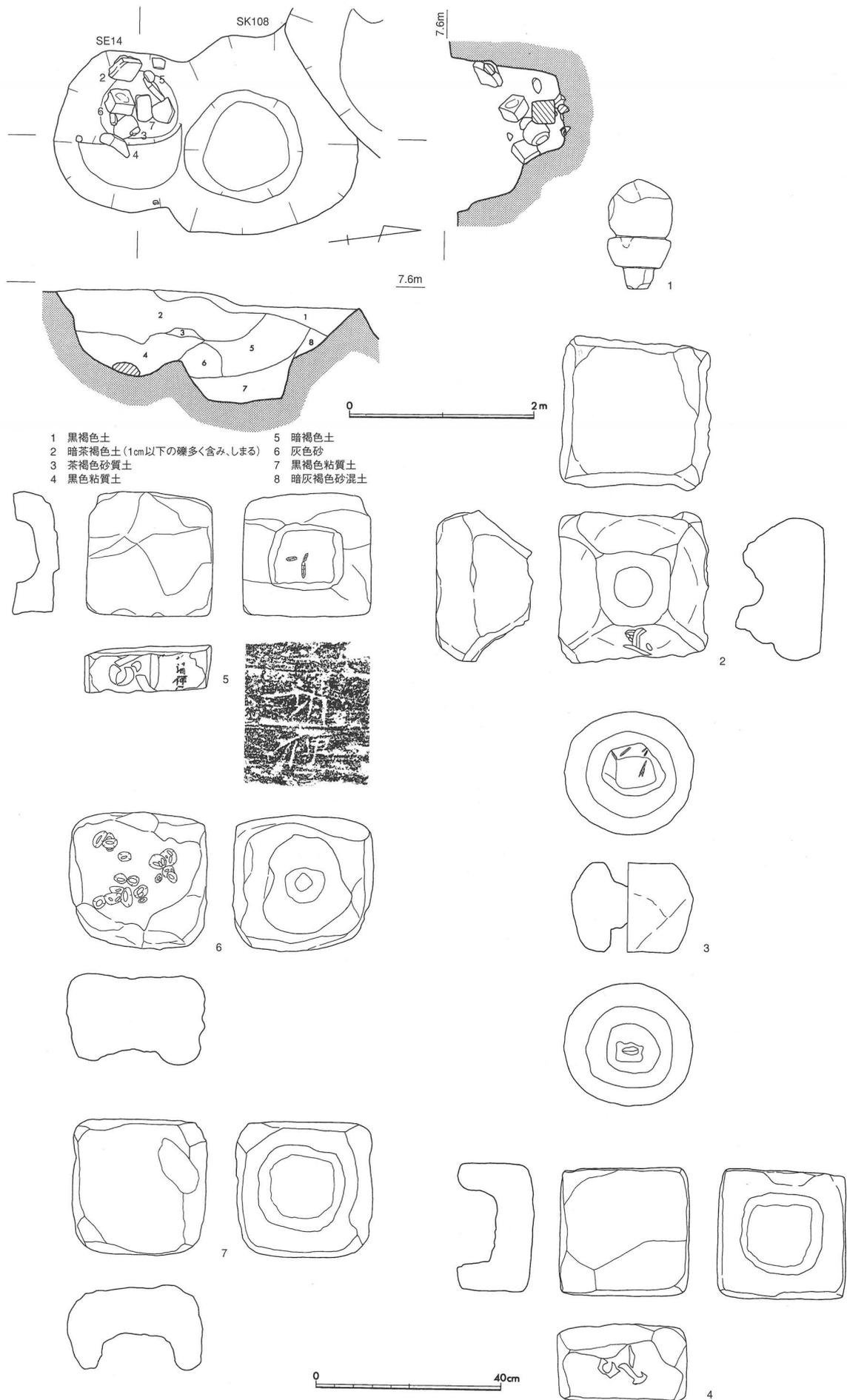
遺物は(第97図)、1の備前V期のすり鉢のほか、糸切り底の土師器、須恵器、陶器等の小片がある。埋土も暗青灰色粘質土が見られるなど近世以降の様相を示していることから、遺構は1の16世紀以降に廃棄されたと考えられる。なお、桶側内には径4~5cm程の竹筒が突き刺してあり、廃棄時の祭祀的痕跡と考えられる。

SE13 (第96図)

調査区の南端部に位置し、SE06に隣接する。遺構は東側が調査区の壁にかかり全容は不明だ



第97図 SE11~14・16出土遺物実測図 (1:4 1はSE11、2~7はSE12、8・9はSE13、10・11はSE14、12~14はSE16)



第98図 SK108・SE14、出土五輪塔実測図 (1:60、遺物1:12、拓影1:3)